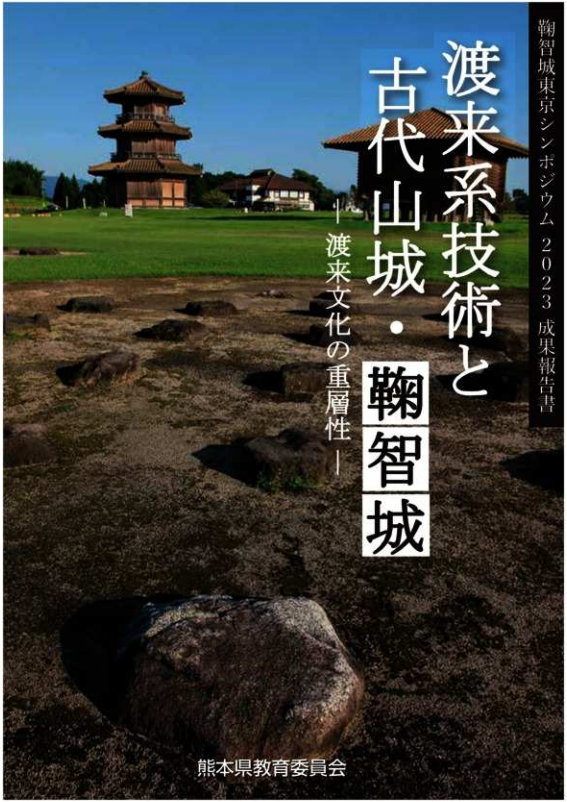


鞠智城東京シンポジウム　２０２３　成果報告書

渡来系技術と古代山城・鞠智城

―渡来文化の重層性―

熊本県教育委員会

鞠智城東京シンポジウム２０２３ 成果報告書

渡来系技術と古代山城・鞠智城

――渡来文化の重層性――

シンポジウム概要

第17回 鞠智城東京シンポジウム

渡来系技術と古代山城・鞠智城

――渡来文化の重層性――

一　開催日時等

日時：令和五年十月一日（日）

会場：明治大学アカデミーコモン アカデミーホール

（東京都千代田区神田駿河台一―一）

主催：熊本県、熊本県教育委員会、明治大学国際日本古代学研究クラスター

後援：文化庁、明治大学社会連携機構、熊本県文化財保護協会、山鹿市教育委員会、

菊池市教育委員会、菊池川流域古代文化研究会、肥後古代の森協議会

二　講演等プログラム

・報告①「鞠智城に残る渡来系技術」
　歴史公園鞠智城・温故創生館　館長　長谷部　善一

・報告②「弥生時代の渡来系技術の実像」
　明治大学国際日本古代学研究クラスター　代表　石川　日出志

・報告③「古代山城にみる渡来系技術」
　岡山理科大学　特任教授　亀田　修一

・報告④「朝鮮三国の山城と鞠智城」
　滋賀県立大学　名誉教授　田中　俊明

・パネルディスカッション「渡来文化の重層性」
　コーディネーター　佐藤　信
　パネリスト　石川　日出志
　亀田　修一
　田中　俊明
　長谷部　善一

目次

シンポジウム概要
主催者あいさつ　1
熊本県教育長　白石　伸一　2
明治大学　名誉教授　吉村　武彦　6
報告①　鞠智城に残る渡来系技術　長谷部　善一　9
一　はじめに　10
二　鞠智城に残る渡来系技術　12
（一）選地　12
（二）土塁・城門　14
（三）貯水池跡　16
（四）その他の渡来系技術　17
（五）花崗岩加工技術　18

報告②　弥生時代の渡来系技術の実像　石川　日出志　21
一　比較考古学という視点　22
二　弥生時代の大陸系技術　24
（一）土器にみる大陸系技術　25
（二）金属器製作技術の導入　31
（三）土木・石積み技術　38
三　古代山城の築造技術の由来は？　44
報告③　古代山城にみる渡来系技術　亀田　修一　45
一　はじめに　46
二　渡来系知識・情報・技術を使用した古代山城の遺跡・遺構　48
（一）選地・周辺遺跡・規模・縄張・高さ・比高差　48
（二）外郭構造　50
（三）内部施設　76
三　渡来系知識・情報・技術を使用した古代山城の遺物　82
四　渡来系知識・情報・技術を使用した古代山城の遺跡・遺構・遺物の系譜　86

報告④　朝鮮三国の山城と鞠智城　田中　俊明　89
はじめに　90
一　夫余　92
二　高句麗の山城　95
三　百済の山城　107
四　新羅の山城　113
五　朝鮮三国の山城と鞠智城　114
パネルディスカッション　117
付　録　参考資料
田中　俊明　41
亀田　修一　19
石川　日出志　9
長谷部　善一　1

主催者あいさつ

主催者あいさつ①

熊本県教育長　白石 伸一

「鞠智城東京シンポジウム」の開催に当たり、主催者を代表して、一言御挨拶を申し上げます。

本日は、御多用の中、御来賓の皆様をはじめ、多くの皆様に御来場いただき誠にありがとうございます。

また、共催をいただきました、明治大学国際日本古代学研究クラスターをはじめ、報告者の皆様、コーディネーターを務めていただく佐藤　信先生など、関係者の皆様の御協力により、このシンポジウムが開催できますことを、心から感謝申し上げます。

さて、本県では、先月九月二十五日に「通潤橋」が国宝に指定されるという、大変喜ばしいニュースがありました。「通潤橋」のような土木構造物が、国宝に指定されるのは全国初です。

これをきっかけに、今後、鞠智城をはじめとする県内の文化財への関心が、ますます高まることを期待しています。

鞠智城は、七世紀後半の東アジアの政治的緊張の中で、ヤマト政権により

築かれた古代山城のひとつです。また、『続日本紀』など六国史（りっこくし）にも記載がある重要な遺跡です。

本県では、平成十六年の国史跡指定以降も継続して調査研究を進めており、近年では深迫門（ふかさこもん）の構造解明を目的とした発掘調査を実施しております。

その他、鞠智城では、史跡の保存と活用に関する取組みとして、史跡整備や近隣の学校をはじめとした関係機関と連携した普及・啓発活動などを行っております。

今回のシンポジウムは、鞠智城の学術的価値を高めるための調査研究の一環として毎年開催しており、今年で十七回目となります。

近年は新型コロナウイルス感染症の影響により、熊本県内で感染対策を講じながら開催して参りましたが、平成三十年度以来、五年ぶりに東京で開催することができました。

今回は、「渡来系技術からみた古代山城・鞠智城」をテーマに、四名の研究者から、弥生時代以来の渡来系技術に注目して、御報告をいただきます。

また、パネルディスカッションでは、会場の皆様方と一緒に鞠智城の渡来文化の重層性について考察を深めて参りたいと思います。

このシンポジウムを通じて、皆様の鞠智城に対する理解が深まるとともに、学術的価値が更に高まることを期待しております。御来場の皆様におかれましては、どうぞ最後までお楽しみください。

また、是非鞠智城においでいただき、熊本にできるだけ長くお泊りいただきまして、熊本の豊かな自然や美味しい食べ物を存分に御堪能いただけますと幸いです。

最後になりましたが、本日、御参加いただきました皆様方の御健勝と御活躍を心から祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。

主催者あいさつ②

明治大学 名誉教授　吉村 武彦

皆様、本日はようこそ明治大学にいらっしゃいました。心から歓迎いたします。

ただ今紹介いただきました吉村です。国際日本研究クラスター代表の石川日出志代表が報告されるため前代表である私が代わって挨拶を申し上げます。

この数年間はコロナ禍のために東京における鞠智城シンポジウムは開催できませんでした。そのため熊本におきまして二〇二〇年度はネット配信のシンポジウム、その後の二年間は対面でのシンポジウムが開かれてきました。ネット配信のシンポジウムも遠隔地で見られるといったメリットがあるわけですが、臨場感がなく、報告内容を同じ空間で共有できないという問題があります。また、シンポジウム後にお互い感想を述べあうという機会もありません。

こうした意味におきましては、本日の対面式のシンポジウムが東京で開かれることは大きな意味があります。しかもコロナ禍を挟んでこれだけ大勢の方が来られている。私も大変うれしく思っております。

本日は渡来系技術をテーマにいたしますが、ご承知のように古代ここは武蔵の国でありますけれども、朝鮮半島系の高麗郡と新羅郡が設置されています。今、両方とも埼玉県にありますが、渡来系住民が多いのが特徴です。当然、彼ら彼女らが持っている技術が伝播しているのが間違いありません。

また、東国と九州との関係は、辺要地への防人の出身地として、筑紫との深い関係はあります。鞠智城に関する文字資料は極めて少ないのですが、考古学資料を考慮しますと、まだまだ研究する余地はあると思います。

東国との関係で言いますと、布の生産に使う紡錘車というものがありますけれども、その問題があります。東国では埼玉県の北の方と群馬県で、この紡錘車に文字を刻むという習慣が地域的におこなわれています。おそらく信仰とかかわりがあると言われていますが。ところが興味深いことに、肥前の国にあたる佐賀県と長崎県から文字が記された紡錘車が出土しております。この習慣は筑紫にはないので、おそらく群馬県の高島英之さんが述べておられるように防人と関係していると思われます。そのとおりなのですが、文字には東国との関係は書かれておりません。しかし紡錘車に文字を刻むという事を介して東国と肥前国の関係が分かる一例となっております。

残念ながらちょっと私が知らないだけかもしれませんが、肥後の国ではまだ、文字が書かれた紡錘車は見つかってないのではないかと思いますけれども、新たに研究を発展させる可能性があるかもしれません。我々が集成しております墨書土器でありますけれども、熊本県の墨書土器は四百数十点あり

ます。鞠智城と関係するものは残念ながらないのでありますけれども、菊池市からはかなり出土しております。すべて出土した墨書土器が報告されているわけではないようですけれども、これから木簡だけではなく墨書土器にも注目をしていきたいと思います。

さて、コロナ禍による中断はありましたが、今年度、久々に明治大学で鞠智城東京シンポジウムが開催されますのは明治大学の社会連携・地域連携の発展にとって栄誉なことであります。明治大学と熊本県の連携が強化されることを祈念してあいさつに代えさせていただきます。本日はよろしくお願いします。

報告①　鞠智城に残る渡来系技術

講演者紹介

長谷部 善一（はせべ よしかず）

熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館 館長。

専門は日本考古学（古墳時代）。学芸員。

平成三年四月に熊本県教育庁に入庁。文化課、装飾古墳館、岩手県教育委員会（併任）等を経て、**令和四年四月**より現職。

鞠智城に残る渡来系技術

歴史公園鞠智城・温故創生館 館長　長谷部 善一

本日は鞠智城シンポジウムにお越しいただきありがとうございます。

先ほどまでのころう君とくまモンのステージが盛りを見せており、これはちょっとしゃべりにくいのではないか思っておりましたけれども、頑張っていきたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

一　はじめに

まずは、五年ぶりの東京での開催になりますので、このシンポジウムについて御紹介します。

このシンポジウムは、鞠智城跡の史跡指定を記念して平成十六年五月に熊本県鹿本郡菊鹿町（当時）で第一回目を開催しました。その後、平成二十一年（二〇〇九年）七月から、鞠智城研究を深めることを目的に、国内の歴史学研究の一大拠点である東京で「鞠智城」をキーワードとして、日本古代史並びに朝鮮古代史など各分野の研究者の方々と鞠智城跡の歴史的意義と課題を考えてきました。その中で、全国に向けた鞠智城の知名度向上にも取り組んできました。

その後、東京での開催はもとより大阪、京都、福岡などの都市圏でもシンポジウムを開催し、これまで通算十六回のシンポジウムを重ねてきました。

本年度は第十七回となり、平成三十年（二〇一八年）十月以来、五年振りとなる東京での開催で、「渡来系技術と古代山城・鞠智城」とテーマを掲げています。そして、昨年度のテーマ「渡来系技術から見た古代山城・鞠智城」をさらに深掘りするため、サブタイトルに「渡来文化の重層性」を付しています。

昨年度、登壇いただいた吉村武彦先生（明治大学名誉教授）から、「渡来系の技術の再評価が必要」との指摘があり、「在来系か渡来系かという二分法の議論以前に、渡来系とは何かを見直す議論が必要」との提言をいただきましたので、今年度はここに絞って議論を深めたいと思います。

報告が終わった後には、佐藤信先生（くまもと文学歴史館館長・東京大学名誉教授）のコーディネートのもと、本日登壇いただいた講師の方々とディスカッションを行い、鞠智城に残る渡来系技術について理解を深めてまいります。

二　鞠智城に残る渡来系技術

それでは、鞠智城に残る渡来系技術とは何か、というところで話を進めてまいります。『日本書紀』には「長門国に城を築かせ、筑紫国に大野城と基肄城を築かせる」という記述が出てまいります。六六三年の白村江の戦いで唐・新羅連合軍に敗れた倭国のヤマト政権は、唐・新羅の侵攻を恐れ対馬の金田城を始め、亡命百済官人の築城指導のもと大野城・基肄城などの古代山城を築きます。

大野城・基肄城と同時期に築かれたとする鞠智城では、これまで熊本県による発掘調査で、渡来系技術について多くの事例が示されています。ここからは鞠智城に残る渡来系技術について説明をします。

（一）選地（図1）

私が鞠智城に残る渡来系技術の一つとして最初に考えるのは「選地」です。なぜこの地が古代山城の築城場所として選ばれたのかを考えていきます。

今、お示ししたところが鞠智城になります。鞠智城は、古代「遠の朝廷」と呼ばれていた大宰府から直線距離で六十二キロメートル南に離れています。このことから様々な説が出されていますが、大宰府との関係からみると、唐・新羅による国内への侵攻があった際、主戦場となる大宰府やその周辺に展開する大野城・基肄城へ武器や食料等を供給する兵站基地としての役割を担っていた城と考えられます。

鞠智城は、古代から大国であった肥後国の一大穀倉地帯である菊鹿盆地やその南に広がる熊本平野を

一望する位置に位置しています。また、西海道や大分方面への支線となる官道の存在、さらにそこから派生している車路等、鞠智城は交通の要所にもあたるため古代山城としての存在意義があったのではないでしょうか。

次に、鞠智城内に入り、さらに詳しく立地を見ていきます。これまでの発掘調査で建物群が多く確認されている米原・長者山地区を中心に、大きく「コの字形」に谷が城を囲んでいます。さらに南側と西側において版築土塁が廻り、今知られている鞠智城の姿が復元されています。

私たちは日頃から通勤や移動などで鞠智城を菊池市や山鹿市方面から眺めるのですが、未だに鞠智城がこの丘陵の中でどこにあるのが分かりません。よく、鞠智城においでになる方々からも「鞠智城の場所がどこか分からない」と指摘をいただいていることころです。

私は、この外から確認しづらいところに鞠智城の特徴

図 1

があると思います。鞠智城は城内に入り、多くの遺構が確認されている米原地区に立って初めて、城と言う認識に立つことができます。後で亀田先生が紹介なさると思いますが、岡山県総社市の史跡鬼城山のように、外から見てはっきりと城とわかるような城・地形ではありません。鞠智城の場合は、もしかするとわざと外から見えないように作られているのではないかと私は考えております。

（二）土塁・城門（図2）

それでは次に、西側土塁について説明します。現在は細い尾根状の地形になっております。そこでは、これまでの発掘調査で「版築」技術を用いた土塁が確認されています。

版築　そもそも版築の技術は、もともと国内にあった技術ではありません。版築技術の始まりは中国の都城を構

図2

図3

成する城壁を作る技術として成立し、その後、朝鮮半島を経由して国内に持ち込まれたものと考えられています。その技術が鞠智城の土塁にもちいられており、発掘調査によって確認されております。

それでは次に、鞠智城の城門を含む城全体について考えます。当時、古代山城を築き始めるまでは国内には城という思想そのものがなかったのではないかと考えています。考古学的に見ても、縄文時代、弥生時代の集落以上の面積を防衛だけの目的で土塁・城門で囲う構造物は知られていません。「城を構える」これ自体が渡来系の思想、技術と言って良いと考えます。(図3)

次に、鞠智城の城門について説明します。これは池の尾門跡です。城内で確認されている三つの門のうちの一つです。ここでは城門に取りつく石塁が確認されており、城門と併せて外部からの侵入を防ぐ施設があったことが発掘調査により確認されています。

（三）貯水池跡

続いて、鞠智城に残る渡来系の思想、渡来系技術のもと作られたのが貯水池です。貯水池を作る技術は、古墳の周濠や古代東アジアに起源をもち、補強土工法を採用した狭山池（大阪府）など農業用水のための貯水池などの事例があります。

古代山城のうち国内で知られている貯水池の事例は、現在のところ鞠智城だけです。近年、鞠智城の貯水池研究の一環で、韓国の古代山城に残る集水施設との比較研究に関する論文が出され、城内での飲料水の確保とともに、祭祀に関する遺構との見解も示されています。

銅造菩薩立像　貯水池跡の発掘調査において「銅造菩薩立像」が出土しています。当時、国内には仏教が伝来していたとはいえ、古代山城で仏像が出土するというのは国内で初めての事例です。この仏像についても、近年、美術史学の方面からの研究もなされ、山城の祭祀に関す

図４

る遺物であることや、百済系渡来人の念持仏であった可能性が改めて示されています。（図4）

（四）その他の渡来系技術

石垣　次に、鞠智城に残る渡来系技術として「石垣」があります。古代山城における石積みは、渡来系技術者が築城指導をしたと確認される大野城（福岡県太宰府市ほか）、基肄城（佐賀県基山町ほか）などで谷部を閉塞する箇所や水門周辺に使用された技術です。鞠智城では、まだ本格的な調査は実施していませんが、他の古代山城と類似する石積みが確認されています。

八角形建物　鞠智城で最も渡来系の思想を示しているとし、渡来系技術を示す遺構として「八角形建物」があります。この遺構も国内の古代山城には事例がなく、韓国の二聖山城（にせいさんじょう）などで多角形建物の事例があることから建築の思想・技術の源流を朝鮮半島に求めることができます。

瓦　出土遺物の観点からは、先ほど「銅造菩薩立像」に言及しましたが、その他に単弁八葉蓮華文の「軒丸瓦（のきまるがわら）」があります。瓦の文様や製作技術には、朝鮮半島との関係を理解する上で重要なヒントが残されています。鞠智城跡出土の軒丸瓦は、これまで百済系と整理されてきました。しかし、本日この後、報告なさる亀田修一先生の近年の研究で、鞠智城出土の軒丸瓦の文様や瓦当の上半分に丸瓦を被せる製作技法等から新羅系の瓦との見解も示されています。（図5）

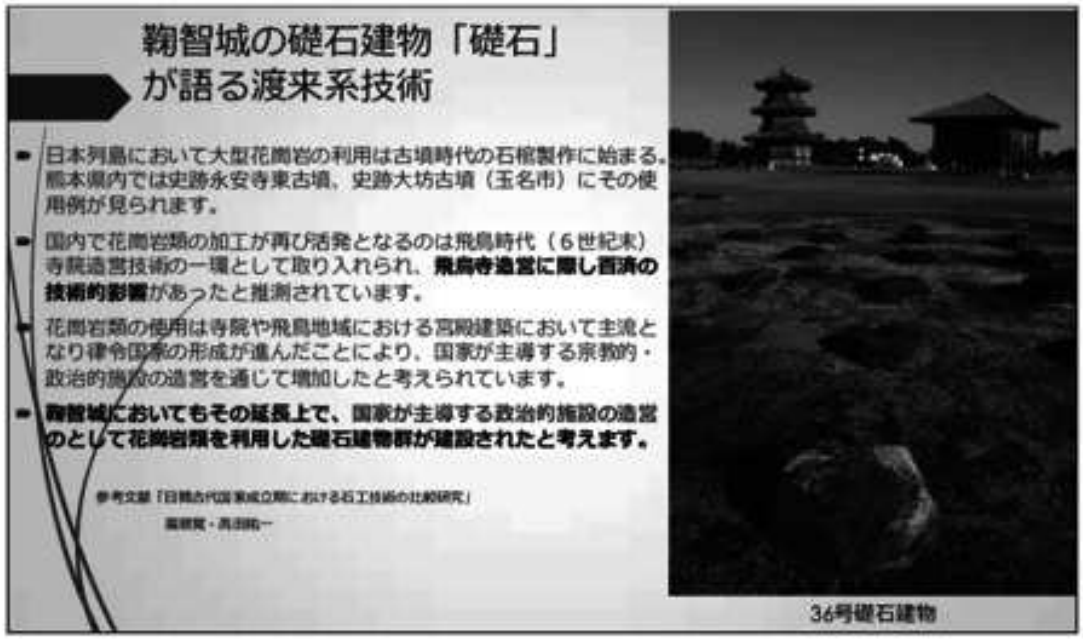


図５

（五）花崗岩加工技術

最後になりますが、最近、私が注目しているのが、鞠智城の礎石建物に使用されている礎石の石材です。

鞠智城では、礎石建物が八世紀第１四半期後半～八世紀第３四半期（鞠智城Ⅲ期）に作られ始めます。この時期、鞠智城は、築城当初の城としての構えから、最低限城としての体面を保ちつつも、米の備蓄のための施設へと変化を始めた時期に当たります。この時期の代表的な礎石建物として四十九号建物があります。この時期、他の礎石建物より規模が大きく桁行九間（二十一・六メートル）、梁行三間（七・二メートル）の総柱建物があります。この建物では本来は四十基の礎石があるはずですが、現存する石材は二十九基で、うち二十八基に花崗岩の石材が使われています。一基のみに安山岩が使用されています。すべての石材が残っているわけではありませんが、おおよその使用石材の傾向はこれから読み取れると考えています。

鞠智城を地質学的に見ると、南側土塁南端付近から池の尾門跡を経て西側土塁以面にかけ花崗岩を産出する地域になります。この地域以外の土地は、阿蘇に起源をもつ溶結凝灰岩が台地を形成しており、深迫門跡、堀切門跡付近には凝灰岩崖を観察することができます。しかし、池の尾門跡付近の小河川流路内では、花崗岩が砕け流れ出た砂鉄の沈殿層が見られるなど、地質の違いを見ることができます。

日本列島における大型の石材利用や花崗岩の利用は、古墳時代の石棺製作というところから始まっています。熊本県では玉名市にあります永安寺東古墳や大坊古墳（玉名市）で、横穴式石室の天井石、楣石など重量が掛る石材にのみ花崗岩が使用されています。

花崗岩が国内で本格的に使用されるのは、飛鳥時代の寺院建築の一環で取り入れられ、飛鳥寺（奈良県明日香村）の造営に際し、百済の技術者が関与したことが文献に残されています。その後、花崗岩の加工技術を駆使し、基壇を造り礎石を花崗岩で作るという行為が飛鳥時代に寺院建築や都城建設において主流となり、その後の律令国家の形成とともに普及が進んだとされています。

鞠智城においてもその延長線上で、東アジアの緊張に応じた政治的判断により、国家が直接関与し築城された礎石建物への改築に際し、花崗岩が積極的に利用されたものと考えています。

鞠智城周辺における阿蘇起源の溶結凝灰岩や安山岩の存在については先に述べました。加工しやすいという面ではこれらの石材に勝るものはありません。しかし、ヤマト政権が政治的目的で築造する建物群には既に都で利用され、それも格式の高い石材とされる花崗岩を積極的に利用することは十分にあり

得ると考えます。

まだ研究の途上ですが、鞠智城のⅢ期（八世紀第1四半期～八世紀第3四半期）に掘立柱建物柱から礎石建物へと改築が始まりますが、当初は礎石建物群の礎石の大半は花崗岩を多く利用します。しかし、時期を経てⅣ・Ⅴ期（八世紀第4四半期～九世紀第3四半期・九世紀第4四半期～十世紀第3四半期）となるに従い、鞠智城周辺では採集の難しい石材である安山岩、礎石に利用できるような硬質の凝灰岩の利用率が高くなる傾向があるようです。この石材の利用の傾向から見ると、Ⅲ期を境に律令国家の直接的な関与から、地方が監理・運用する施設へと変化していた可能性も指摘できると思います。

Ⅳ期以降、建物群の新築、修理等の管理が国から地方に移管されたことを受け、管理する立場に立った地方勢力は生活の基盤となる地域で産出する日頃から利用し慣れ親しんだ石材を鞠智城内に持ち込み、礎石建物の礎石として利用したのではないでしょうか。

後世、近世城郭を築く際に石垣築造の際に、工事を担当した範囲の石垣石材表面に印をつけた痕跡が今も確認されます。それが古代山城鞠智城では礎石石材の違いに現れたものではないでしょうか。

それでは、私からの鞠智城に残る渡来技術ということについては、これで終わらせていただきます。

報告②　弥生時代の渡来系技術の実像

講演者紹介

石川　日出志（いしかわ　ひでし）

明治大学　教授。専門は日本考古学（主に弥生時代）。修士（文学）。明治大学大学院文学研究科博士課程中退。明治大学文学部助手、専任講師、助教授を歴任して現職。

弥生時代の渡来系技術の実像

明治大学国際日本古代学研究クラスター 代表　石川 日出志

一　比較考古学という視点

皆さん、こんにちは。明治大学国際日本古代学研究クラスター代表の石川日出志です。どうぞよろしくお願いします。

私は、「弥生時代の渡来系技術の実像」という論題でお話します。なぜ古代鞠智城のシンポジウムに弥生時代の話をするのか。その理由を最初に簡潔に説明します。

考古学の世界にはいろんな研究のアプローチ法があって、その一つに比較考古学という視点があります。それは時間（時代）と空間（地域）が隔たった、つまり直接相互に関係することはなさそうな対象どうしを比較して、それ自体を掘り下げるだけでは気づかないような事柄・問題をつかむ（気づく）、という手法です。その場合に注意が必要なのは、どうしても私達の習い性なのでしょう、物事を比較するときに似たところに目が向いてしまい、それらを直接関連づけてしまい

がちな点です。しかし比較考古学の観点では、違うところに注目して「なぜ違うのか」に目を向けることが大事だと思います。

私は弥生時代研究が本職です。私はその弥生時代研究でも比較考古学的な手法を、なるべく大事にしようと考えてきました。そのきっかけは、私が弥生時代研究を始めたのが、東日本や東北日本の側から西日本を含めた弥生時代研究に入ったことにあります。いわばマイナーな世界（地域）から西日本＝メジャーな地域の研究へと向かう道筋をたどりました。その結果、弥生時代研究の中にも比較考古学的な視点を採用するようになったんです。通常は、弥生文化の典型とされる西日本と比較して、東日本の特徴に目を向けます。そうすると西方は文化が高くて東方が低いということになりがちです。そうではなくて、その違いに目を向けて、それをプラス評価することが必要だろうと思うのです。こうした東・西の比較だけではありません。弥生時代は、時間的には一千年近い経過があるのですから、ある地域をとり上げても、また地域間の関係をとり上げても、長い時間経過のなかでかなりの変化がみられます。それを相互に比較して違いを見出すことが大事だと思っています。

本日はその比較の幅を、短く見積もって四百年余り、場合によると一千年ほどに広げてみようという次第です。その中で、今日のテーマである大陸から導入された技術がどう受容され、そして変容していったのか、どう根づいたのかなどを考えてみましょう。

二　弥生時代の大陸系技術

弥生時代を学んでいますと、日本列島を舞台とする歴史を通覧・通観したときに「弥生時代は非常に大きな時代の転換期なのだ」という思いを強くします。その理由は三つあります。一つには、自然の恵みを巧みに管理・利用する狩猟採集の縄文時代社会から、自然環境に積極に働きかけ、改変をし、そして生産＝稲作農耕社会を形成する。稲作という新たな生業の採用とそれに伴う自然との関わり方の大きな転換です。二つめは、そういう生業とその技術体系の変更を基礎として、本格的な稲作農耕社会を形成し、人間社会の仕組みを変え始め、やがて数百年後に法制度に基づく古代国家形成に進む。そうした歴史の道へと歩み始める段階だという点です。三つめは、これらのことによって日本列島の社会に、九州・本州・四国のいわば「中の文化」と、北海道方面の「北方の文化」、さらに、沖縄方面の「南の文化」の三つが併存するようになります。これらはやがて、中の文化は古代国家形成へ、北の文化はアイヌの人々の文化世界へ、南島・沖縄方面は琉球世界へ、という歴史の道へとつながります。これらのことから、弥生時代は日本列島を舞台とする歴史の転換期なのだと理解・評価しているのです。

このように弥生時代に歴史的な転換が起こるのにもっとも大きなきっかけになったのは、朝鮮半島やアジア大陸の社会との間で始まった交流・交渉、そして獲得した技術でした。縄文時代にも朝鮮半島と北部九州との間で人・情報・技術の往来はありました。しかし、それは朝鮮海峡を挟むごく狭い地域に限られていて、それぞれの社会に与えた影響というのは当初はそう大きなものではありませんでした。

ところが、こうした朝鮮・対馬海峡を渡る限定的な往来が、次の弥生社会以後の新たな歴史展開を準備することにもなりました。海峡一帯で漁撈民として活動し行き来する人たち、海が得意な人々の仲介によって、海峡を越えて人・情報・技術がもたらされ、それが日本列島に根付くことによって、列島の社会に大きく展開し始めます。

本日はその中でも大陸系技術をキーワードにして三つの点に触れます。一つ目は、日常生活で使う土器です。最もベーシックな技術と言えます。二つ目は、当時の最先端技術を代表する金属器を作り、使い、扱う技術です。三点目は、これは古代山城との比較という意味から取り上げてみるのですが、いくつかの土木技術です。

（一）土器にみる大陸系技術

弥生土器の始まり

まず、土器にみる大陸系技術です。基本的に弥生時代の土器＝弥生土器は各地でだいぶ特徴が異なります。これは、前段階の縄文土器が地域ごとに異なることが基盤となって弥生土器が形成されたことに由来します。しかしながら、特に九州や西日本の弥生土器が形成されるのに、大陸に由来する土器製作技術がかなり重要な位置を占めています。弥生土器の始まりについては、大きな技術的な転換が起きています。九州を起点として西日本一帯に、そのことが確認できます。

図1は今から三〇年あまり前に、立命館大学の家根祥多（やねよしまさ）さんが作成された図です。左側の列が縄文土器で、縄文時代から弥生時代の土器の移り変わりを示します。右側は朝鮮半島南部の土器の変遷です。家根さんは、左側の土器3から弥生土器と扱っています。そこに右側の土器8から4・3へと矢印が付されています。朝鮮半島の土器8にみられる製作技術が北部九州にもたらされ（土器4）、それが定着して土器3が生まれ、それがそのあとの弥生土器5・6へと継承された。この図で、弥生土器の始まりを模式的に明瞭・明確な形で示しました。

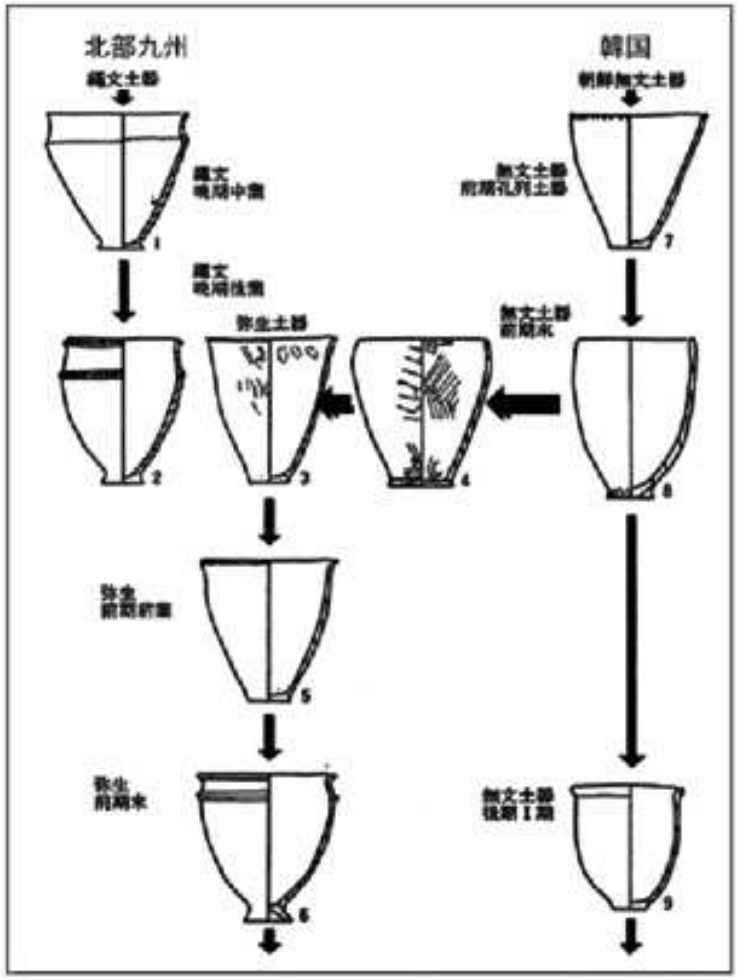


図1　弥生土器形成期に半島から土器成形技術が導入された
（家根祥多1987「弥生土器のはじまり」季刊考古学19）

この朝鮮半島に由来する土器製作技術は何か。大きくは二つあり、土器の形を作る技術（成形）、もう一つは土器の表面を整える技術（整形）です。土器の成形技術とは次のことを指します。縄文土器

は、土器の形を作るときに、粘土を掌で押さえ転がして、親指より太めの粘土紐を作り、それを輪にして重ねて土器の形を作っています（土器1・2）。一方、朝鮮半島では、土器を見ると縦幅四～六センチメートル間隔でひび割れが入っている例が多い。これは上下幅四～六センチの粘土の板をぐるっと回して積み重ねて土器の形を作っていく。断面をよく観察すると、粘土の帯を上下重ねるときに、その接合面を外側に傾斜させるという外傾接合という技術だと分かります。この粘土の帯を用い、接合面を外傾させるという朝鮮半島の土器作りの技術が、北部九州に定着して弥生土器が形成される。

もう一つは、仕上げに土器の表面を板で撫でて表面を整える手法で、これをハケメ整形と言います。羽子板状具で器面をたたいて成・整形するタタキ技法も採用されたようです。こうした成形・整形技術が、朝鮮半島から日本列島に導入され、そし

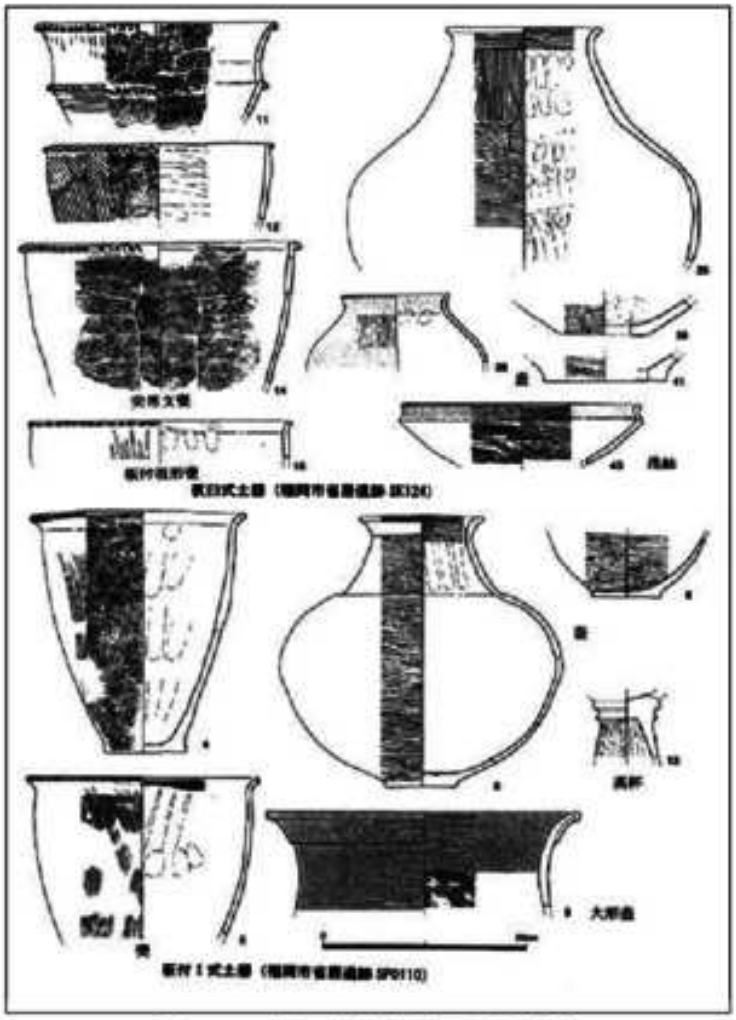


図２　夜臼式と板付Ⅰ式土器
（『雀居７』2003）

て在来の土器づくりの技術と融合しつつ根付き、そしてその後の弥生土器が展開していくという過程をたどります。もちろん朝鮮半島に由来する技術だけではなくて、在来の縄文土器以来の技術もいくつか認められます。一番分かりやすいのが、土器の壺の場合ですと、口と頸、頸と胴の間に段差を作り出す。朝鮮半島にもよく似た形の壺がありますが、こういう段差はつくりません。それから、煮沸具である甕の口縁部の端を細かく刻む。これも縄文以来の手法です。ですから、弥生土器というのは縄文在来の技術と、大陸・朝鮮半島由来の成形と整形技術とが融合して形成されたものです。図2は福岡市雀居（ささい）遺跡の弥生前期初頭の土器群で、上段は在来の技術による夜臼式土器、下段は朝鮮半島系の成・整形技術を採用した板付Ⅰ式土器です。

土器製作技術の変化

このあと、大陸からの土器作りの技術がどう受容され、どう根づくのかを簡単に比べてみましょう。

先ほどの土器は、西暦で表記すると紀元前八～九百年前や紀元前六、七百年前とか、意見のずれがありますが、弥生時代早期～前期初頭の段階です。そのあと、およそ紀元前三、四世紀頃の前期末、中期初頭に、もう一度朝鮮半島に由来する土器が北部九州を中心にかなり明瞭に認められるようになります。図3は熊本市八ノ坪遺跡から出土した資料です。左上の土器は、口がすぼまって、口縁部の外側に断面円形の粘土紐を周りに巡らして、一か所を指で押さえて剥がれ落ちないようにしています。これを

円形粘土帯土器と呼びます。左端中央の壺は胴部に牛の角二本を合わせたような取手がつきます。これらは朝鮮半島の水石里式と呼ばれる土器群です。では、この種の土器が北部九州のどの遺跡でも出るかというと、熊本市の八ノ坪遺跡や、佐賀県ですと小城市の土生（はぶ）遺跡とか、特定の遺跡に集中的に出土するだけです。

図3の牛角形把手付の壺の右側の土器6は円形粘土帯土器を模倣した甕ですが、こうした模倣品が周辺の遺跡に少し広がる程度です。先ほど挙げた弥生時代初めは、朝鮮半島に由来する土器製作技術が土器として根づいて、どこでもそれが製作され、普及していく状況なのですが、それとは全く違います。

図3の八ノ坪遺跡や佐賀県土生遺跡では、銅剣・銅矛・銅戈や小銅鐸など朝鮮半島型式の各種

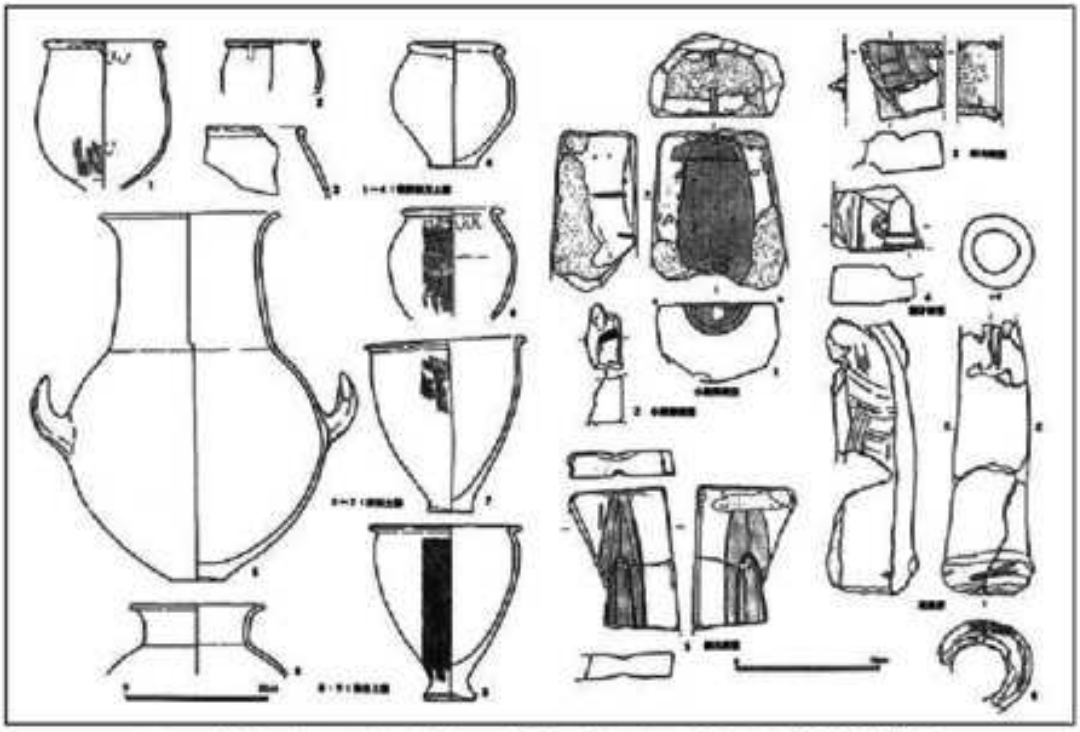


図3 熊本市八ノ坪遺跡の朝鮮系無文土器と青銅器鋳造具
（『八ノ坪遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ』2005－08）

青銅器を盛んに鋳造していますが、そうした遺跡で朝鮮半島系の円形粘土帯土器が大量に出てくる例が目立ちます。

それから朝鮮半島の韓国南部でも、慶尚南道南端の三千浦市勒島遺跡や金海市亀山洞遺跡・釜山特別市莱城遺跡など、数遺跡で北部九州の弥生土器がまとまって出ています。他の遺跡ではごくまれに見つかるのみです。つまり九州と韓国、それぞれの特定の遺跡で、それぞれの土器がまとまって出土し、そして在来（地元）の土器との折衷、両方の特徴を持つようなものも出るのだけども、それらが広く面的に拡散することはない、という事実があります。それぞれの地域の技術・情報・物資を担い携えた人々が海峡を跨いで往来し、その拠点となった村にその足跡を残した。弥生時代の始まりの段階の渡来系土器製作技術の動きとは、かなり様子が違うことに注目したいと思います。

さらにその後も、弥生時代後期になると北部九州沿岸にある糸島市三雲遺跡群や福岡市西新町遺跡・比恵那珂遺跡などいくつもの遺跡で、楽浪郡や三韓（馬韓・弁韓・辰韓）の地域の土器がまとまって出土します。それは、楽浪郡や朝鮮半島各地の人々がやってきて物資・技術・情報の往来を担ったことを証明します。しかしこれら楽浪土器や三韓土器が特定の遺跡で出土しますが、日本列島の土器の中にその技術や形態・器種が広まるわけではありません。

さらに五世紀になると、四世紀末に遡るという意見も最近有力視されていますが、朝鮮半島南部の陶質土器（半地下式の上り窯で青灰色に焼き上げる土器）が日本列島に導入され、普及します。これは北

部九州と近畿の大阪南部で集中的に生産され、その製品が普及し、やがてその技術が列島各地に定着します。そして、弥生時代土器以来の赤く焼き上げた土師器とこのように青灰色に焼き上げた須恵器の両方を使い分けるという状況が、古墳時代社会全域に広まります。弥生時代初めとはまた異なって、土器作りの新技術が導入され、土器群構成が一斉に転換する、そういう状況が生まれます。

このように、弥生時代初めに見られる朝鮮半島系の土器製作技術が九州に定着しそれが西日本に広がるというのは土器製作技術史という目で見たとき、非常に注目すべき出来事なのです。このことは現在はあまり重要視されていませんが、弥生時代の始まりを考える場合、注目すべき事柄だと思います。

（二）金属器製作技術の導入

青銅器鋳造技術

今日の話題の二つ目は、金属器の製作技術、あるいは扱いです。先ほど弥生時代前期末・中期初頭に朝鮮半島円形粘土帯土器が、北部九州の特定の遺跡で集中的に出土することを紹介しました。この段階から日本列島で青銅器の生産が各地で始まり、その製品が普及していきます。土器や石器は、製品が手元にあり、製品と素材が手元にあれば、ある程度まで模倣することが可能です。土器をつくる粘土も、石器を作る石材も各地で確保できます。ところが、青銅器は、地金を入手することが必要ですが、日本列島では地金がありませんでした。鉱石はあってもそれを精錬する技術がないので、地金を大陸から入

手する。それから、それまでになかった製品を設計・デザインする必要がある。小銅鐸の場合、立体物である銅鐸形をデザインし、その製品をつくるために二つの外型と一つの内型をつくり、その空隙に地金を溶かして鋳造する。さらに、甲張りを取り去り研磨などして仕上げる、という体系的な技術を要します。製品だけみてすぐに作れるものではありません。専門の技術者がいなければ製作も技術伝承もできない。

図4に、日本列島に青銅器が導入される時期の朝鮮半島側にはどんな青銅器があるかを示しました。銅剣・銅矛・銅戈という武器三種類のセット。それから紐を結わく鈕が二・三個つく多鈕細文鏡と呼ばれる銅鏡。これは鏡面が凹んでいて、中国東北部から朝鮮半島にかけて特徴的な鏡です。それから青銅の斧・鑿や鉋（やりがんな）など

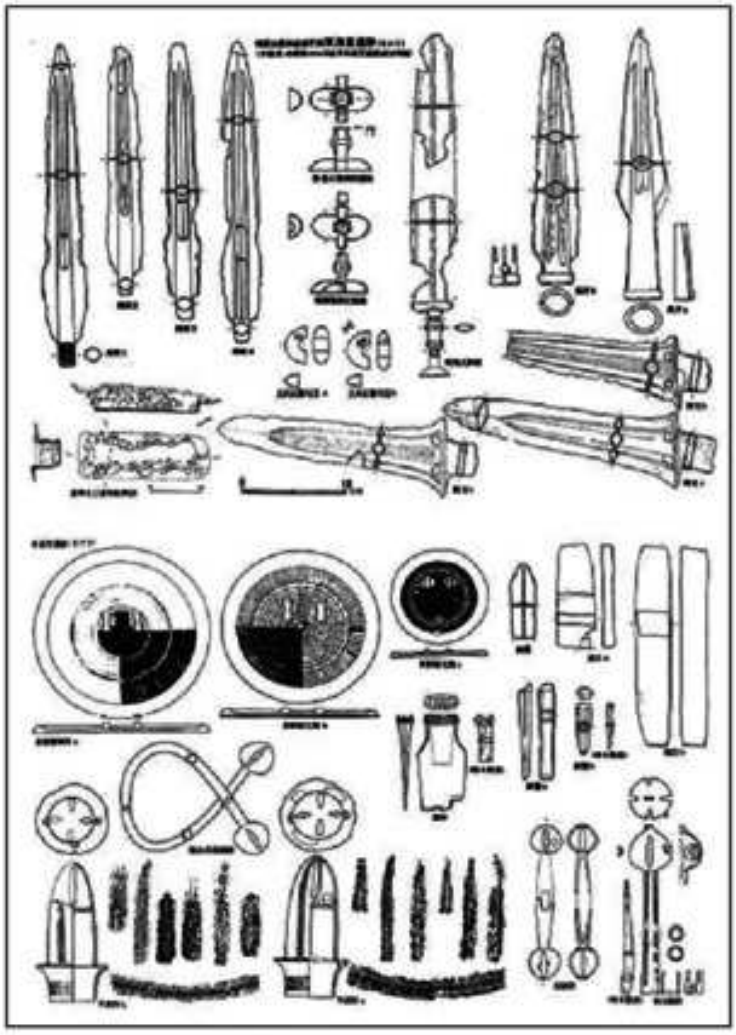


図4　朝鮮青銅器文化第3期の組成
（『咸平草浦里遺跡』1988）

の木工具もあります。それから、儀礼用の器物でしょうが、振ると音響を発する鈴付きの青銅器がセットになっています。

では北部九州でそのうちの何が導入され、また製作されているのかをみると、鈴付きの青銅器以外は揃っていて、武器の銅剣・銅矛・銅戈の三点セット、宗教儀礼用に音響を発する小銅鐸、実用の利器である青銅の鉇、これらは鋳型があるので製作されていることが分かります。最近では多鈕鏡鋳型の破片も出ていますので、鏡もごく少数ですが作られたことが分かっています。しかし、鈴付きの青銅器は作られていないし、製品も一例もない。これはどういうことかというと、製作技術が違うのですね。この銅矛とかは石の鋳型二枚を合わせ、中を空洞にするための中子を固定して、その隙間にドロドロに溶けた銅を流して製作します。しかし鈴付きの青銅器はそうはいきません。中の鈴玉を土で包んで、それを中に組み込んだ鋳型でなければできない。銅矛などよりも複雑な鋳造技術が必要ですが、それが導入されていない。当時の青銅器鋳造技術という最先端ジャンルの基本的な技術は導入されたのですが、難易度が高いレベルの技術は脱落しているわけです。小銅鐸などは石の鋳型ですし、銅剣・銅矛・銅戈も石の鋳型で作られていますが、最近では土の鋳型でも作っている例もあると分かってきました。

青銅器の組成　ここまで作る技術を見てきましたが、使うという観点から見てみます。朝鮮半島ではさっき言いましたとおり、武器、祭祀具、それから利器の三点セットです。

一方、北部九州の例を見てみますと、図5は福岡市の吉武高木遺跡の3号木棺墓の副葬品です。銅

剣・銅矛・銅戈の武器三点セットが揃っていますし、小型の多鈕細文鏡もともなっています。この遺跡では見つかっていませんが、銅鑿や銅鉇という青銅利器も少数ですがあります。けれども、それ以外のものは、小銅鐸とか鈴付きの青銅器、つまり鳴り物類はまったくお墓には入っていません。したがって、朝鮮半島の青銅器群全体、その体系を受容したのではなくて、その一部を受容しているわけです。それは何を意味するのでしょうか。私は、当時朝鮮半島由来の、なるべく最先端技術で器物を製作はするものの、その青銅器群を用いる有力者とそれを見る一般の人々の認識に、大陸と日本列島とでは大きな違いがあるのだと見ています。朝鮮半島では青銅の武器・祭器・利器が一括して有力者の墓から出てきますので、一括して保持されていた。そして集団構成員の村人に繰り返し誇示され、儀礼を執行することによって、保持者・有力者の社会的なステイタスが担保され、維持されるという状況だった。ところが北部九州ではその基本形が崩れていて、青銅器を保持する有力者の副葬品では、武器類は重視するけれども他のものは脱落する。それから北部九

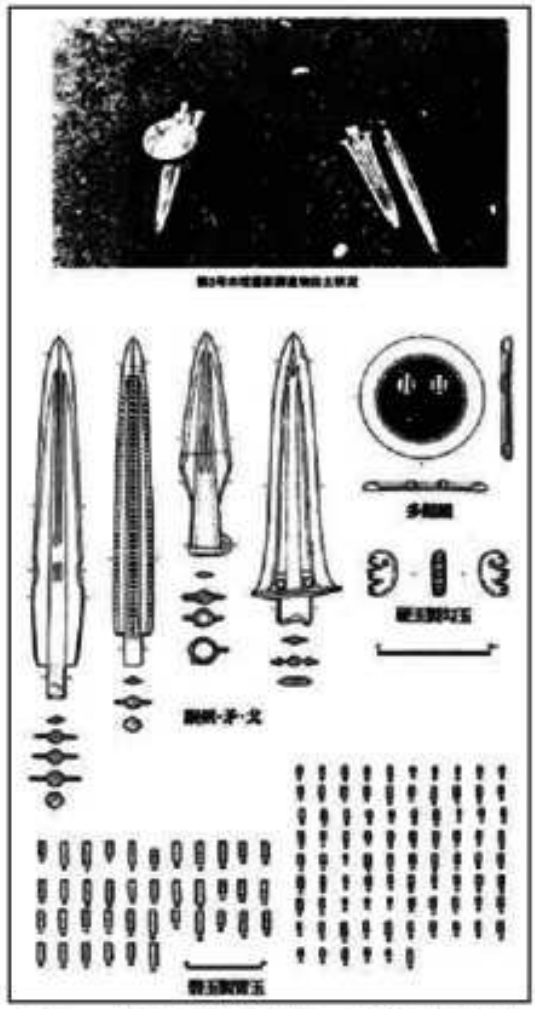


図5　福岡市吉武高木遺跡3号木棺墓の副葬品（『吉武遺跡群Ⅷ』1996）

州では、始めは武器の銅剣・銅矛・銅戈が三点セットだったのですが、その三点セットすら崩れ分離して、銅矛のみが優位な扱いを受けるようになっています。

この青銅器製作技術が北部九州に根づき、それが近畿圏に広がります。図6は九州から近畿圏へ、銅鐸や銅剣・銅戈が波及する様子を示しています。この図にはありませんが、中・四国でも銅剣が定着します。北部九州ではやがて銅矛が重要視されるのですが、中四国地方では銅剣が重視される。近畿圏では鐸、鳴り物の銅鐸が重視される。それぞれの地域で、朝鮮半島由来の青銅器セットではなく、特定の器物を選択して儀礼用の道具として扱っており、随分朝鮮半島と違います。要するに、日本列島、倭国内の各地域社会の中で、朝鮮半島に由来する青銅器群が分解し、地域ごとに特定の青銅祭器が重視されるという現象があります。青銅器

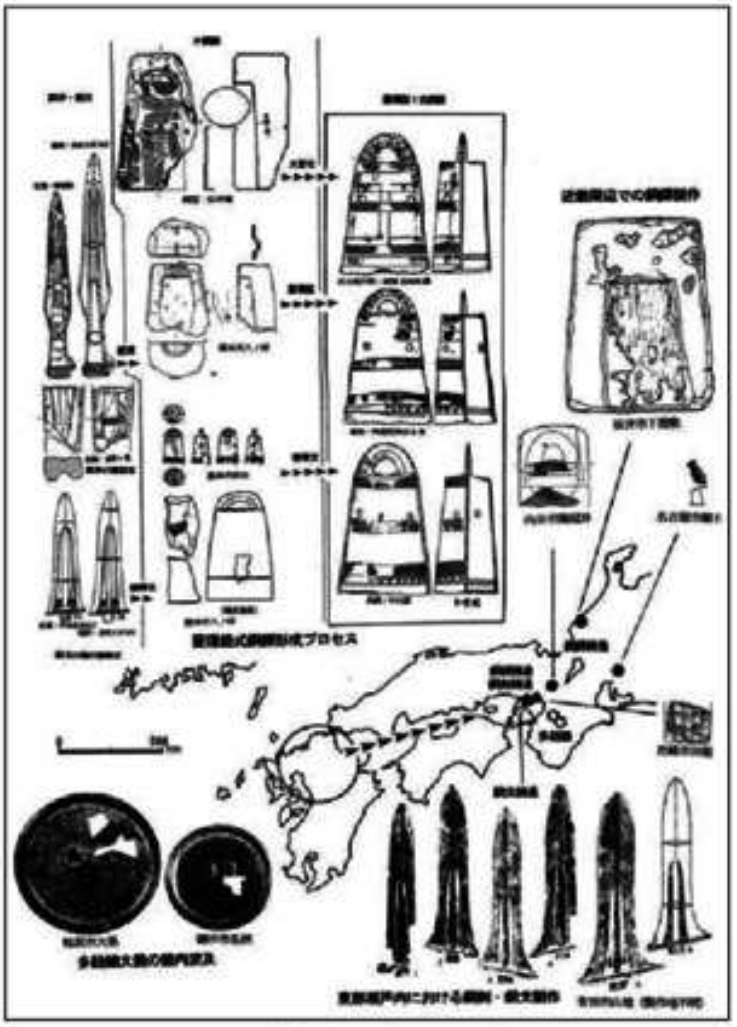


図6　青銅器生産の東方展開
（石川「銅鐸は九州で形成された」2022）

の製作技術は受容されたけれども、その社会的意義はかなり変わっていると考えざるを得ません。

このあと、弥生時代の中期の後半、紀元前一世紀代になると、大陸に由来する青銅器は中国本土のものが主となります。楽浪郡が紀元前一〇八年に現在の平壌付近に設置され、中国の漢王朝の朝鮮半島方面―東夷―への進出拠点となります。すると、北部九州の有力者たちも楽浪郡との交渉を重ね、前漢代の文物を多数手に入れるようになります。例えば福岡県の三雲南小路遺跡では、前漢代の非常に大きな直径二十九センチもある銅鏡、二十センチ弱の銅鏡群、ガラスの璧、金銅製四葉座飾といった様々の中国製の物品が副葬されていました。これら優れた文物は最有力者のもとに集中しますが、小型の鏡は周辺のほどほどの有力者に分配されます。ここでは、それまでの朝鮮半島に由来する青銅器の場合と全く状況が違うことに注目すべきです。これらは外交交渉による製品の入手であって、全く製作技術は伴いません。技術移転は全く起きていないのです。

鉄器とその再加工　もう一つの金属器である鉄の道具の場合を見てみましょう。かつて日本列島の弥生時代の鉄器は、漢王朝が楽浪郡を設置した紀元前一〇八年以後に日本列島にもたらされた、と考えられていました。しかし、近年では、それ以前の弥生時代中期初めから中頃に鋳造技術で造られた鉄の斧類が広く西日本にかなり普及していることが分かってきました（図7）。その特徴から見て、戦国時代に、現在の中国・河北省一帯を主な領域とした燕国の鉄製の道具が朝鮮半島に普及し、それが日本列島に導入されたことが分かっており、その製品は北陸・関東でも見つかっています。

これまでは、鉄の道具の製品は発見数が少ないので、燕に由来する鋳造鉄器が各地で見つかってもそれほど普及していないだろうとみてきました。しかし、数年前に北陸の石川県小松市にある八日市地方遺跡の発掘で、弥生時代中期中頃、紀元前二世紀代、場合によっては紀元前三世紀代に遡るという意見もありますが、楽浪郡設置以前の鋳造鉄斧を装着する柄がまとまって見つかりました。鉄の刃先を付ける部分の形を見ると、中国の遼寧省で見つかった鋳造鉄斧の断面長方形のソケットに合致した形をしています。つまり、八日市地方遺跡から出た斧の柄には鋳造鉄斧が装着されており、それが同時期の斧の柄の数割を占めることが分かり、予想以上の普及度だと注目されています。

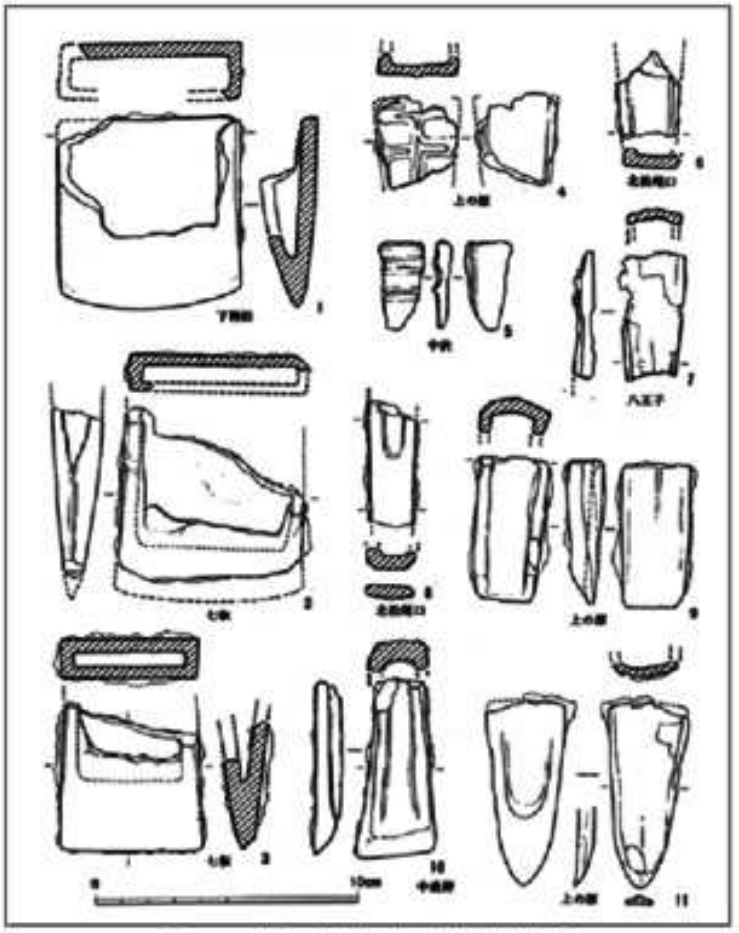


図７　福岡県内出土鋳造鉄器
（野島永『科研報告』2010）

ところが、鋳造鉄斧がかなり流通・普及しているのですが、これが壊れたときに再生することができません。青銅器の場合は鋳造技術が根付いていますので溶融して再生することができますが、鉄器はで

きません。壊れたのを道具として再生するなら、石斧が壊れたらそれを研ぎ直して小さな石斧に変えるのと同じ方法しかない。図7のように、鋳造鉄斧が破片になったら、その端部を研ぎ直して刃先を作り出しています。鉄の製品は普及するけど、鉄器製作に関する技術移転ができていなかった。金属器製作技術の技術移転ができたのは青銅器だけということとなります。

(三) 土木・石積み技術

古代山城との比較という点では、土木・石積み技術にも注目しなければなりません。土木技術にもいろいろありますが、まず土を掘削して大地に巨大な構造物を造る行為、これがどの程度のものかを見てみましょう。

環濠集落

弥生時代には村の周囲に濠を巡らし、土塁を併設する環濠集

図8　比恵・那珂遺跡
(久住猛雄『弥生時代の考古学』8所収論文,2008)

落が九州から関東周辺まで広く普及します。横浜市にある大塚・歳勝土遺跡は、数ある弥生時代の環濠集落の中でも、その全容をもっともよくつかめる遺跡です。環濠の濠は上面で幅四メートル、深さ二メートルあまり、当然上部は後世攪乱・削平されていますので幅・深さとも何割か割り増しして考える必要があります。

現在のところ弥生時代でもっとも早い段階の環濠集落は、福岡市の比恵・那珂（図8）という遺跡群の南西部（那珂遺跡）で、弥生時代初めの環濠集落が出ています。二本の濠がきれいな同心円状に巡ります（図9）。上半分が一～二メートルほども削平されたために濠しか確認できなかったのですが、おそらく二条の濠の間には土塁があったと考えられます。この二重環濠の大きさは外径一五〇メートル、内径一二五メートルほどで、外濠は断面V字形で復元しますと上幅六、七メートル、深さ四メートルです。こちらの内濠はも

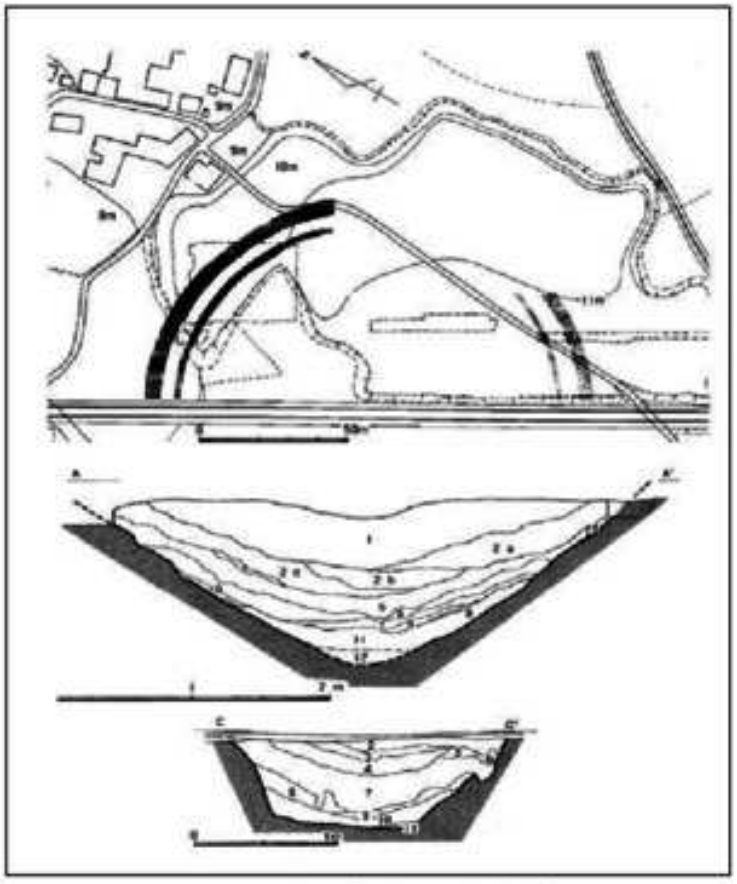


図9　那珂遺跡の二重環濠
（『那珂11』1994）

うちょっと小規模です。これがグルっと一周すると仮定すると、土木量はどれぐらいなのか計算してみますと、おおよそ八千立米（立方メートル）になります。これを、例えば百人でこの土木作業をしようとすると一人当たり八十立米と、かなりの土木量になります。これは弥生時代初めの小さな濠ですが、その後の奈良県唐古・鍵遺跡や佐賀県吉野ケ里遺跡といった大規模集落の環濠の土木量は桁違いということになります。

水田造成・灌漑施設　それから水田造成や灌漑施設も土木技術です。弥生時代の初めから数ヘクタール、奈良県御所市中西・秋津遺跡では弥生前期なのに推定十ヘクタールあまりの水田を造成しています。したがって、弥生時代の人々は村を巡る濠を造る、それから田んぼ、自分達の食扶ちを作るために村の開設時に壮大な土木事業をやっていることになります。それから、水を水田に引くために水路や井堰の構築もやっています。

図10は福岡市比恵遺跡の北東端で検出された井堰です。下が上流側で上が下流側です。最初に最下流部の堰を作って、順次弱くなった箇所を上流側に補強して、最終的に四つの堰を重ねる形に造っています。幅十五メートル内外検出されましたが、さらに東方に伸びます。

それから、田んぼに供給する水を確保するために溜井も造っています。図11は福岡市三苫永浦遺跡の溜井群で、一番大きなSX10は長さ五十三メートル、幅十二メートル、深さ四メートルもの規模です。地形を見ると、この下流側に広がる水田に用水を供給するためのものと考えられます。水田に給水する

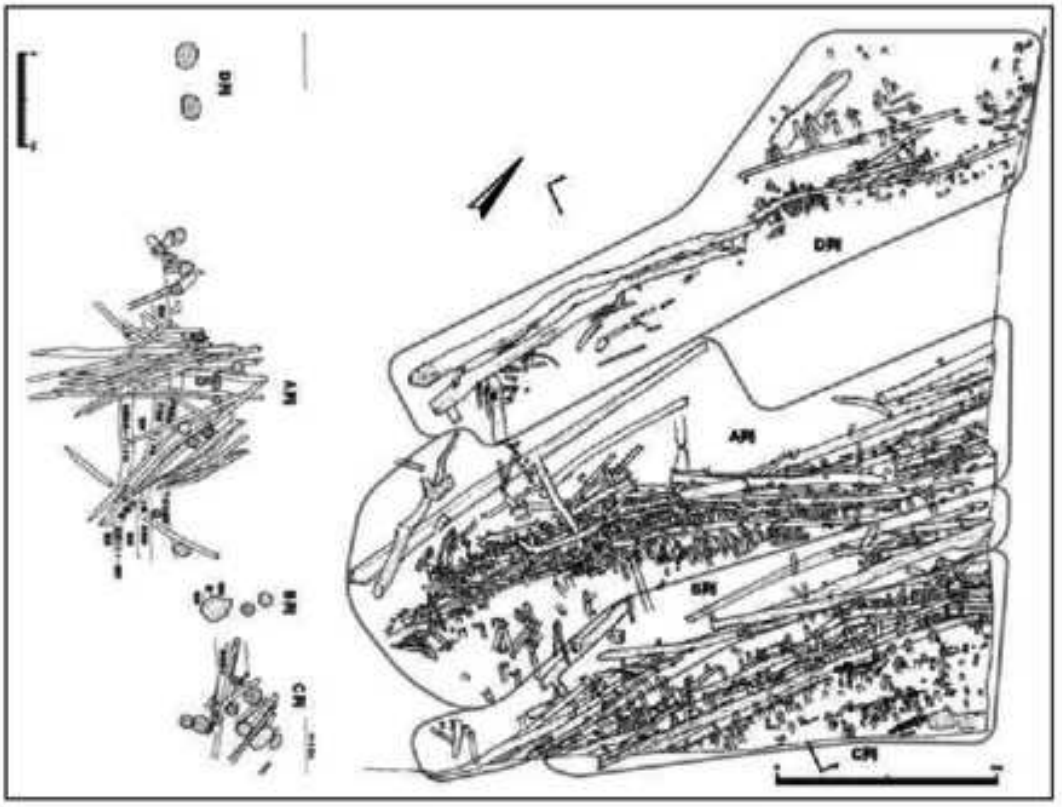


図10　比恵遺跡の井堰（『比恵71』2016）

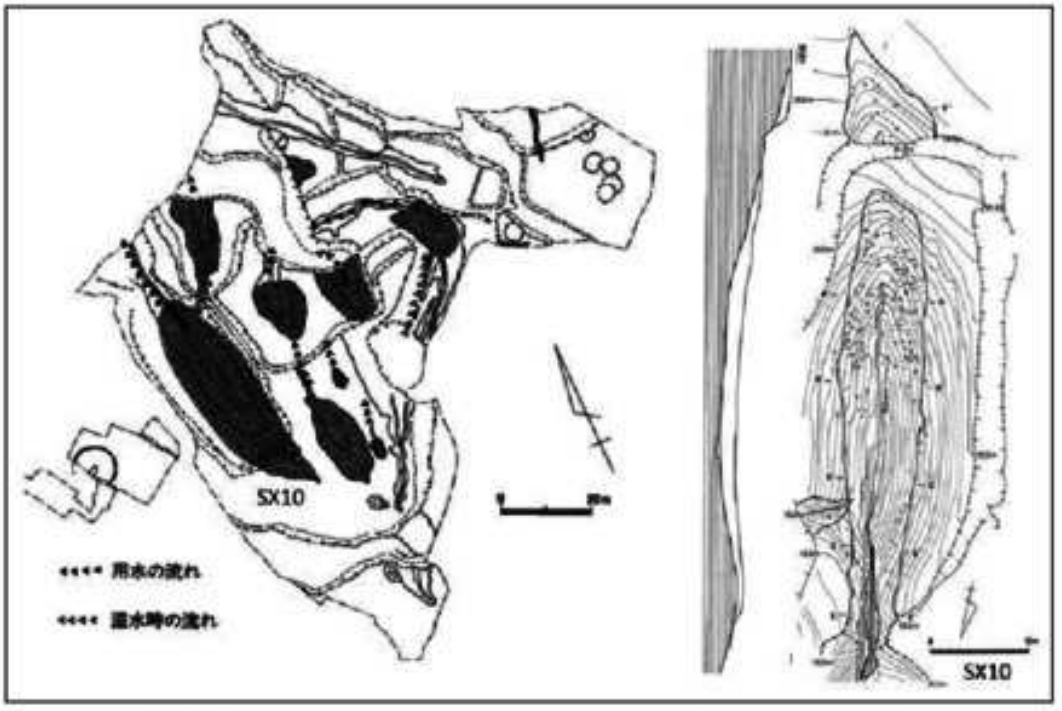


図11　三苫永浦遺跡の溜井遺構（『三苫永浦遺跡』1996）

に見合う河川がないか、水量が不足なために上流側にこうした溜井を設けたようです。

石積み技術　最後に、石積み技術です。縄文時代でも石を使った構造物はありますが、ほとんど平面的で、立体物はいくつかの限られた事例しかありません。弥生時代になると、塊石で立体的な構造物を造り始めます。弥生時代早期末～前期初めの福岡県宗像市田久松ケ浦遺跡では、木棺を納める埋葬施設（槨）を石積みで造ってあります。石槨や石囲墓は北部九州の東寄りに根付き、それが中国地方に普及していきます。島根県松江市堀部第一遺跡や広島県三次市高平遺跡の石積み墓はあまり立体的ではなく、石を墓に葺く、石で墓を覆うという状況です。これらの伝統が弥生時代の中期後半から後期に引き継がれ、中国地方では四隅突出型墳丘墓などの外周の裾に石を並べて、そして墳丘斜面に石を貼って面を整える手法が顕著になります。しかし重要なのは、石積みで

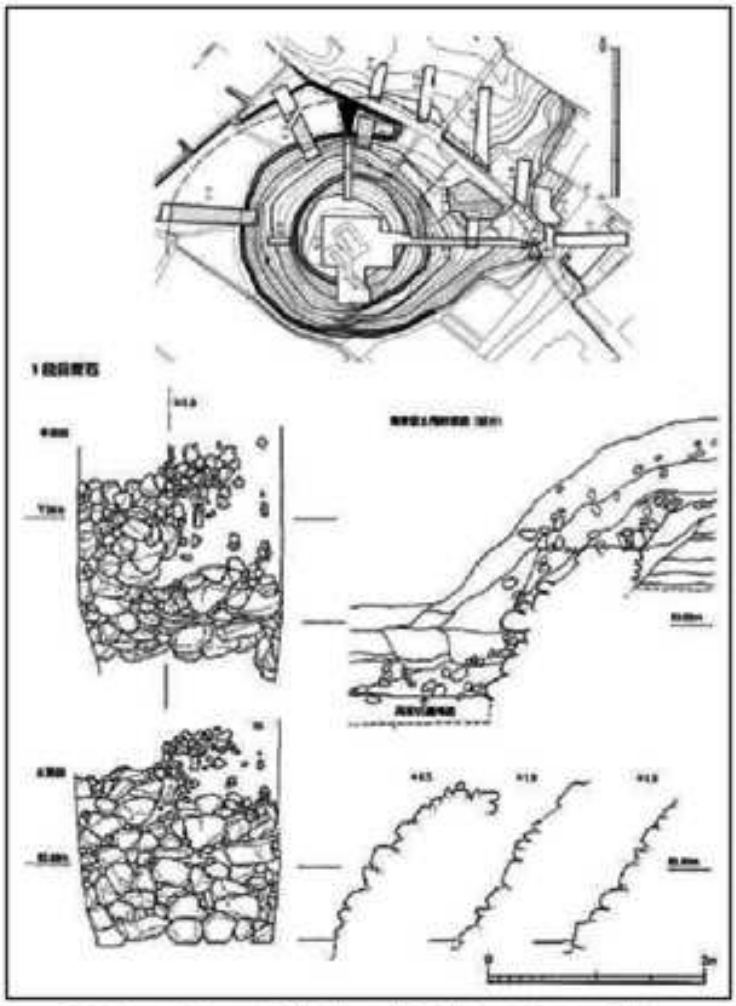


図12　ホケノ山古墳の後円部下段の石積み
（『ホケノ山古墳の研究』2008）

構造物を築くのではなく、地山を削り出した上に若干の土盛りをした墳丘の表面に礫石や板石を葺くという点です。

石積みで構造物をつくり始めるのは弥生時代の終盤からでしょう。図12は奈良県桜井市ホケノ山古墳という、箸墓古墳の東側にある最初期の「纒向型前方後円墳」です。墳丘の裾に石を積み上げた角度は六十度内外で、部分的には八十度もの急傾斜となっています。礫石の自重で墳丘封土を一応は固め、保護する構造です。四隅突出型墳丘墓の貼石とは基本的に構造が異なるといってよいでしょう。

図13は箸墓古墳です。箸墓古墳の墳丘裾の構造はよく分かりませんが、周濠の南東部地点に、裾と周濠外側を繋ぐ堤＝土橋部があり、その両側に石積みがあります。これは、土橋が崩れること防ぐための石積みです。こうした石積み技術が古墳時代にも引き継がれ、墳丘の築造に用いられます。ただし、垂直に近い急角度に積み上げる技術は

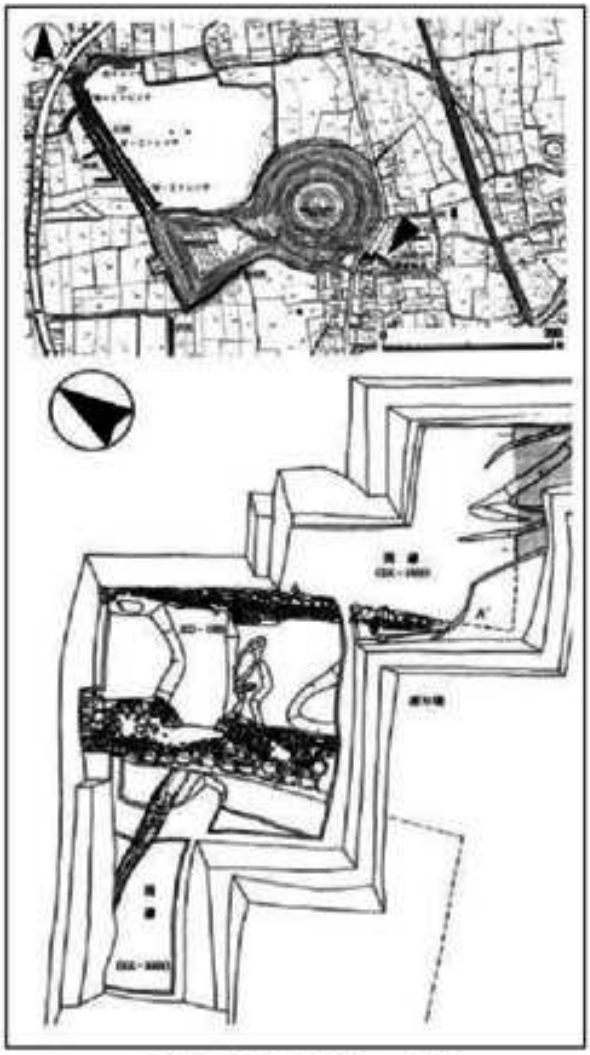


図13　箸墓古墳の土橋
（『桜井市埋文センター発掘調査報告書20』1999）

限界がありますので、途中で傾斜を変えています。長野県千曲市にある森将軍塚古墳の墳丘などはその典型例でしょう。

三　古代山城の築造技術の由来は？

明治大学では、吉村武彦先生が中心となって、大学院教育で古代史・古代文学・考古学の三分野が連携する取り組みを始め、現在に至ります。そのフィールドワークで、私も九州の古代山城をけっこう見学しました。私は古墳の調査経験もほどほどにありますが、古代山城の石積みはもの凄くて、古墳築造とは全く異質であり、新たな石積み技術の採用がなければ構築は困難だと感じました。古墳の横穴式古墳にみられる、側壁石の一部を切り欠いて嚙み合わせる切（截）組積み法が古代山城の各所にみられるので連続している部分はあると思います。しかし、横穴式石室で垂直に石積みした場合は、最終的に天井石の重量で上から抑え込んで構造を保持する方式です。佐賀県基山町の基肄城南水門など古代山城の石積み土塁は、ほぼ垂直に何メートルもの高さに達し、しかも積石の自重で構造を保持するもので、横穴式石室とはまったく異なります。上流側からの水圧にも耐え得る構造を実現していますし、それが延々と山や谷を巡る凄さに驚嘆しました。古墳築造者は、古代山城の一部分ならば担えるとしても、その全体構造はとうてい実現できない。古墳築造者が古代山城の建設現場の親方になるのはとうてい無理だと感じます。その辺のところを後ほど教えていただければ幸いです。

以上です。有難うございました。

報告③　古代山城にみる渡来系技術

講演者紹介

亀田 修一（かめだ しゅういち）

岡山理科大学 特任教授。専門は東アジア考古学。博士（文学）。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。岡山理科大学助手、講師、助教授、教授を歴任して現職。

古代山城にみる渡来系技術

岡山理科大学 特任教授　亀田 修一

一　はじめに

皆さんこんにちは。亀田でございます。よろしくお願いいたします。

ちょっとすいません。発表の前にレジュメを一部修正させてください。三十七ページの下から四行目の「それらの系譜について簡単に整理してみたい」を「それらの系譜について、備中鬼ノ城を中心に簡単に整理してみたい」としていただければと思います。備中鬼ノ城を中心にしまして、他のところをほとんど入れる余裕がなかったものですから、鬼ノ城中心のお話で進めたいと思います。

はい、それでは枚数がやや多めにありますので少し急いでお話したいと思います。

今日のお話でまず大事なところ「古代山城にみる渡来系技術」ですが、幅広く捉えて知識・情報・技術も含めて今回は扱っていきたいと思います。

扱うものとしましては遺跡全体のこと、それから遺構といった構造物の選地とか縄張とか、そんなお話。それから外郭構造としまして城壁、土と石、版築とか敷粗朶工法、石積みといったいろいろな技術的な部分。さらに門の構造についても少し触れます。内部施設としては、まさに鞠智城の顔であります八角形の建物の系譜などのお話と貯水施設のこと。

それから遺物に関しましては、屋根の瓦、ちょっと細かな話なのですが、門の扉の軸摺金具、門がギギッって開くときの下の軸のところの金具のお話。

最後に渡来系知識・情報・技術の系譜、これについて鬼ノ城を中心にしながら考えます。行き着くところ、多様な系譜が重層的に重なっているよね、というお話をしたいと思っています。

対象とした古代山城には、朝鮮式山城と神籠石系山城があります。朝鮮式山城は『日本書紀』や『続日本紀』などの記録にみられるもので、六六三年の白村江の戦いの敗戦に関わるものから、七一九年に備後の茨城・常城を止めましたという記録までのお話になります。

神籠石系山城は『日本書紀』などの記録に載っていない古代山城で、よく取り上げられるものが列石、九州の場合、切石で造っていて、瀬戸内の場合は割石が多いです。それから土塁のこと。さらに神籠石系山城には建物がないのではないか？というイメージがありますが、備中鬼ノ城では発見されています。僕は備中鬼ノ城についてはたまたま記録に残ってないだけだろうという認識で考えています。

二　渡来系知識・情報・技術を使用した古代山城の遺跡・遺構

（一）選地・周辺遺跡・規模・縄張・高さ・比高差

選地・周辺遺跡（図1）

これから中身なのですが、遺跡・遺構の選地についてまずお話しします。この古代山城の分布図、大まかなものですが、これを見ると北部九州に一塊（かたまり）があって、瀬戸内海沿岸地域に東西に一つのまとまりがあります。長門は分かっていませんが、周防と伊予で一つずつ、備前、備中、讃岐にも割とまとまってあります。これもやっぱり意味があると思います。僕は百済からの亡命者が築城を指揮していると考えているのですが、彼らがこの地域にやって来て「この辺をまず守らなきゃいけないね」であったり、「都を守るためにはこの瀬戸内沿岸、特にこの辺って大事だよね」という具合に地元の人たちから話を聞きながらやったのか

図1

なと思っています。

縄張・高さ・比高差

先ほどの石川さんのお話にもありましたが、弥生時代の環濠集落と高地性集落が、広い意味での城というのはいいだろう、ということなのですが、それが古代山城まで繋がるかっていうと僕も繋がらないと思っております。でも、こういうV字の立派な溝とか土塁があるわけです。さらに、柵で囲んでいたのだろうという。そういう意味では城的な機能は当然持っているのですが、ただ古代山城には繋がってなくて、古代山城は新たに入ってきたと考えています。

ただちょっとだけ気になっている点があります。この辺を詳しい方はよく御存知だと思うのですが、吉野ヶ里遺跡などには物見やぐらがあるところだけ少し飛び出している部分があります。これ、実は雉城、角楼といったものに繋がる可能性があり、この情報が入ってきたときに中国系のものが入っていた可能性もゼロではないのかな、と思っています。ただし、吉野ヶ里遺跡と古代山城が繋がるかどうかと言えば、繋がらないと思います。

（図2）左手が備中鬼ノ城で、古代山城は山の頂上付近をずっと囲むことによってお城を造っています。この頂上部は標高四百メートルぐらいです。中・近世の山城は尾根線上に平場（郭）を造っていきます。岡山県高梁市にある備中松山城は近世初期の山城で、奥に大松山城という中世の土造りの山城があります。有名な小堀遠州が築城に関わっていると言われているお城です。このように、選地・縄張も

図2

違いますね、ということです。

(二) 外郭構造

城壁の土と石

さて、外郭の外回りの城壁ですが、土と石の話です。岡山の鬼ノ城の場合、最近は土の部分が結構表に出るようになりましたが、以前は、「屏風折れ」という凄く立派な石垣がよく写真で紹介され、また中世のものではないかともいわれていました。地元の高橋護先生が「これは古代でいいんじゃないの」って言い始めてから古代山城に入ってくるのですが、こういう石垣の部分がどうしても目につくので鬼ノ城は土の城ではなくて石の城だろうとイメージする方が多いです。ただ、最近の復元された写真や図などでは、基本的には土の城です。

そういう意味で例外的なものが対馬の金田城です。

当時の日本にはこれだけの石垣を造れる技術はありませんので、明らかに朝鮮半島からの技術が伝わっていると考えていいと思っています（図3）。

朝鮮半島の山城、高句麗、百済それから新羅とあるのですが、百済はたくさんの山城を築いています。もう三十年ぐらい前に書いた論文なのですが、洪思俊という先生が作られたデータを基に作ったグラフです。日本の古代山城は、一番小さい城で城周千九百メートルくらいです。城周二千メートル以上の古代山城が、各国に一とか二とか、多いところで三ぐらいあります。先ほど申し上げた岡山の鬼ノ城がこの二千メートル台の一番後ろぐらいです。それから金田城、基肄城、大野城へと順に大きくなっています。それに対して百済の古代山城は、大きい城も当然あるのですが、ほとんどが城周千メートル以下です。その地域単位の城、それから国家が関与する城もあるでしょうが、基

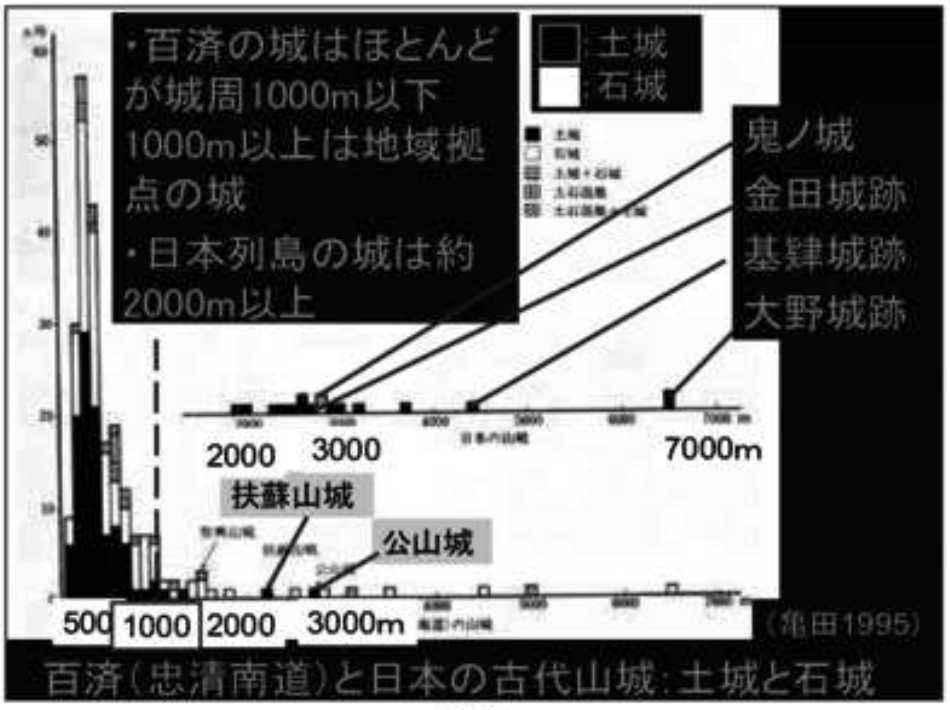


図3

本的に小さい城が多いのです。そのうち、この黒く塗りつぶしている部分が土の城です。土と石のお城、両方あるのですが、土のお城も多いのです。そして、この大きいグループでは、この扶蘇山城は百済最後の王様の関わった城、それから公山城が五世紀・六世紀の首都に関わったお城ですが、大体この位置なのです。

つまり、日本の古代山城の大きさは百済山城の中でも大きい部類に入りますので、特別な城、一つの国に一つとか二つしかないということとも話は合うのかな、と思っています。このようなあり方は、やっぱり向こうの人が来て指導したからなのだろう、と思っています。

城壁の版築　（図4・5）

版築の話は、細かな話をするといろいろ微妙なのですが、ひとまず堰板とか枠板とか言っているものを使って作業を行います。こちらは百済の夢村土城の博物館にあります風納土城の城壁構築状況の模型です。こんなふうに枠を作って版築作業しているというのですが、この城壁のどこに堰板・枠板の痕跡が見えるのだろうって思っています。よくわからないですね。いずれにしても、版築は綺麗にしています。高さがこれで約四メートルあり、幅二十メートルぐらいだったと思います。立派な版築です。風納土城では敷粗朶とか敷葉と言っている、ちょっと水気の多いところで木の枝とか葉っぱとかを入れながら土を固めていく技法も使われております。紀元後、少なくとも三、四世紀にはこういったものが百済で造られております。

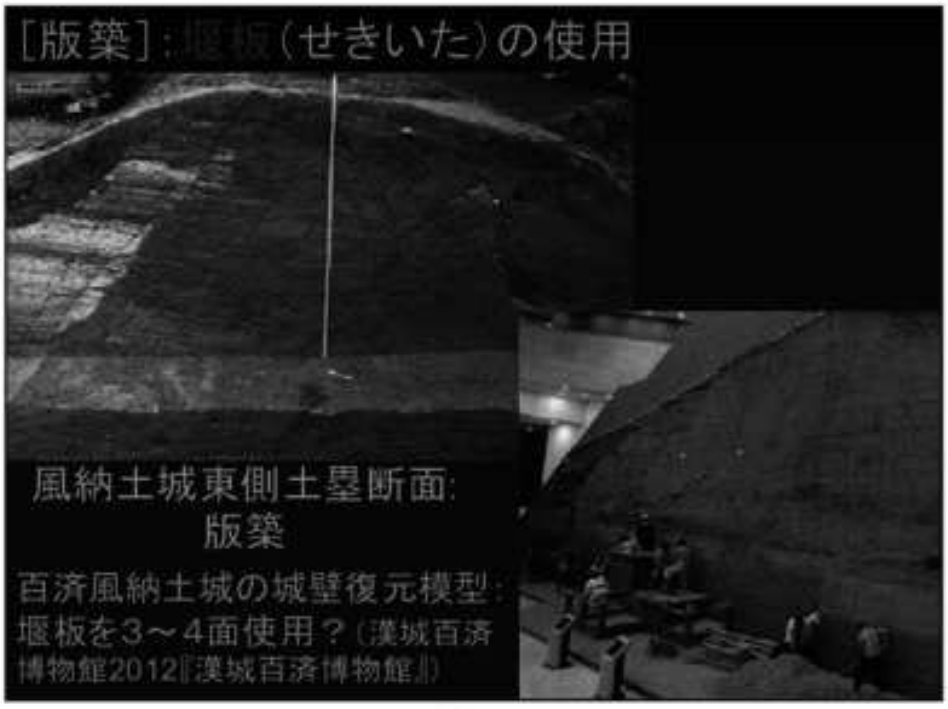

[版築]：堰板（せきいた）の使用
風納土城東側土塁断面：
版築
百済風納土城の城壁復元模型：
堰板を3～4面使用？（漢城百済
博物館2012『漢城百済博物館』）

図4

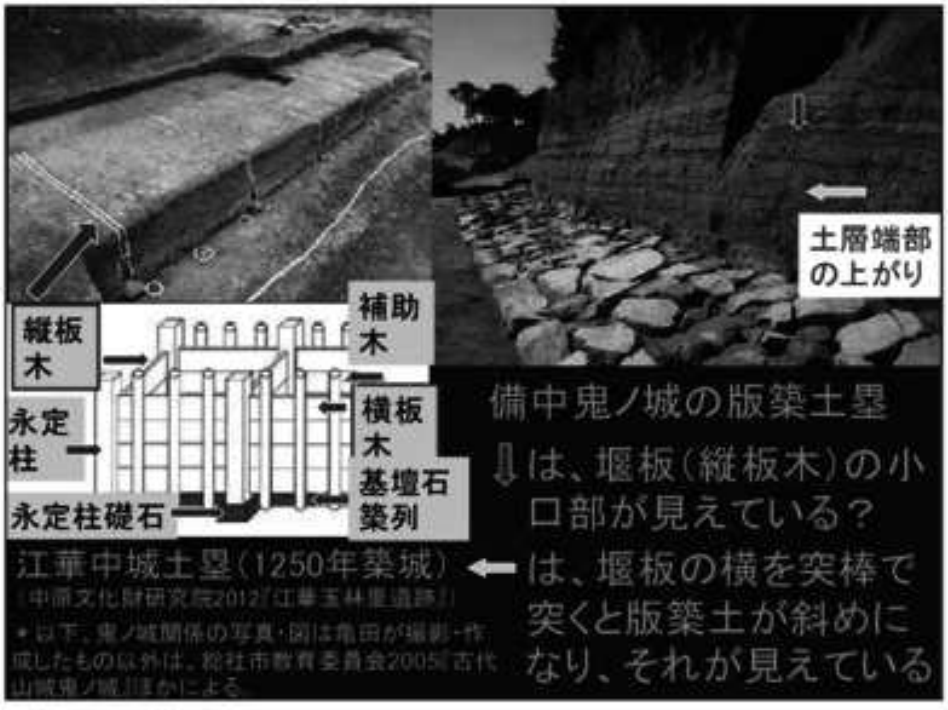

土層端部
の上がり
縦板
木
補助
木
永定
柱
横板
木
基壇石
築列
永定柱礎石
備中鬼ノ城の版築土塁
⇩は、堰板（縦板木）の小
口部が見えている？
江華中城土塁（1250年築城）
は、堰板の横を突棒で
突くと版築土が斜めに
なり、それが見えている

図5

豊前御所ヶ谷神籠石版築土塁復元模式図
（行橋市教育委員会2006『史跡御所ヶ谷神籠石Ⅰ』）

図6

それから、図5右側が先ほど鬼ノ城ですが、土塁の前に石が敷いてあり、版築も綺麗に出ています。版築の途中に縦方向の筋が何本か見えます。大変興味深いのは、縦筋のところに、ちょっと見にくいですが、横から版築の土層が来ると、ちょっと上がっているのがお分かりになりますでしょうか。縦軸があったら横に版築の水平盛土です。これは実際に皆さんも版築の実験をする機会がありましたら、板がある壁みたいな所を棒で突くと、どうしても壁際の部分は斜めに上がるんですよね。その痕跡だろうと僕は思っております。それで、左側は高麗時代、一二五〇年に築城された江華中城の土塁です。ソウルの西にある江華島のお城で、実際に、この白い〇のところに穴が開いていて、中は版築で、間に仕切り板を嵌めている、というのが分かります。さらに土塁の表面に板の痕跡も残っています。つまり、完成後も板を付けたままにしていた、

ということが分かります。ですから、版築は、きちんと造るにはこういうやり方をしていた、ということが分かります。間に板があると、その際が斜めに上がる、というのはこういう仕組みになるのかなと思います。そういう意味では鬼ノ城の版築に関しては、朝鮮半島の技術がそのまま伝わっているのかな、と思っております。

図6は豊前の御所ヶ谷神籠石の版築作業の復元図です。前面に横に板を掛けているのですが、この横材、下から使っては上に上げというのでこういう想定をしているのですが、この側面部分に関してはまだよく分かってないこともあります。細かく見ていくとやはりもう少し検討しなきゃいけないのかな、と思っております。

城壁の敷粗朶　（図7）

先ほど申し上げた敷粗朶と言っているものですが、

図7

これ（右上の写真）が百済の最後の都の扶余の羅城を掘っている時にお邪魔して撮らせてもらった写真です。手前が外側です。外側にこのような枝や葉っぱがあります。これを見ていくと何枚（層）かありまして、この少し上のところに黒い点々が見えるかと思います。これも同じものです。この上面にも葉っぱが散らばっていましたので、何枚かに分けて土を積んだものと思われます。この左と下の写真は福岡県の大宰府の水城です。水城の土塁も同じように木の枝などが入っています。左側の写真の枝の入れ方は少し雑なのですが、右下の木の枝の入れ方は凄く整然としています。このように大宰府の水城関係は百済の泗沘（扶余）羅城などから技術が来ているのだろうな、と僕は思っております。

城壁の列石　（図8）

日本の神籠石の起源に関しては朝鮮半島では類例が

図8

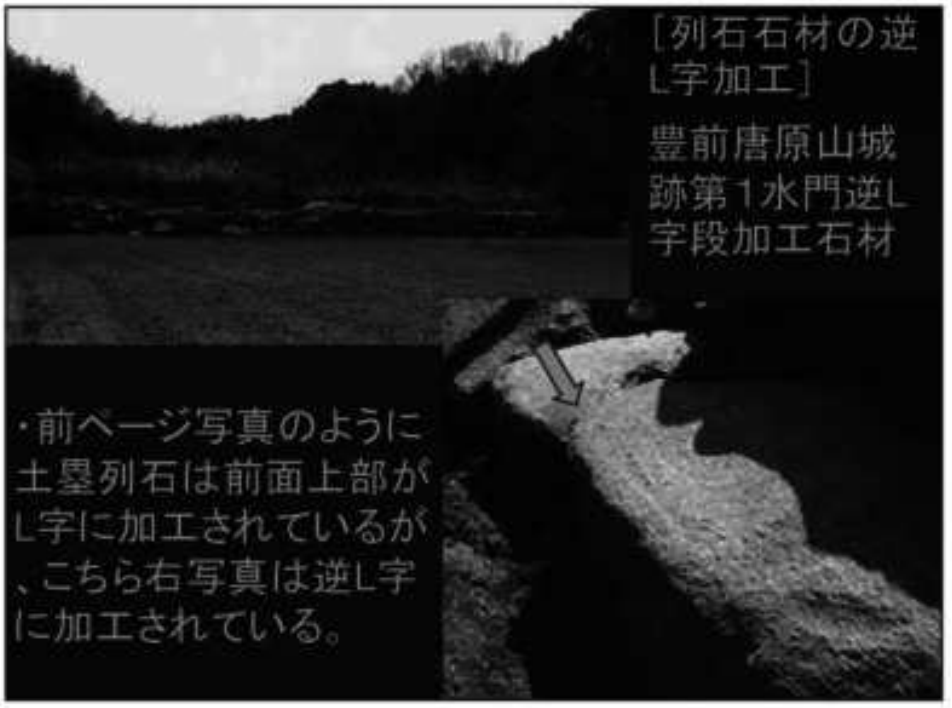


図9

よく分かっていません。その中で可能性があるものが益山猪土城です。左上の写真のように土塁の下に列石が並んでいます。出土瓦からは七世紀前半でいい、と僕は思っております。こういう割石の列石は、まさに岡山県の大廻小廻山城跡のもの（右上）と似ているのかなと思っています。大廻小廻山城跡の例の方が綺麗に加工していますが、通じるものがあるのだろうと思います。九州の列石は、基本的に切石加工されており、前面上部に右下の写真のようにL字形の加工があります。この上に土を積むのですが、豊前唐原山城の例は、石を並べて、土塁を造る前に止まってしまった未完成の城だと思っています。余談ですが、十六世紀終わり頃に黒田官兵衛が豊前中津城を造る時にこの石を持ち去って石垣に使っていますので、もし興味のある方は中津城に行けばこれをご覧になれます。

その唐原山城の第一水門って言っている所が図9の

スライドです。ここに石列がずーっとあるのです。発掘調査を行った時もこんな感じで残っていました。右端の方に通水口があって、左側の石垣に一か所、ちょっと見にくいですけども右下写真のように、前の方が一段高くなっています。さきほどのL字形に対してこちらは逆L字形としておきますが、段のある石材が見つかっています。

図10右下の逆L字形加工の石材は、日本の古代山城ではほとんど出てこなくて、あと一か所、大宰府の阿志岐山城にあります。これに関しては、高句麗の集安、将軍塚の横にある、陪塚と言っている古墳の石組みに同じように前が高くなった逆L字形の段加工がなされた石材があります。そして、高句麗の中期の都集安の山城でした丸都山城でも同じように加工された石材があります。つまり、逆L字形段加工の石材に関しては現時点では他で見つけていませんのでどう繋がるか分かりませんが、ひとまず高句麗の加工技術が入っている可能性を考えています。豊前のこの唐原（とうばる）地域につきましては、『正倉院文書』の中に大宝二年（七〇二）の戸籍が残っており、その中に秦氏関係の名前がいっぱい見られます。そんな地域の石材でもありますので、現時点では高句麗的な加工技術なのかな、と思っています。

城門の算木積　（図11）

これは香川県の讃岐城山城跡、今ゴルフ場になっているのですが、その中に残っている城門跡です。その門の両側の隅角の石の積み方、ここに算木積という言葉を使いました。一般的に「算木積」は中・近世の石垣の隅角部の積み方で、横長の石材を縦横交互に重ねて積み上げます。讃岐城山城跡の例は、

左上:高句麗集安将軍塚
古墳1号陪塚逆L字段加工
右上:高句麗集安丸都山城
正門 逆L字段加工石材
右下:豊前唐原山城跡第1
水門跡逆L字段加工石材

図10

讃岐城山城跡(左)城門跡算木積(7世紀後半
)と高句麗集安西大塚古墳(右)南東隅算木積
(4世紀)
4世紀の高句麗と7世紀の讃岐の関係は不明

図11

不十分といえば不十分なのですけど、一応そういう形になっています。ですから、昔からこの部分は積み直したのではないか、という意見も聞きます。その可能性を全く否定するわけではありませんが、僕はひとまず古代のものでよいのかなと思います。この右側の写真は高句麗の集安にある西大塚古墳の隅角の石の積み方です。四世紀の古墳ですが、これも横長の石材を縦横交互に積んでいるのです。時間も地域も間が空きすぎているので、何とも言いづらいですが、高句麗という国は花崗岩の加工技術と積み方に関してはレベルが大変高い、と僕は思っています。ですから、どういう形か分かりませんが、そういう情報が讃岐の地域に入ってきても構わないのではないか、と僕は思っています。

土塁前面の敷石　（図12）

それから先ほど鬼ノ城のところで少し説明いたしま

図12

図13

したが、土塁前面の石敷きの話です。この右側の写真は、朝鮮半島の真ん中、忠清北道にある稷山蛇山城跡の写真です。七世紀後半の山城です。この山城、百済にするのか新羅にするのか意見が分かれているところですが、土塁の前面に石敷きがあります。このような三段ぐらいの列石といいますか、石が並んでおります。版築には、縦方向に溝が見えています。このような敷石は、日本の古代山城では例が極めて少なく、朝鮮半島でもあまり見られないものです。

雉（雉城）　（図13）

角楼または雉と呼ばれている施設の話です。この左の写真は鬼ノ城の雉です。坪井清足先生が角楼と名付けたらしいのですが、上に建物がある場合まさに角のところに楼があればそれでいけるのですが、この鬼ノ城の例は楼があるのかよく分かりません。いずれにしても、こういう方形の、前面が長くて奥行きは二メー

トルぐらいかな、の狭い施設が出ています。対馬の金田城にもあります（右写真）。以前から、これは積み直しがあるのでちょっと微妙だという意見もあるのですが、ひとまずいいのかなと思っています。金田城の場合も前面が長くて奥行きが短いのですが、韓国の古代山城研究者の車勇杰先生から「こういうのは百済に多いから、百済型でいいんじゃないの。」とお聞きしています。

図14の左上の写真は、中国遼寧省の燕州城（白巌城）ですが、ここでは方形に近い形で飛び出しています。ここも積み直しはあるのですが、高句麗から唐の時代のもののようです。また、扶余羅城の発掘調査を継続的にやっているのですが、右下の雉城は長さ二十二・四メートル、奥行き五・三メートルありまして、こういう巨大な例もあります。これも横長です。そういう意味でいうと、百済の雉城は横長としていいのかなと思っています。

城壁外面の柱　（図15）

先ほども見ていただいた鬼ノ城の雉の部分ですが、前面の積石の間に柱が挟まっています。雉の上部は全部復元なのですが、発掘している時は、下部の積石が出ても「柱部分」には何も無い、そんな状況でした。担当者も凄く悩んでいましたが、結果的に柱としか考えようがない。類例を探していたら、平壌の大城山城の城壁に柱痕跡があることが分かりました。ただし、これに関しては、朝鮮半島南部地域に出ている例を新しい時代のものではないかといろいろ意見が出ております。しかし、百済の東端、新羅との国境線近くにある大田の月坪洞遺跡、その古い段階の遺跡で、表面に石を貼っている城壁の例が

扶余羅城東羅城雉城：横長型（百済古都文化財団2018）
横長さ：22.4m、奥行5.3m
遼寧省燕州城（白巌城）の雉城（馬面）：平面方形
（韓国放送公社1994『高句麗城』）

図14

［城壁外面の柱］
備中鬼ノ城角楼の城壁（石垣・土塁）内の柱
日本列島のほかの古代山城では未確認？
平壌大城山城城壁内の柱痕跡（『朝鮮遺跡遺物図鑑』3、1980）

図15

図16

あります。表だけで奥に石はありません。そして、この図16の図と写真。見にくいですが、縦に溝があります。これは、まさに鬼ノ城と同じようなものです。この発掘の担当者は、月坪洞遺跡からは高句麗の土器も一部出ているので、百済が造った後に高句麗が何か関係して修築などをした時にこういう形になったのではないか、と仰っています。意見は分かれていますけども、ひとまず六世紀か七世紀の遺跡と考えられますので、鬼ノ城の元みたいな技術も、百済にするのか高句麗にするのか分かりませんが、大田の月坪洞遺跡にはあります。

城門（平門）　（図17）

それから門です。一般的に城外から城内へ多少の傾斜はあるにしてもそのまま入る門を平門（ひらかど）といいます。これは鬼ノ城西門ですが、外から道が階段状になって入っていきます。入っていくと、ちょっと階段になっ

図17

た石敷きがあります。もともとの石敷きに門を建てたら現在の復元になったのですけども、門の扉のところの石敷きには花崗岩の上等の石を使って綺麗に加工していて、とても素晴らしい！　今、現地に行ったらこの石敷きを踏んづけられますけど、これ七世紀の石敷きです。これが、普通、平門と言っている門です。

城門（懸門）　（図18）

さて、こちらは鬼ノ城の北門で、懸門（けんもん）と呼んでいます。高さを復元しますと、一・六メートルほど段差があります。この下の写真は新しい復元ですが、梯子を懸けて登らないと上がれないね、っていうような形の門です。ここに排水施設もあります。このように段差がある門、梯子を懸けて上がるものを懸門と言っています。

鬼ノ城の北門は段差が一・六メートルぐらい、讃岐の屋嶋城の城門は段差が二・五メートル、対馬の金田

［懸門］
城外から城内へ入るときに2m前後の段差があり、梯子などを懸けないと入ることができない。
［内外の高さの差］
備中鬼ノ城北門：1.6m
讃岐屋嶋城跡：2.5m
対馬金田城跡三ノ城戸：1.6m
筑前大野城跡北石垣城門：1.4m

図18

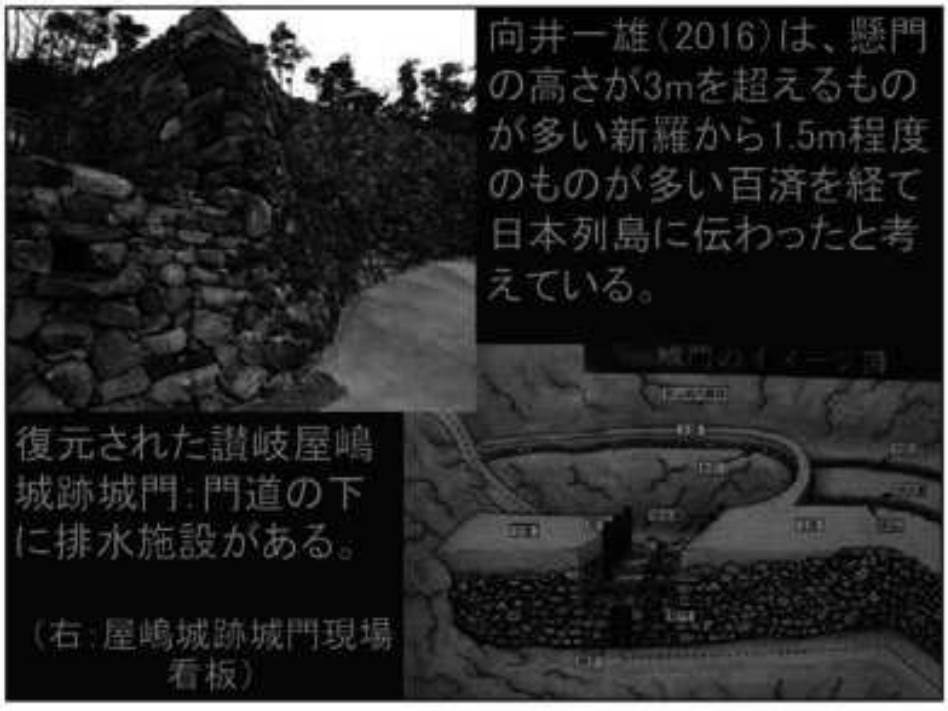

向井一雄（2016）は、懸門の高さが3mを超えるものが多い新羅から1.5m程度のものが多い百済を経て日本列島に伝わったと考えている。
復元された讃岐屋嶋城跡城門：門道の下に排水施設がある。
（右：屋嶋城跡城門現場看板）

図19

城は三ノ城戸で段差一・六メートルぐらいで、大宰府の大野城の北石垣城門の段差が一・四メートルです。そのままだとすっと入りにくいね、というこの類の門は中世の城にも普通にありますし、実は江戸城、皇居の北桔橋門（きたはねばしもん）も同じグループのものです。同じような門がずっと古代からあるんですね。ただし、それが繋がっているかどうかはわかりません。

図19の写真は屋嶋城の城門です。門道の下に排水施設が入っている懸門ですが、こんな感じに復元されています。段差部分には階段をつけて整備されています。古代山城研究会の向井一雄さんが、懸門の高さが三メートルを超えるものは新羅が多くて、百済に行って低くなり、日本に来たのではないか、と仰っています。そういう門でございます。で、後でまた出ますが、屋嶋城も門を上がると、まっすぐ行ったら壁にぶつかって左にしか行けないようになっています。このように曲げて入るっていうのが、中世の桝形に通じるものです。

門の平面形（甕城・桝形）　（図20・21）

先ほどの鬼ノ城の北門は、門を入っていって左に行くような構造になっています。それから讃岐の屋嶋城の場合は、明らかに左に行く構造です。

百済にある栢嶺山城の南門も懸門になっていて、門に上がって入っていくと壁にぶつかって、左に曲がってまた右に曲がって曲がってという構造です。これは甕城（おうじょう）構造と言っていますが、のちの中・近世の日本のいわゆる桝形の類ですよね。ここも排水施設があります。こういう例を見ていると百済の門構

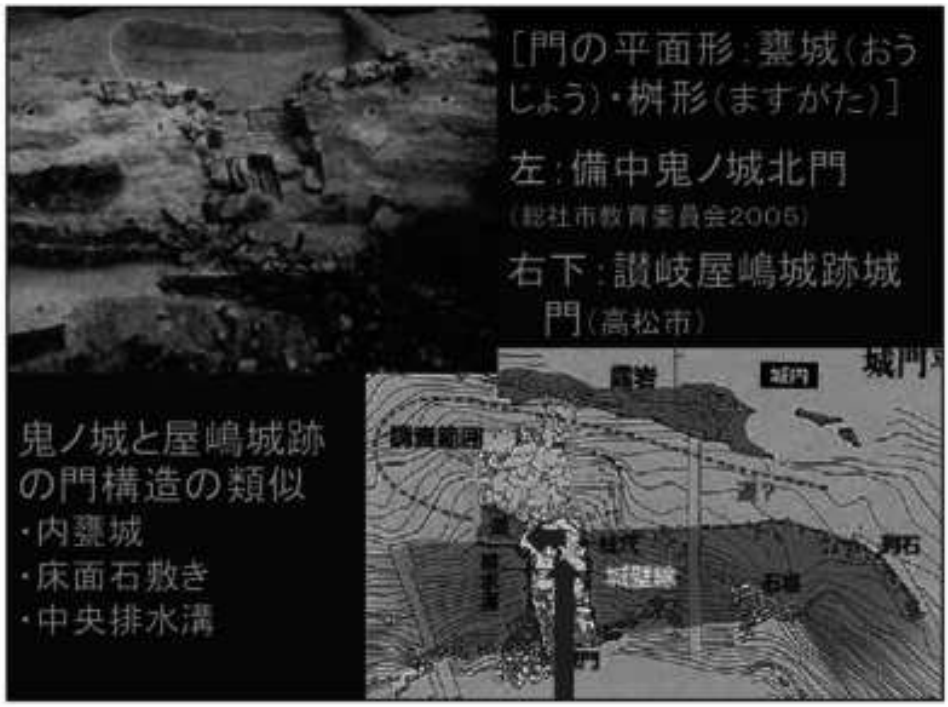

[門の平面形：甕城（おうじょう）・桝形（ますがた）]
左：備中鬼ノ城北門
（総社市教育委員会2005）
右下：讃岐屋嶋城跡城門（高松市）
鬼ノ城と屋嶋城跡の門構造の類似
・内甕城
・床面石敷き
・中央排水溝

図20

01
排水路
栢嶺山城南門甕城構造（姜鍾元・崔ピョンファ編2007）

図21

造が入っているのもあるのではないかと思っております。

門礎石：石製唐居敷　（図22）

城門の門礎石には、掘立柱の門柱を添える唐居敷と上に門柱をのせる礎石があります。唐居敷は熊本の鞠智城でも深迫門、堀切門、池の尾門の三つの門から出ています。

鬼ノ城西門には六十センチ四方の掘立柱の門柱、そして唐居敷がありまして、そこに四角い方立の穴があります。方立は、扉をギイと開けたとき隙間ができるので、そこから弓矢とか打たれないようにするための細長い柱です。それから、扉の軸を受ける軸摺穴があります。岡山の鬼ノ城に関しては、門の柱は方形で、このような構造の唐居敷が花崗岩で造られております。

図23は向井一雄さんが作られた図をちょっと加工していますが、面白いことに柱の形が瀬戸内海沿岸地域と九州で異なります。これ山口石城山神籠石のものです、岡山鬼ノ城のものです、兵庫城山城跡のものです、これは香川城山城跡のものです、これらは方形の柱が添えられています。讃岐の城山城跡のものには明らかに未完成の唐居敷があります。これに対して、九州の唐居敷には円形の柱が添えられることが多いのです。その中で金田城はまた違っていて、大宰府にも礎石立ちのものがあります。一般的に掘立柱の門から礎石立ちという石の上に柱を乗せる構造に遷り変わっていきます。やはり地域性もあるのでしょうが、現在のところ、掘立柱を添える石製の唐居敷は韓国では分かっていません。日本でも木製の唐居敷がありますので、韓国も多くが木製唐居敷を使用し、石製があまりなかったのかもしれま

（村上1998）
方形の柱：掘立柱
方立
軸摺穴
鬼ノ城西門唐居敷

図22

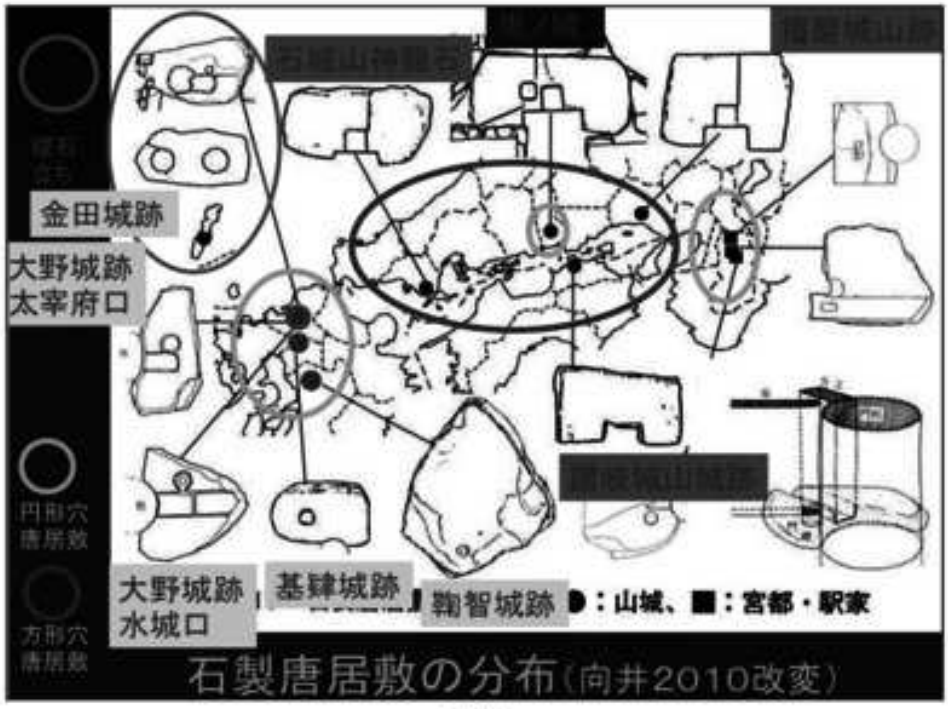

金田城跡
大野城跡
太宰府口
円形穴
唐居敷
方形穴
唐居敷
大野城跡
水城口
基肄城跡
鞠智城跡
●：山城、■：宮都・駅家
石製唐居敷の分布（向井2010改変）

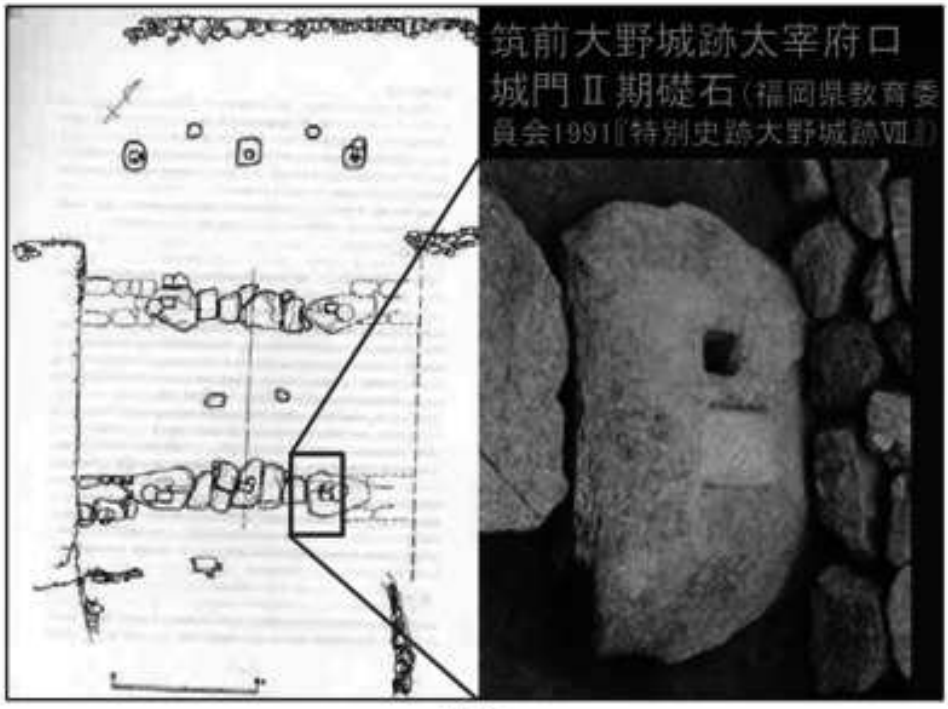
図23

せん。今後も検討を深めていく課題ということにさせてください。

図24は大野城の大宰府口の城門です。大野城のメインの門だと言っている門です。右上が復元図です。両袖は土塁で石貼りしています。ここは谷部なので向かって左側には石垣が造られています。左下写真の奥が城外で、手前が城内です。奥から入ってきて、二列の石列の間に門の建物が造られています。その手前に穴の列があって、ここに壁を立てます。つまり、敵が入ってきてもまっすぐ入れないようにしているのです。先ほどの甕城と同じような構造を持っています。

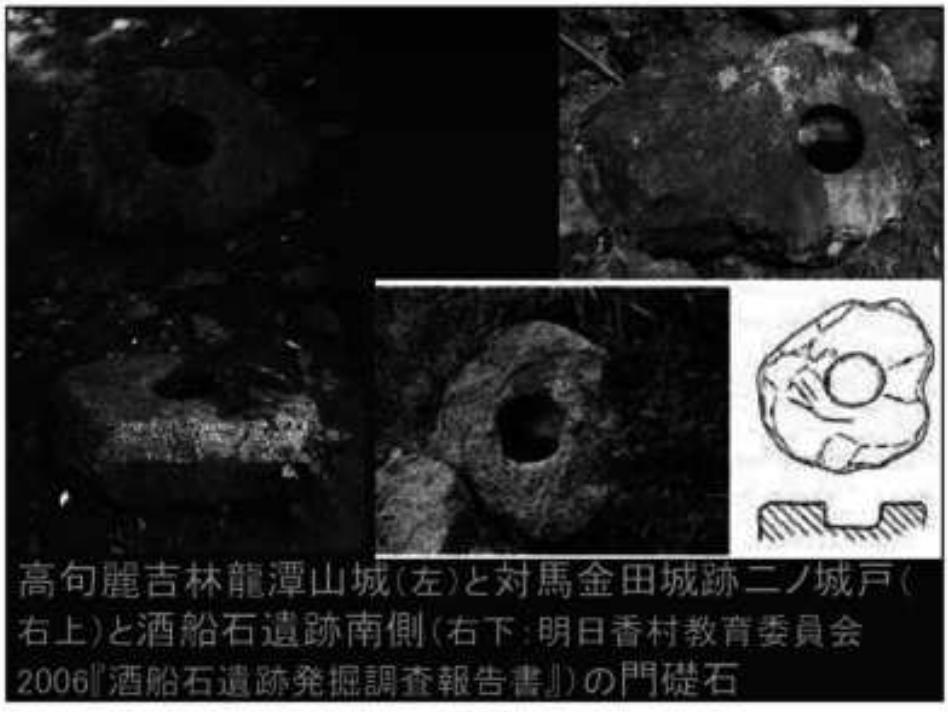
この太宰府口城門には造り直しがあって、Ⅰ期（七世紀後半～八世紀初頭）が唐居敷に掘立柱を添える門なのですが、Ⅱ期（八世紀初頭～中頃）の城門は礎石立ちです。図25写真の浅い方形掘り込みが方立、深い方形穴が軸摺穴で、方立の外側に門柱が立つ円形の受

図24



筑前大野城跡太宰府口城門Ⅱ期礎石（福岡県教育委員会1991『特別史跡大野城跡Ⅶ』）

図25



高句麗吉林龍潭山城（左）と対馬金田城跡二ノ城戸（右上）と酒船石遺跡南側（右下：明日香村教育委員会2006『酒船石遺跡発掘調査報告書』）の門礎石

図26

図27

け部が彫られています。こういう礎石の門に造り変えられます。これが大体八世紀に入った直後ぐらいの時期だろうと考えられています。

あとですね、これはよく分からない、ちょっと気になる資料です。図26の左の二つの写真ですが、昔行った吉林省の高句麗の龍潭山城で見た礎石です。丸穴が開いています。これと似たものは、どこにでもあり得るのかも知れませんが、右上が対馬の金田城、右下の2つが飛鳥の酒船石遺跡のものです。酒船石という松本清張さんが昔、小説にも書いていた石造物があるところの横で、見つかっているものです。これらがどのように繋がるのかはよくわかっていません。今後の検討の材料かな、と思っています。

水門　（図27）

さて、水門です。九州の水門や通水口は、基本的に地面にくっついて、土塁などの下にあることが多いで

す。しかし、鬼ノ城の水門は凄く高いので、以前から気になっております。右写真は忠清北道の沃川城峙山城にある水門です。この写真は韓国留学中に撮ったものですが、水口の高さが二メートルぐらいのところにあります。この高さ、これが直接つながるのかよくわかりませんし単純に構造的に高いのではないかという意見もありますが、いずれにしてもこのような高さの水門があります。図28右下の写真が備前の大廻小廻山城の一の木戸で発掘された水門ですが、いわゆる地面にある水口になります。そして、門の建物がこの左側にある予定なのですが、よく分かっていません。図29の写真は光州の武珍古城のものです。ひとまず百済、というか統一新羅に入っているのかもしれませんが、ここの地域では水口が地面のところにあります。それから、九州の神籠石に関しましても、2が佐賀県の武雄にある肥前おつぼ山神籠石の水門の図で水口が地表

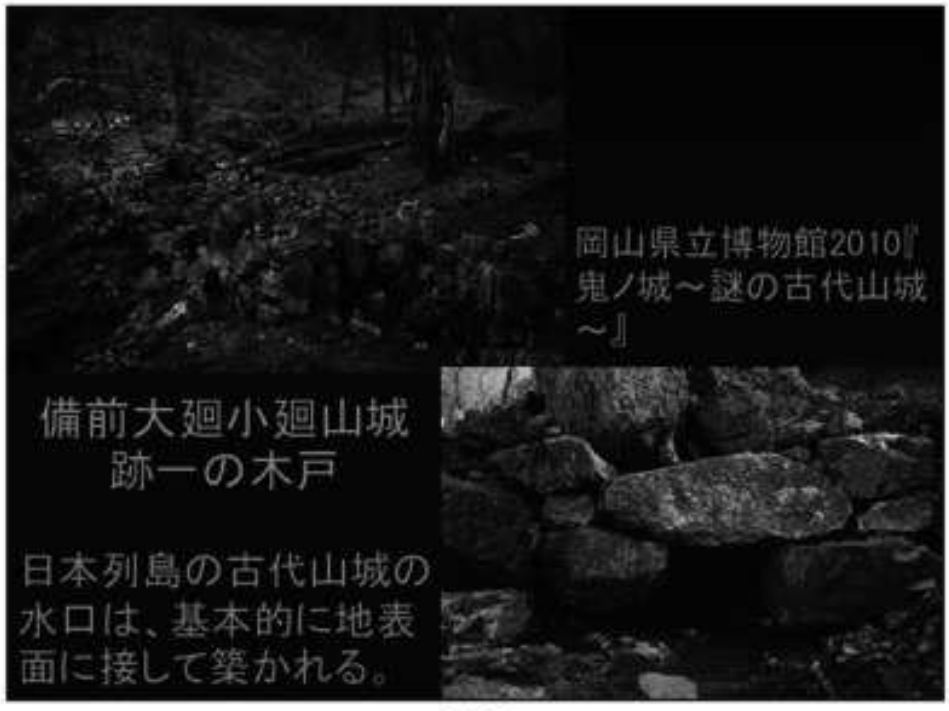


図28

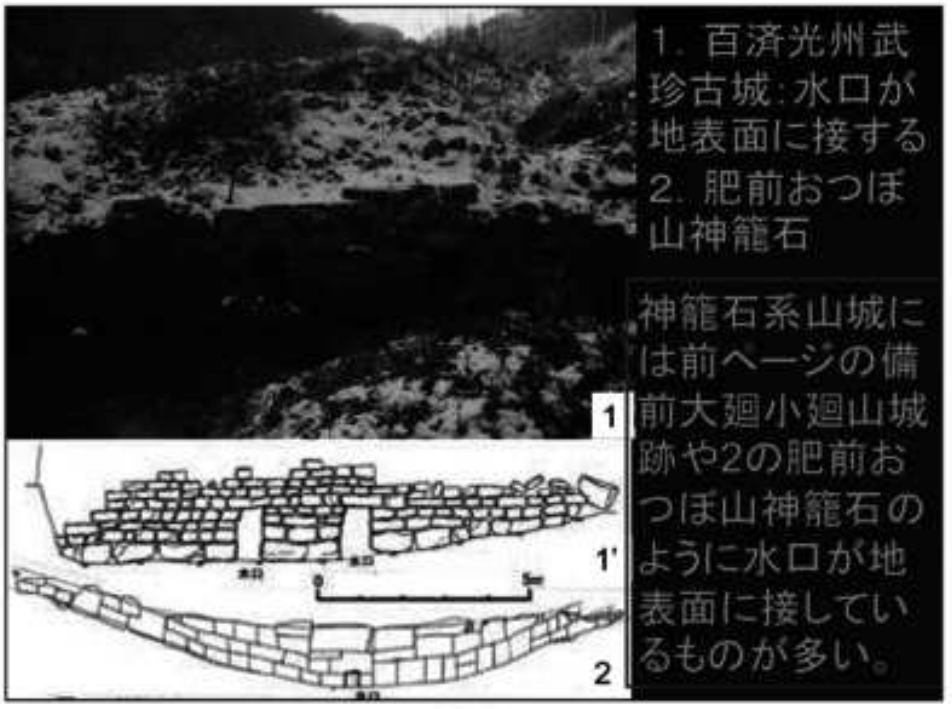

1. 百済光州武珍古城:水口が地表面に接する
2. 肥前おつぼ山神籠石
神籠石系山城には前ページの備前大廻小廻山城跡や2の肥前おつぼ山神籠石のように水口が地表面に接しているものが多い。
1
1'
2

図29

[八角形建物] 鞠智城跡八角形建物
32・33号建物跡:中央の心柱から放射状に柱が並んでいる。(7世紀後半)(熊本県教育委員会1999『グラフよみがえる鞠智城』)
鼓楼

図30

面に接しています。基本的に通水口が下にあるのは百済に多い、というのは以前から言われています。

（三）内部施設

八角形建物　（図30）

内部施設は八角形建物から始めましょう。鞠智城の三十二・三十三号建物では中央に柱があり柱列が放射状に伸びて八角形が三重になっています。そして、このような三層の建物に復元されています。しかしこれに関しては、日本国内の古代山城では分かっていない、と思います。

高句麗と日本の八角形建物に関しましては、図31の左上の図、この二棟が先ほど見ていただいた逆L字形の加工がある石材で紹介した集安の丸都山城で見つかっています。有名な好太王碑がある集安の山城の建物です。この建物は二つ並んでいるのですが、ご覧のように柱が井桁状に並んでいます。鞠智城の三十・三十一号建物と三十二・三十三号建物は放射状です。ということは、同じ八角形は八角形なのですが、建物の構造が異なります。スケールをほぼ同じにしていますので、見比べてみますと、やはり集安の丸都山城の建物の方が大きいのです。右側の八角形建物は、大阪市の難波宮で検出された建物です。大阪城の南側にあるＮＨＫ、その南東側で検出された建物跡です。この図は、昔に藤澤一夫先生、百済関係の大先生、が復元されたものを使っていますが、柱が放射状に並んでいます。つまり、鞠智城跡の八角形建物と同じ配置です。ただし、難波宮の八角形建物に関しては、最近改めて、これは天武期

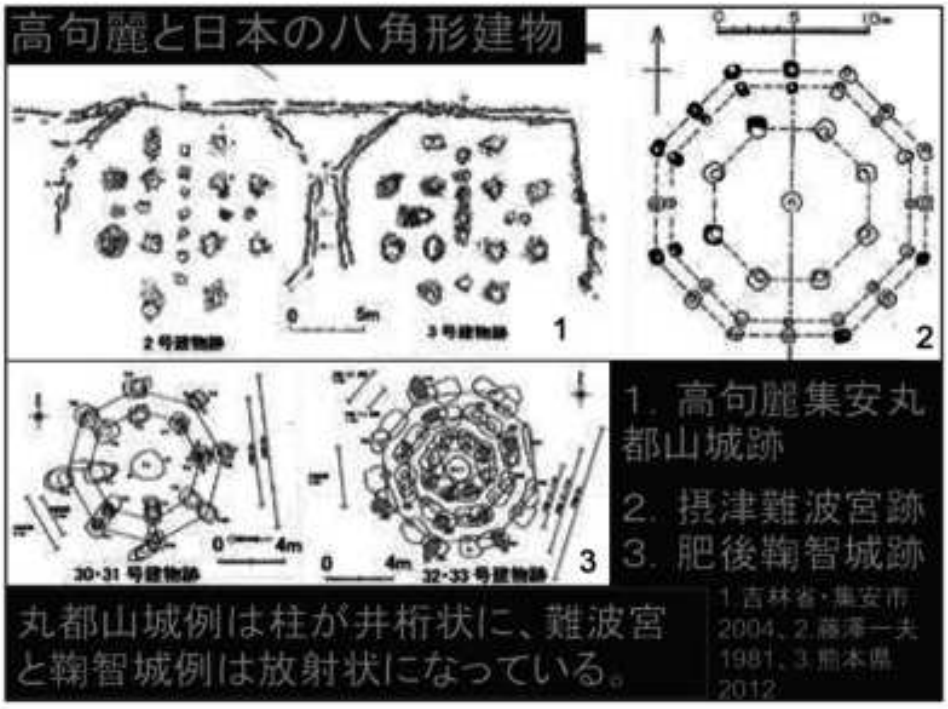

高句麗と日本の八角形建物
1
2
3
1. 高句麗集安丸都山城跡
2. 摂津難波宮跡
3. 肥後鞠智城跡
丸都山城例は柱が井桁状に、難波宮と鞠智城例は放射状になっている。
1.吉林省・集安市 2004、2.藤澤一夫 1981、3.熊本県 2012

図31

高句麗集安丸都山城建物群(北東より)

図32

（673～686年）の建物ではないかと仰っている方がおられます。つまり、孝徳朝（645～654年）、すなわち大化の改新の直後にできた建物ではないのではないかと。そうしますと時期がちょっと下がってきて、鞠智城の建物の方が古くなるかもしれません。いずれにしても、こういったものがありまして、この井桁状か放射状かといった柱の在り方で比較検討すべきものかなと思っております。

図32は集安の丸都山城の建物群の写真です。長い建物の横に、八角形の建物が二つ並んでおります。

それから、僕がいつも気にしているのは、図33です。ソウルの近くの河南にある二聖山城では九角形、八角形の建物が出ていて、その復元図がこれです。一番高いところに長方形の建物や八角形の建物が集まっています。（図34）こういう土器が出て、土馬も出ています。一番低いところには貯水施設があります。こ

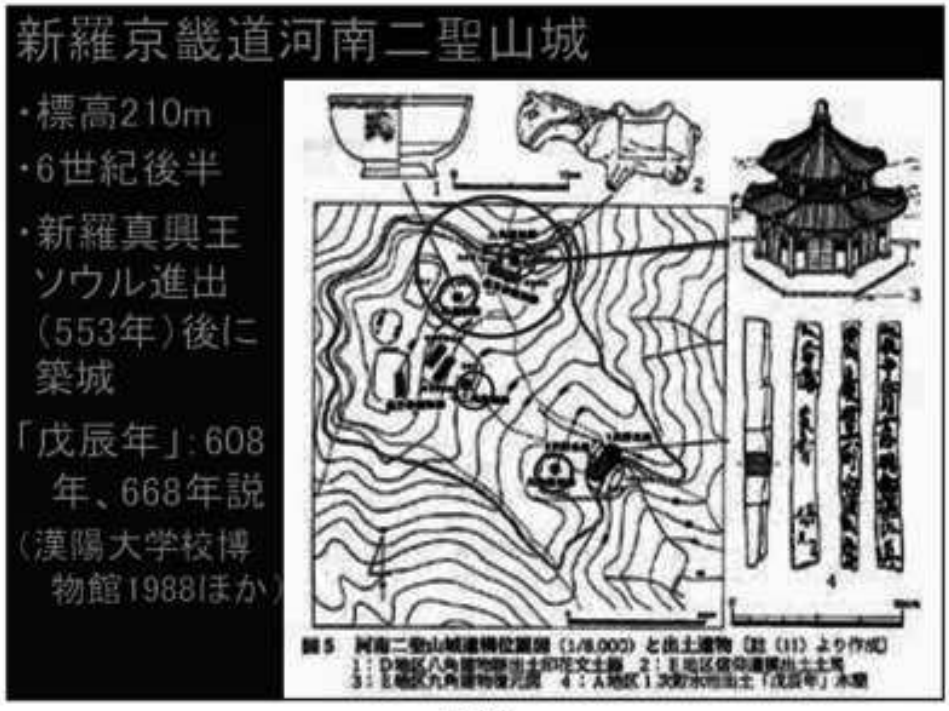


図33

の二聖山城に関しては、古くは百済という話もあったのですが、最近は六世紀後半の新羅の真興王がソウルに進出した後に築いた山城とされています。ここから「戊辰年」と書かれた木簡が出ておりまして、六〇八年か六六八年だろうと言われています。いずれにしても、それぐらいの時期のものです。

発掘を担当した漢陽大学校の報告書には、長方形建物が信仰遺跡、祭祀跡であると報告されています。と言いますのは、先ほどの土馬とか鉄馬が出ているのです。そして、想像の世界ですけど九角形建物を天壇、八角形建物を社稷壇とする理解も示されています。

ちょうど現地説明会みたいな機会に訪れることができましたが、九角形建物の発掘状況はこんな感じでした(図35)。その横が復元図になります。

貯水施設　(図36)

あと、貯水施設のお話です。貯水施設は鞠智城にも

京畿道河南二聖山城の山頂部建物群
(漢陽大学校博物館1988『二聖山城二次発掘調査中間報告書』)

図34

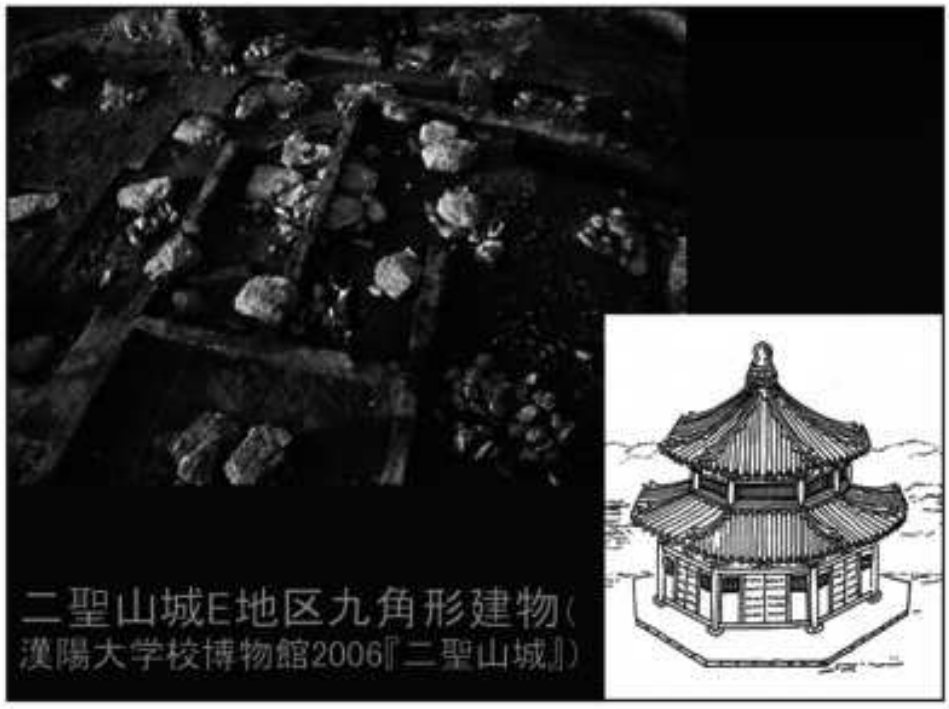

二聖山城E地区九角形建物(
漢陽大学校博物館2006『二聖山城』)

図35

[貯水施設] 備中鬼ノ城土手状遺構1
この土手状遺構は土塁の前面に石を貼り付けている。
(岡山県古代吉備文化財センター編2013『史跡鬼城山2』)
この土手状遺構の奥(右側)に素掘りの池(貯水施設)がある。朝鮮半島のような石組の池は未確認。

図36

図37

出ているのですが、備中鬼ノ城の場合は、土塁で石貼りした土手がよく残っていて、その内側に池があります。ここのポイントは、土塁の前面に石を貼り付けていること。この奥の池は素掘りです。朝鮮半島で出てくる石組みの池ではなく、素掘りの池です。

図37は先ほどの二聖山城の貯水池です。これは長方形に石で組まれた貯水池です。このような池が、先ほどの建物群から一番低い場所に造られています。これは、新羅で見つかっている池になります。この図38の貯水施設は新羅か百済か意見が分かれている、大田の鶏足山城跡で出てきた貯水施設です。ここは何度も修繕されていまして、内側、右側の丸くなっている池がI期で、この下（底）にいろいろ木組みなどされていて、ここから出た土器が百済か新羅で揉めています。ここの担当の方の考えでは、少なくとも新羅だ、という話になっています。しかし、鶏足山城は、少なくと

も七世紀には百済が押さえていたことも間違いなさそうなのです。古代山城というのは、特に韓国の場合は古代に限らず、取ったり取られたりということになっています。いずれにしてもこういう石組みのものが、六世紀の半ばぐらいに造られています。

三　渡来系知識・情報・技術を使用した古代山城の遺物

瓦　（図39）

次に瓦の話です。以前から、小田富士雄先生が北部九州の古代山城関係の軒丸瓦を分類されています。鞠智城の軒丸瓦は、百済系、高句麗百済系、百済・新羅系といろいろ意見があります。図40の上の二つの写真の瓦は鞠智城の六十四号礎石建物から出土しており、七世紀後半または七世紀末の土器を伴います。一番大事なところは、鞠智城の軒丸瓦は瓦

新羅・百済大田鶏足山城貯水池（東より）：中央のものが1次貯水施設（忠南大学校百済研究所2005）

図38

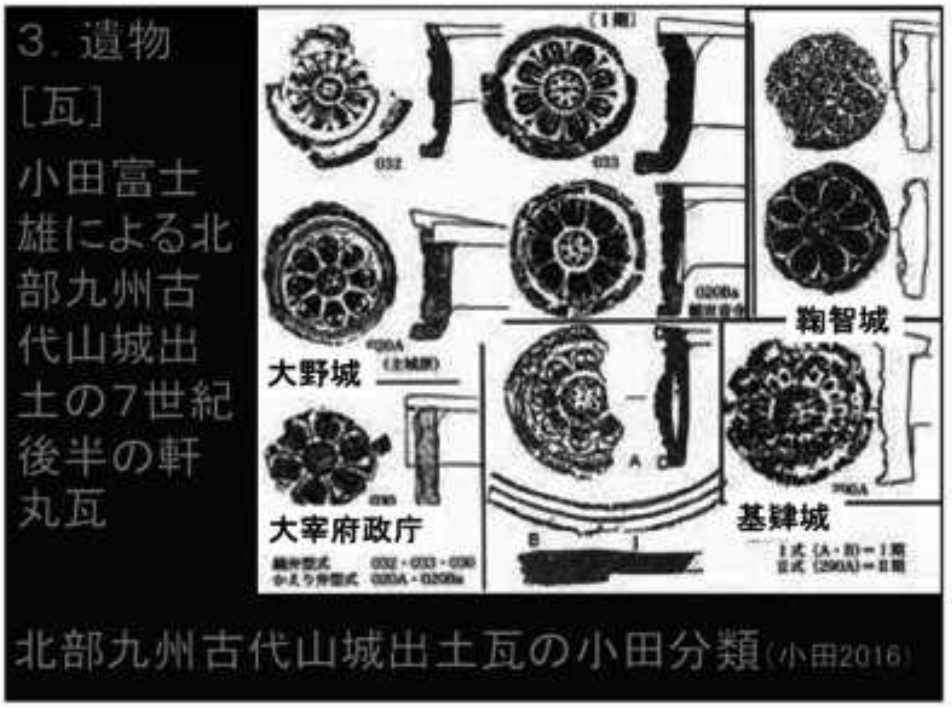

3. 遺物
[瓦]
小田富士雄による北部九州古代山城出土の7世紀後半の軒丸瓦
大野城
鞠智城
大宰府政庁
基肄城
北部九州古代山城出土瓦の小田分類(小田2016)

図39

鞠智城跡軒丸瓦と関連瓦
・丸瓦被せ技法
・中房周りの溝
筑前大野城跡
千房遺跡
慶州月城跡
慶州月城跡
(九歴2018、公州大学校1996、国立慶州博物館2000)

図40

当部の上に出来上がった行基式丸瓦を被せただけの「丸瓦被せ技法」だ、ということです。普通の軒丸瓦は瓦当の外縁が丸くなるのですが、「丸瓦被せ技法」だと上だけ被せるから外縁の下半がないのです。これは日本では基本的に出てきません。朝鮮半島では、忠清南道の千房遺跡という百済地域で出ています。でも僕は新羅瓦と思っています。これが新羅瓦だという理由は、この慶州月城跡から出た瓦、これ新羅の瓦です。これと同じ古新羅系のグループであろうと思うのです。もう一つ、瓦当の中心部、中房の周りに溝を持つ瓦は、新羅瓦に多いのです。ということで、僕は鞠智城跡の瓦は新羅系の可能性を考えています。「丸瓦被せ技法」の瓦は、今のところ肥後の鞠智城、韓国忠清南道の千房遺跡、筑前の大宰府政庁、そして武蔵国の高麗郡、今の埼玉県の高岡廃寺などで出ています。以上のように、肥後鞠智城跡の軒丸瓦に関しては、僕は近年、新羅系の可能性を考えています。

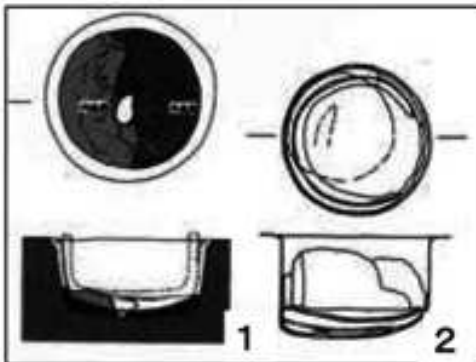
軸摺金具　（図41）

最後に、城門の軸摺金具の話です。大野城の北石垣城門、懸門ですが、ここから実際に出てきた軸摺金具があります。唐居敷に嵌められた雄金具ですが、唐居敷に嵌め込む部分が方形になっているので、いろいろ検討が進められています。日本では肥前の基肄城東北門の唐居敷軸摺穴と大和の山田寺東面回廊中央扉口の地覆石から雌金具が見つかっています。朝鮮半島では以前から少しずつ確認されていましたが、新羅の三年山城や忠州山城に雌雄セットの軸摺金具があり、大野城北石垣城門唐居敷の軸摺金具と同系と見る意見もあります。

[軸摺金具]
(じくずりかなぐ)
筑前大野城
跡北石垣
城門(懸門)・
水門

・土塁は版築土塁で、その下部に水門(排水施設)が作られている。

・城門(矢印下)は懸門で、城外と約1.4mの段差があり、その前面には石が貼られている。



1. 肥前基肄城跡
2. 大和山田寺跡
3. 新羅三年山城
4. 新羅忠州山城

日韓の軸摺金具関連資料(小澤2016)

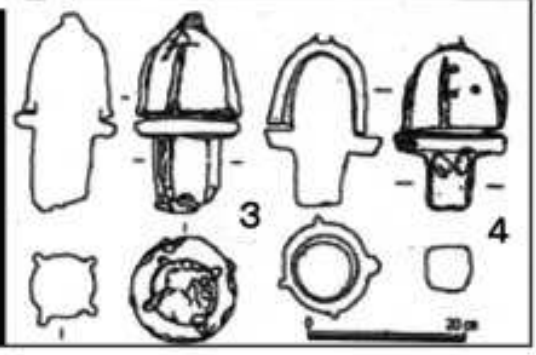


図41

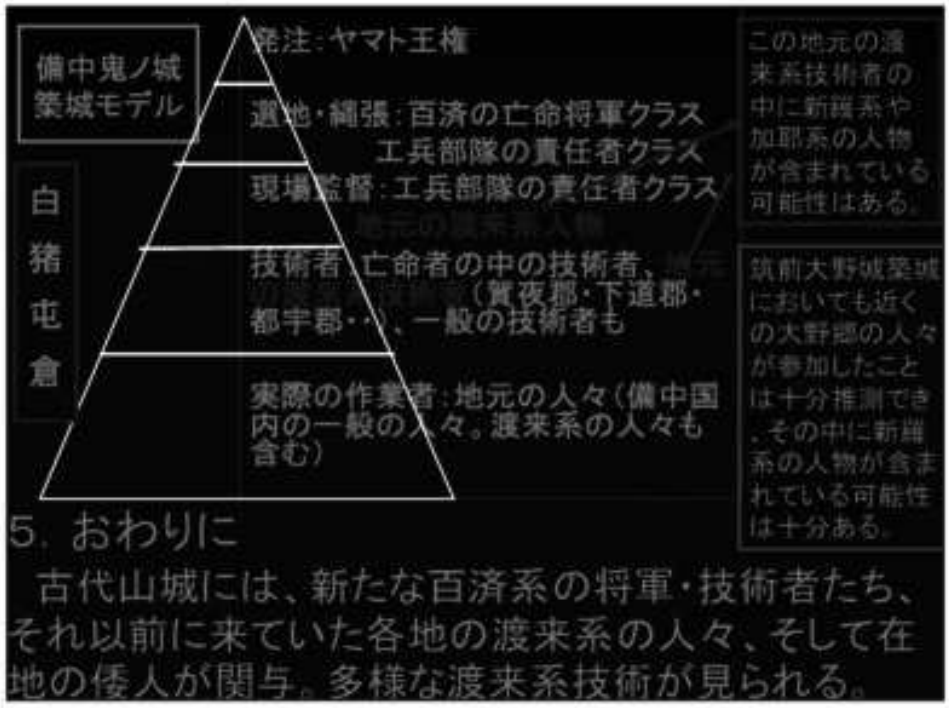


図42

四　渡来系知識・情報・技術を使用した古代山城の遺跡・遺構・遺物の系譜

これまで、古代山城にみられる渡来系の知識・情報・技術について、遺跡・遺構・遺物を対象に簡単に整理してきました。それらの系譜について、一先ずまとめると、単純に百済系だけじゃなくて、高句麗だ、新羅だ、というものがありますよ、という話になります。

この話を具体的に、備中鬼ノ城を対象として検討する（図42）と、発注者はヤマト王権で、選地には百済の亡命将軍・貴族クラスと工兵部隊の責任者クラスが関わっているのではないかと思っています。その下のところ、現場監督にあたる役割には工兵部隊の責任者クラスや渡来系の地元の人達なども関わっている。そういう中で重層的な渡来系の技術が入り込んでいるのかな、と思っております。

つまり、具体的な遺構や遺物を細かく検討すると、少なくとも百済のみの技術で築かれたとは考えづらいのです。それまでに日本列島に渡って来ていた多様な朝鮮半島の人々も古代山城築城には関わっていたと考えることで、各地の古代山城の多様性や個性が説明できるのではないかと考えています。

ご清聴いただきありがとうございました。

（図43）（図44）（図45）

［おもな参考文献］（日本の報告書以外）

岡山県立博物館2010『鬼ノ城～謎の古代山城～』

小澤佳憲2016「日韓の古代山城出土軸摺金具」小田富士雄編『季刊考古学』136、雄山閣、74-76

小田富士雄2016「大宰府都城Ⅰ期軒丸瓦考」『古文化談叢』75、九州古文化研究会、193-209

亀田修一1995「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』42-3

亀田修一2009「鬼ノ城と朝鮮半島」岡山理科大学『岡山学』研究会編『鬼ノ城と吉備津神社ー「桃太郎の舞台」を科学する』吉備人出版、58-71

亀田修一2016「神籠石系山城と朝鮮半島の山城」小田富士雄編『季刊考古学』136、雄山閣、93-96

亀田修一2021「古代山城と地域社会ー備中鬼ノ城を中心としてー」熊本県教育委員会編『令和2年度（2020年度）鞠智城座談会　地域社会からみた鞠智城』17-31

図43

亀田修一2022「第2章　日本の考古学―西日本の古代山城―備中鬼ノ城を中心に―」亀田修一・白石純編『講座　考古学と関連科学』雄山閣、21-38
姜鍾元・崔ビョンファ編2007『錦山栢嶺山城―1・2次発掘調査報告書―』忠清南道歴史文化院（韓国）
漢陽大学校博物館2006『二聖山城　二聖山城発掘20周年記念特別展』（韓国）
金善基・趙相美2001『益山猪土城試掘調査報告書』圓光大学校馬韓・百済研究所（韓国）
金秉模・沈光注編1988『二聖山城〈2次発掘調査中間報告書〉』漢陽大学校博物館（韓国）
吉林省文物考古研究所・集安市博物館2004『丸都山城』文物出版社（中国）
総社市教育委員会2005『古代山城鬼ノ城―展示ガイド―』
総社市教育委員会2007『国指定史跡鬼城山（鬼ノ城）―古代山城への誘い―』

図44

百済古都文化財団編2018『扶余羅城 東羅城Ⅳ―陵山里山区間　雉・城壁―』（韓国）
公州大学校博物館編1996『千房遺跡』（韓国）
国立公州博物館1999『大田月坪洞遺蹟』（韓国）
国立扶余博物館2003『扶余羅城』（韓国）
中原文化財研究院2012『江華玉林里遺跡』（韓国）
向井一雄2014「鞠智城の変遷」熊本県教育委員会編『鞠智城跡Ⅱ―論考編2―』75-105
向井一雄2016「西日本山城の城門構造」小田富士雄編『季刊考古学』136、雄山閣、58-62
向井一雄2017『よみがえる古代山城』歴史文化ライブラリー440、吉川弘文館
村上幸雄・乗岡実1999『鬼ノ城と大廻り小廻り』吉備考古ライブラリィ2　吉備人出版

図45

報告④　朝鮮三国の山城と鞠智城

講演者紹介

田中 俊明（たなか としあき）

滋賀県立大学 名誉教授。専門は朝鮮古代史、古代日朝関係史。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。堺女子短期大学講師、助教授、滋賀県立大学教授を歴任して現職。

朝鮮三国の山城と鞠智城

滋賀県立大学 名誉教授　田中 俊明

はじめに

こんにちは。田中俊明です。最初にころう君に切り捨てられまして、そのあと名前も間違えられまして、何かもうヨタヨタのところから出発です。まあ、最後なので、ちょっとくらい延びてもいいのかな、とか思っています。

私の発表では、写真をたくさん見てもらおうと思っています。

朝鮮三国というのは、高句麗、百済、新羅の三国を言うのですが、それぞれ特徴がありまして、違いがあります。日本の古代山城を基本的には百済の技術だと言っていますが、今の亀田さんの話でも、それ以外の高句麗の要素、新羅の要素とか入っているということでした。とりあえずその三国の山城がどうかということを見ていただこうと思います。

中原地域　（図1）

その三国の前に、高句麗と関わりがある夫余という国が中国の東北地方にありました。中国文化、漢文化の影響を強く受けているところです。

その前に、さらに前の中国の中原地域における土城について見ておきます。これは版築で造られている土城で、例えば商城というのは殷王朝の城のことですが、紀元前の二千年期にまで遡るという土築の城がありまして、これは同じ質、粘着性のある黄土を使って同じ土を積み上げていく版築、中国中原地域の基本はそういうふうな版築になります。これが鄭州商城で他にもすぐ近くの偃師商城など河南省が中心なのですが、そういう城壁の中の宮殿の跡とかの写真です。

中国東北　（図2）

中国の東北にいきますと、同じ質の土を積み上げても固まっていかないので、粘質土、粘着性のある土を

図1

図2

交互に挟んでいくという版築です。ですから、中原地域のいわゆる版築とは違う。夯土（こうど）と言っている版築とは違うということです。そして、朝鮮半島の版築もそういう版築になります。今一つ取り上げるのは、ずっと後の遼の時代の都。上京を、よく残っている上京の発掘の時ですけれども、その断面見るとこういう形で、この穴が棍眼（こんがん）と言っているものです、横に渡す木の板の痕跡が、あるいは中に棍そのものが残っていたりもしますけれども、こういうふうに版築している。これも同じ質ではなくて異質の、粘質土などを挟んで積み上げていく、そういう版築です。

一　夫余

夫余ですが、夫余の地域は高句麗より北側の地域になります。吉林省の東側です。

東団山城　（図３）

そこには、土築の城、都の城として東団山城というのがありまして、吉林市の北流する松花江を挟んだ東側ですが、城壁を三重ぐらいに巡らしている城です。文献的には「魏志」夫余伝に円形の城柵として出てくるものです。これは龍潭山城から見た東団山城です。夫余の中心地はこの辺ということになります。対岸は吉林市街です。こうした独立丘陵になっています。この辺に宮殿遺構があったと考えられているところです。文化財指定になっておりますので標石がある。これが城壁です。これが三重ぐらい巡っているというような形の土塁です。この東団山城は、城内がそれほど広くはなくて、居住性があるというふうには言えないのです。これは発掘の時の写真を博物館で撮ったものです。

図３

九台県の山城　（図4）

夫余の他の山城ですが、夫余の地方に行くと先ほど言った円形の城柵というのが幾つもありまして、例えばこれ吉林省の九台県というところですが、そこに幾つもの山城が知られております。簡単な図ですが、城壁があって真ん中に円形の土壙があるのです。これは住居跡であると考えることができます。つまり居住性があるということです。ここに人達が住んでいたということです。高句麗麓下の山城はほとんど居住性がありません。住むところではないです。戦争が長引いて立て籠もるということが長引くということはありますが、本来的に居住するための城ではないということです。これが九台県の土塁です。中にこうした穴があり、発掘していないので、はっきりわかりませんが住居跡とみられる。

図4

二　高句麗の山城　（図5）

そうした夫余とは違いまして、高句麗の山城は基本的には居住性がない城として造ります。それから高句麗の城に限らず、周長が二キロを超えると大型山城というふうな言い方をするのですが、その二キロ以上の山城は沢山あるというのが特徴といえるかと思います。高句麗の地域は、この遼河よりも東側の地域で山があるところになります。ですから、山城が基本ということになります。先ほど言いましたように居住性はなくて、基本的に麓に住んで、一旦緩急あれば中に逃げ込んで、という性格を持っているということです。

五女山城

高句麗最大領土は五世紀、広開土王の跡を継いだ長寿王の時代というふうに言うことができます。その際には朝鮮半島の真ん中ぐらいまで領土を広げるということになります。その発祥の地は、現在の遼寧省の桓

図5

図６

仁という町です。その桓仁の町のさらに北側に、発祥の地とされる象徴的な山城があります。それを五女山城と呼んでいます。この五女山城は発掘を経て、世界文化遺産に指定されましたが、石築の城壁が東側にだけ造られています。高句麗の発祥というのは紀元前の一世紀、『三国史記』という記録によると紀元前三十七年なのですが、実際にはもう少し早まると考えられます。五女山城がそういう発祥の時代というか、初期の都の中心であると言うことはできますが、城壁はその時代からのものではない。住んではいても城壁を作ったのは後だ、というふうに考えるべきだと思います。（図６）

これは霸王朝山城という集安の北の方の山城から見た五女山城です。目立つ山なので遠くから見えるのです。これは霸王朝山城です。位置関係は、こういうふうに集安があって、北の方に霸王朝山城、それの西側

に五女山城。今、ダム湖ができまして、ダムでこの辺は水没してしまったところですが、高句麗の中心地はむしろこちらの方と考える必要があります。ここに方形の石築の喇哈（らっぱ）城があります。もうダムで水没してしまいましたので普段見ることはできませんが、高句麗の最初の時期の都の中心はこちら側です。その西側の山の上に城を築くという形で広開土王碑文に書かれています。その五女山城は、頂上部は平坦なのですけどもそこから百メートルぐらい下がったところに石築の城壁を造っている。こちら側にだけです。ただ登り口には少し石塁を造っているところはあります。こういう特異な山なのであちこちから見て良く分かる。西側入ったところにある石塁部分です。今のすぐ横のところ、もうこちら側はすぐこの辺りまでしか城壁を造っていません。頂上部から百メートル下がったところにある、東側の城壁の東門の付近です。これは整備し直す前の状況です。最初、一九九三年にこの辺りへ行きました。集安はもっと早くから行っているのですが、桓仁に行って見ることができると考えられたのが一九九二年のことでした。平壌に行った帰りなのですが、その翌年の一九九三年から毎年この地域に行っております。高句麗は、中国の漢の武帝の時代に楽浪郡より一年遅れで置かれた玄菟郡がありまして、その中の県城がこの地域にも置かれました。高句麗支配のための県城が置かれていた。高句麗は、その中国の勢力の圧力の中から、それに抵抗する形でスタートするのです。最初に中国側が置いた県城を奪い取ります。奪い取ってそれを使いながら近くに山城を造る、というようなパターンです。それが高句麗の中国支配を受けた地域のあちこちで見ることができます。これが本来の玄菟郡の県城の一つです。

丸都山城　（図7）

そのあと中期の都、集安に移ります。先ほど、五女山城という山城があって、麓には喇哈城という城が東側にあると言いました。基本的に、山城と麓の居城、この組み合わせ。これが都のあり方です。後期の前半まではそういうやり方をします。中期の都は、北朝鮮との国境でもある鴨緑江に面した集安、ここに山城とそれから麓の城があります。これが、中国で丸都山城という言い方をしますが、山城子山城です。城壁が六キロ余りあります。城壁が下まで降りてくるという形の城になりまして、これが遠景です。全体が城壁です。整備された南門です。通路はここ二か所あるのです。こういう整備を経て世界文化遺産になりました。世界文化遺産指定の後もいろいろ造っておりましたので、ちょっと問題があるというふうに思います。これ造っているところです。もう世界文化遺産に指定された後なのですけれど、積み直しているのです。そこから見た下にある、山城下の古墳。これ北側の城壁です。これはもともと、残りのいい部分。その北の城壁から見た集安全体です。鴨緑江がこれで、これ北朝鮮側。

国内城　（図8）

麓の城は、昔は通溝城と言っていて、今は国内城という言い方をしています。しかし、国内城というのは都のことなので、その中の一つの城について言うのは正しくはないのであまり使うべきではないと思います。この平地の城も、本来は玄菟郡の県城であったと考えられるものです。この北側の城壁は、昔から良く残っているところです。西側は、この辺全部立ち退きになりました。以前は住宅密集地で家

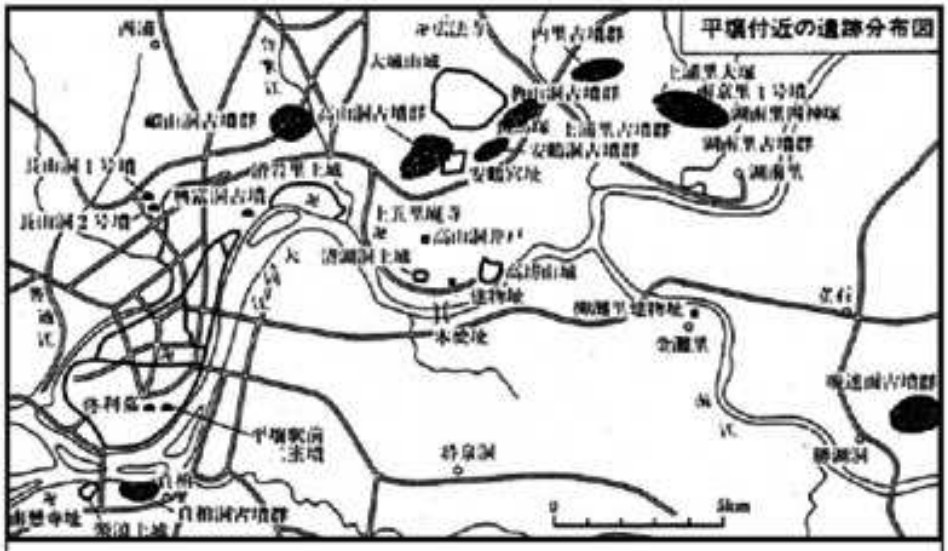
図７

図８

の中を訪ねて後ろにある城壁を見せてもらうということをしていましたが、これも二〇〇四年の世界文化遺産指定に向けてこの辺全部立ち退きとなり、全体がよく見えるように整備されています。

平壌の城　（図9）

高句麗の都は、そのあと平壌に移ります。平壌は、前半と後半と、二つの時期に分けることができます。前半は、大城山城という山城があって、その南門からずっと真っすぐ行ったところに清岩里土城があります。これは先ほどから言っております山城と麓の城のセットです。後半になると、現在の平壌市街地の中心部に移ります。平壌前半の大城山城について。北朝鮮ではその麓にある安鶴宮跡が当時の宮殿だというように言っておりますが、それはおかしい。安鶴宮跡は、高麗時代の離宮と考えるべきものです。これは復元した城壁です。南壁は、ほとんどこのように壊れた状態



最後の都平壌　遺跡分布図
（東潮・田中俊明『高句麗の歴史と遺跡』より。田中作図）

図9

です。城の真ん中に革命烈士の墓というのがありまして、そこから見た城内です。城壁がぐるりと周りを囲んでいる形になり、これは南門入ったところで、なかに遊園地があります。これが復元された南門です。実際の城壁は、この辺を走っています。先ほどの革命烈士の墓から見た市街地です。メーデー競技場があり、陵羅島がある。これが清岩里土城です。一際高いのは金日成総合大学です。反対に、先ほど見た朱雀峰というのはここになり、これが大城山城です。この陵羅島から見た清岩里土城がその対岸です。ただそこには行くことはできません。この島までは行けるのですが、なぜ行けないかというと、ここに金日成主席が住んでいたからで、その聖地です。近づくことも危なかったのですけども、とりあえず競技場まで行ってきました。中洲がこうあって、対岸が清岩里土城です。ここに錦繡山議事堂と言っている金日成と金正日の遺体の安置所があります。これは大同江の東側にある、主体塔というタワーで、そこから見た対岸が金日成広場です。そのちょっと北側に牡丹峰という小さい丘陵がありまして、それが高句麗最後の都の北域にあたります。平壌の後半は、これ全体が都になるのです。そのうちの北の部分がこの牡丹峰の少し高いところになります。この一角です。先ほどの陵羅島、清岩里土城はこちらです。牡丹峰に近づいたところです。王宮があったと考えられるのは内城、こちらは外城ということになります。外城の城壁が、今は全てありませんが、この川に沿って外城の城壁が造られていました。今は堤防があります。これは内城の北門、七星門という門ですね。それから端にある乙密台という角楼です。この辺の積み方が階段式で少し隅丸になっているというのを、もう少し、ちゃんと持ってくれ

ばよかったのですけども、ざっと見ていただくために選びました。これは外城の土塁で、整備しています。

鳳凰山山城　（図10）

高句麗の山城は、特に隋・唐に攻撃を受けたため記録が残り、その記録のおかげで当時の名前がよく分かる、というのが多いです。大型山城が多いというのも特徴です。最大の城がこの烏骨城という、現在の鳳凰山山城と呼んでいる城です。当時の烏骨城、これが遼東半島最大の城です。周長が十五、十六キロぐらいあります。遠景がこれです。こちら側の山と向こう側の山と両方で、城壁を造っている。これはたまたま平壌に行った帰りに、上を通りました。こちら側の山とそれから北側の門がここにあるのですが、二つの山を連ねて造っている巨大な山城です。今、見ていた通路がこちらから容易に入ることはできるのです。これは模型です。城内少し入ったところ。この両側の山、その

図10

稜線全部に造っているわけではないのです。それから、川で流されてしまった今の入口のところ、この辺は下から積み上げています。両方の山をつなぐ形で下の方にこういう石塁を造っているということです。上の方行くとこういうところでも城壁を造っているのです。全部という訳ではありませんが造れるところ、かなり城壁を造っているということができます。これが最大の城です。これは北側の門です。門礎の石もここにあります。ちょっと記録に出てくるのを書いております。枢要の地です。

燕州城　（図11）

他の高句麗山城もちょっと見ていただきます。燕州城と現在呼んでいますが、高句麗時代の白巌城という城にあたるのが、現在の燕州城です。太子河という川に面しています。石築山城の例として紹介します。太子河の少し下流の方から城壁が見える。こっちはあま

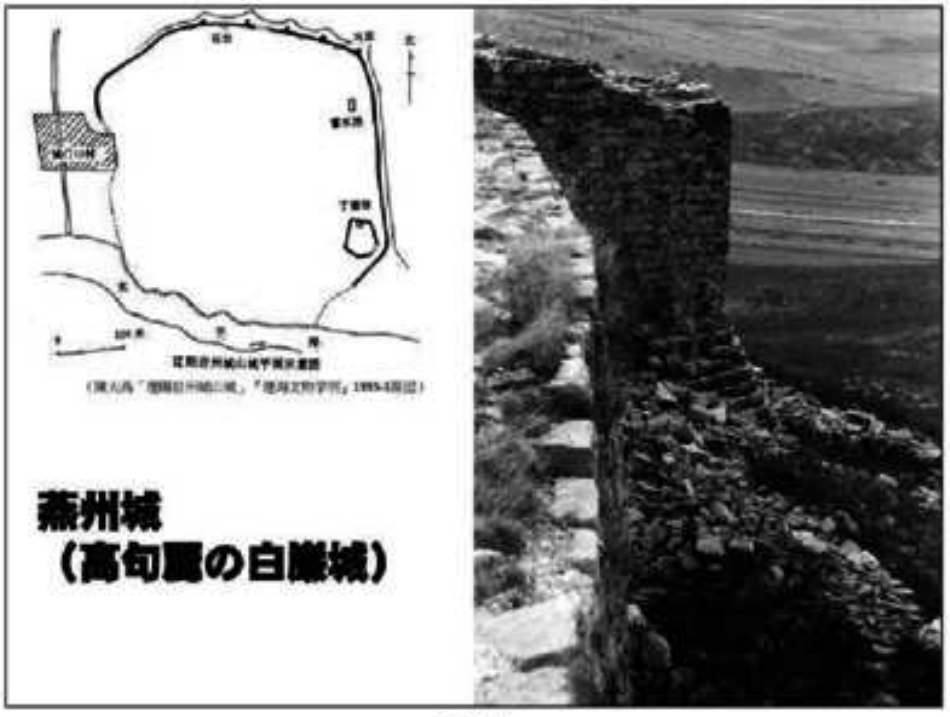


図11

り造っていないのですが。全体が、中が見えてしまうような山城なのです。そして大きな雉が、ここに六つぐらい数えることができる。これは城門が近年、遼寧省の文物考古研究所によって発掘されていまして、門の内外を通す暗渠が走っています。これは高句麗ではなくて、少し後の遼とか金が山城を使うことがあります。その時の構築物ではないか、というふうに考えられるものです。これは新たに見つかっている雉です。城壁の北側で、このような形で緩やかなところに雉を造っているのです。これ城内の東南の端からです。雉が造られたのは向こう側の斜面です。先ほどの門の調査はこちらの部分です。これは太子河の上流側です。

石築の山城　（図12）

さらに他の石築山城として、大連にある大黒山城をあげます。文献に出てくる卑沙城という城にあてられる城です。これは飛行機の上からです。これが全体

図12

で、これが城壁です。こういう石築の城壁がよく残っている。これは庄河にある石城山城です。門です。当時の名前はわかりません。上にある望楼です。それから得利寺というところにある龍潭山城。石築の城で、これが甕城です。飛び出している。こういうように入ります。これは瀋陽のすぐ北にある石台子山城。発掘されたことがあります。これは大連に近い呉姑山城です。これ柳河という少し離れたところにある羅通山城。最後は平壌のすぐ近くにある黄龍山城です。

土築の山城　（図13）

次に土城の例を見ていきますと、最も有名なのは安市城です。唐の太宗が自らやってきて、結局攻め落とすことができなかった城が安市城なのですが、それは土築の城です。難攻不落で結局落ちなかった城ですが、土築と石築どちらが難攻不落かというと、どちらも難攻不落です。山城は基本的には簡単に落ちないで

図13

す。高句麗山城でも落ちた記録が沢山あるのですけどそれは、内応者がいるという場合です。これが英城子山城で安市城にあてられている土築の城です。ここが下から入る部分です。門のあたりは下から積み上げている土塁です。あとはこの、稜線ずっと土塁です。そのような全体土築の城の例としていくつか見ていきます。城門のところとかいくらか石築がなされているという、撫順にある高爾山城は、一九四四年に高句麗山城で一番早く発掘調査がされ、そのあとも中国によって発掘された城です。高句麗の城の部分は、この真ん中に残っている土塁です。あとは稜線を土塁が走っています。ここに門があって、そこを戦前に三上次男先生が発掘された。この図面がその当時の図面で、この箇所にあたります。（図14）　東門のところ、この辺は石築をしている。それからもう一つ、建安城という文献に出てくる城にあたるのが高麗城子山城です。遼

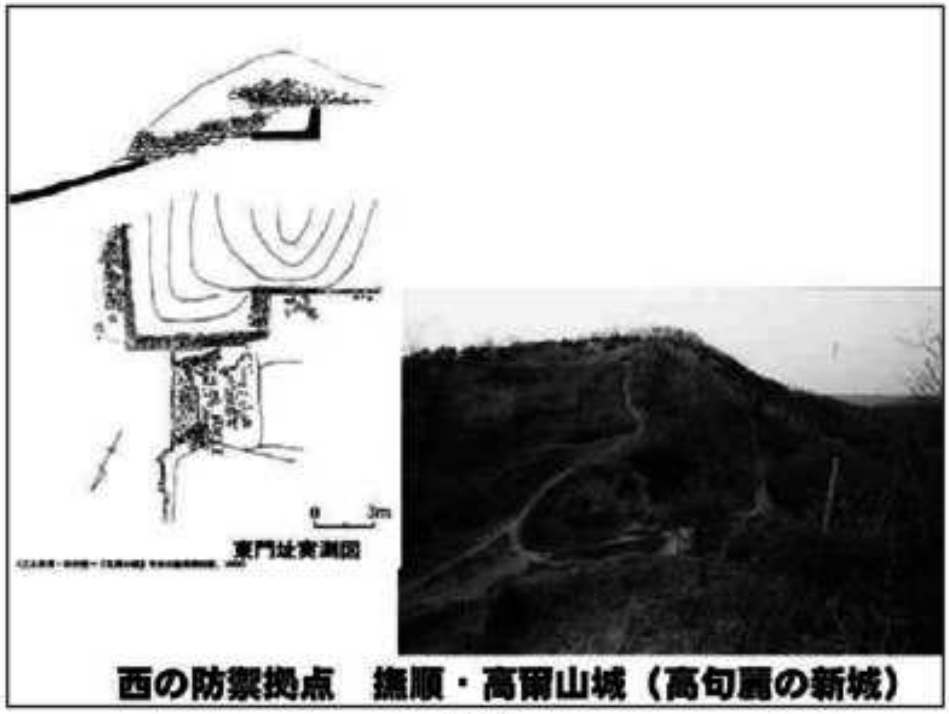


図14

東半島の蓋州というところにあります。これがやはり下から積み上げた土塁です。城壁は、稜線上を走っていくのですが、その土塁、積み上げた部分が版築の土塁です。これ版築した当時の木材が残っているのを見ることができます。城壁が向こうから伸びて来て、ここで門ができている。この門のあるところで勝手に土取りをしていたのですが、同行した研究者に直ぐ伝えたので、土取りはもう中断していると思います。石築の部分もあるというところです。これは発掘された箇所です。他の城の例としていくつか見てきました。

三　百済の山城　（図15）

次に、百済の城を具体的に見ていきますと、百済は民族系統的に高句麗の同系だとか言われますが、実質的にはあまり関係がありません。百済山城は基本的に土築の城です。それから城壁前面の列石、日本の古代

図15

山城の列石のようなもの、あるいは柱穴があるという例が見られます。

風納土城　（図16）

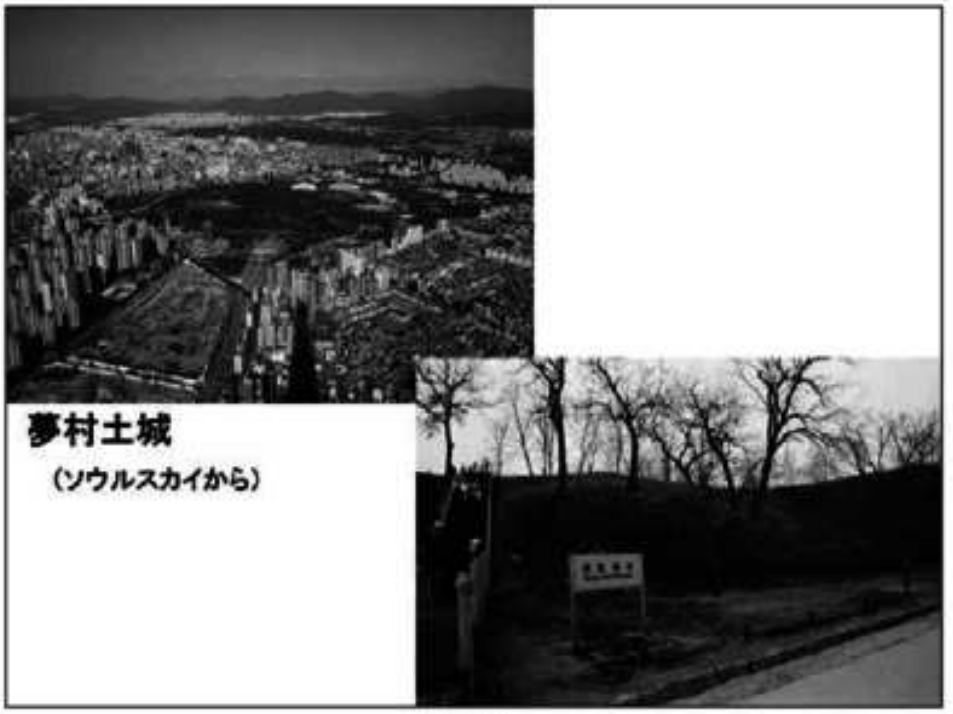
これは都の城ですが夢村土城と風納土城、これが王城であり都の中心です。これが風納土城で、ここに王宮があったとみられます。王宮の探索は続けられているのですが、現在この辺りが発掘調査されています。城壁は断面で幅四十メートルぐらいです。高さが十メートルぐらいあります。これ一九九九年の時の断面調査の時の写真です。この時は、遺物が出なかったので年代が分からなかったのですが、そのあとの調査、漢城百済博物館の展示のために断面調査をして、断面を剥ぎ取って展示をしています。その時に中から遺物が出ました。大体四世紀の後半ぐらい、もう少し遡るようにみることもあるという年代です。これが展示している風景です。

夢村土城　（図17）

そのあとに移ったのはこの夢村土城です。風納土城のすぐ東南です。ここはオリンピック公園になっています。オリンピックが始まる前に調査が始まって、百済の土城が残っているということで、元々選手村の予定だったのですがそれを止めて公園化しました。今は整備されてよい公園になっています。昔はこういう木柵があったと考えていましたが、現在は別途柵を作って補強するというものではないということが分かりましたので、この考えは捨てています。現在発掘しているのはこの北門の内外です。外側の調査が終わり、北門の内側の調査が今続いています。

風納土城（漢城百済博物館展示）

図16



夢村土城
（ソウルスカイから）

図17

公山城　（図18）

百済の場合も、中期、後期と都が移ります。中期の都は公州にありその中心が公山城です。これが全体で、こちらが一九七〇年代に整備された城壁です。城内には、推定王宮址があります。城内の下の部分、川に近いところの部分も発掘調査をしました。五、六メートル下げないと遺構面に達しないのですが、そこを王宮と捉える考え方もあります。図を入れていますので見ていただくことにしましょう。それから、これは東の方に土城部分が残っているところです。

扶蘇山城　（図19）

最後の都が泗沘、扶蘇山城です。こちらも現在発掘が続いています。これ土塁部分です。扶蘇山城に加えて、羅城と呼んでいる城壁が、この東側に、さらに南側に伸びていきます。以前は西側にもあったと見られていたのですが、現在は西側には造られていなかったという考え方になっています。この図は昔の考え方ですね。これは北側の羅城調査の時の、扶蘇山から延びるところの城壁になります。そこから延びたところも復元整備しています。ここに雉があります。扶蘇山城から東に延び、以前に青山城とされていたところで南に折れる。ここまでが北羅城です。そして、山を越えて陵山里寺址や陵山里古墳群の西側を通り、さらに山を越えて錦江河口近くまで続く。これを東羅城と呼んでいます。（図20）これは東羅城の発掘の写真です。この城壁の外側に石築、これ石を何段か貼り付けています。ここでは芯が土塁で外側に何段か積み上げる形の石築を造っているということです。これは羅城の外側に水が

図18

図19

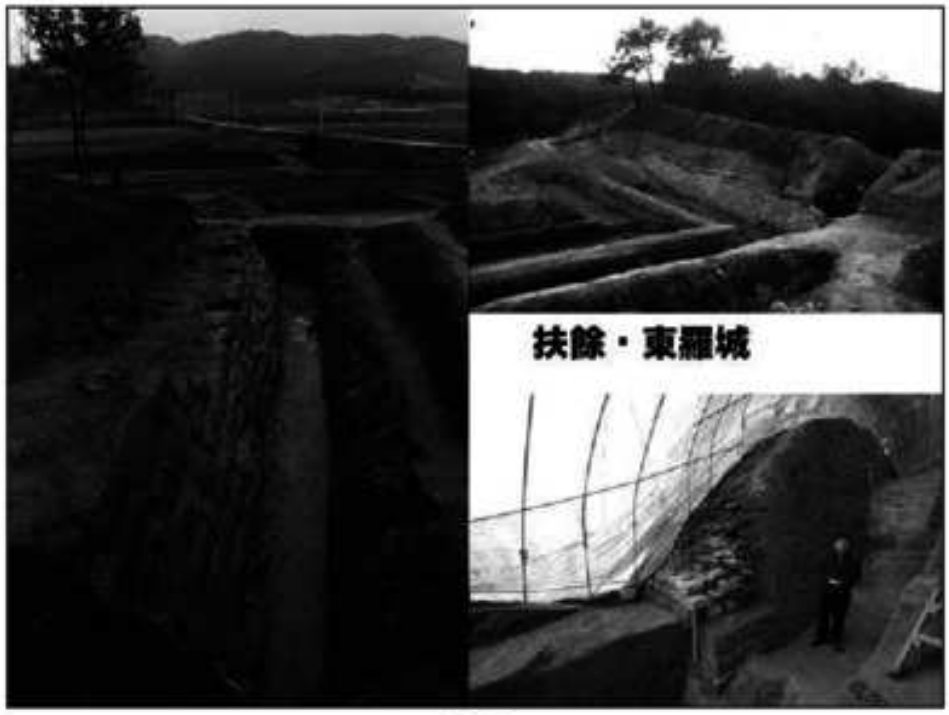


図20

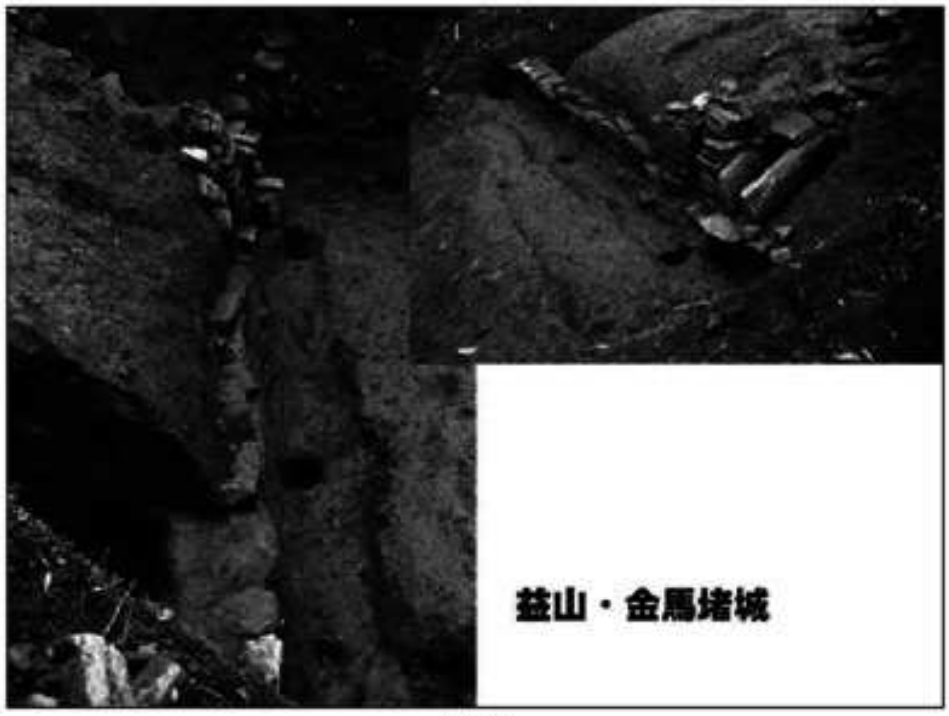


図21

あったという、水城のような推定復元図です。

百済山城の基本形　（図21）

これは全羅北道の益山の金馬堵土城です。これが「都土城」などと間違った言い方をされたりしますが、これがちょうど、版築土塁と列石があり、その前面に柱穴があり、排水の枡遺構もあります。

四　新羅の山城

新羅は、現在の慶州盆地に発祥し、滅亡の九三五年まで、一度も中心地を遷すことはありませんでした。

月城　（図22）

新羅の王宮は、基本的に月城にありました。月城の調査は、二〇〇七年にレーダー探索（物理探索）によっておよその遺構配置が把握され、そのあと二〇一四年から城内の発掘が始まり、現在に至っています。城内の西南の端の方では城壁断面が調査されて

月城と雁鴨池の位置関係（南から）

図22

図23

います。これは城内建物です。これが王宮だと言えるようなところまで調査が進むよう期待します。これが西南の土塁の調査です。この調査によって土塁が下から積み上げていることがわかりました。これは月精橋のすぐ内側の土塁部分ですが、整然とした版築という感じではないものの、下から積み上げている、ということが確認されたところです。

新羅の典型的な山城　（図23）

あとは、すぐ近くにある明活山城。ここも、北門のところが調査されていまして、これが門道です。それから忠北報恩郡の三年山城、これは整備し直したものですが裏の方に行くと元の城壁が残っています。

五　朝鮮三国の山城と鞠智城

以上、朝鮮三国、高句麗と百済と新羅の山城を、

ちょっと駆け足で見ていただきました。高句麗の山城は大型のものが多いし、石築も土築も両方あるのですけれども、隋・唐に攻められたおかげで文献によく出てきますし、記録に残っている資料、名前が残っている資料が多くあります。百済の場合は、土築の城、土城が多くて規模も小さいです。新羅の場合は、規模的に大きいものもありますが、先ほど見ていただいた月城、都の中心なのですが土築の城です。つまり両方あるわけです。(図24)

ということで、鞠智城を考える時の比較の材料にしていただければ、と思い見ていただきました。これで終わります。

図24

パネルディスカッション

コーディネーター

佐藤 信（さとう まこと）

東京大学名誉教授、くまもと文学・歴史館館長、横浜歴史博物館 館長。専門は日本古代史。博士（文学）。

東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部助教授、東京大学大学院人文社会系研究科教授、大学共同利用機構法人人間文化研究機構理事を歴任して現職。

パネリスト

長谷部 善一（歴史公園鞠智城・温故創生館 館長）

石川 日出志（明治大学国際日本古代学研究クラスター 代表）

亀田 修一（岡山理科大学 特任教授）

田中 俊明（滋賀県立大学 名誉教授）

はじめに

佐藤信

ただいま御紹介いただきました佐藤信です。

今回は第十七回目となっておりますけれども、ここ五年ほどはコロナの影響で東京ではシンポジウムができませんでした。昨年は熊本でコロナ対策をしながら、シンポジウムを開催させていただいたわけですが、その時も渡来系技術を話題にしました。ところが、いろいろな課題が残りましたので、今回「渡来系技術と古代山城・鞠智城」というテーマに「渡来文化の重層性」というサブテーマを付した次第です。

前回も話題になったのは、「渡来文化」と一言で言ったり、あるいは一般的に「百済系の影響を受けている」という言い方をしたりすることについての問題です。瓦については「高句麗百済系」といった名前を小田富士雄先生がつけられていて、高句麗の影響を受けた百済系統のものが来ているのではないかという御意見があります。それから、皆様御承知のように六六〇年に百済が一旦滅び、六六三年の白村江の戦いの後には百済復興軍も滅び、六六八年には高句麗が滅んでおります。その後六七〇年には統一新羅ということになり、その後は新

羅なのですよね。百済の故地はもう新羅になってしまっているわけです。七世紀の末、例えば鞠智城が繕治された六九八年の頃には、朝鮮半島はもう新羅ということになっています。で、六六三年の敗戦後に日本列島で築かれた山城の記事に、日本書紀では百済の亡命将軍の名前があるわけです。そういった形で七世紀後半のある時点以降は、百済という国はなくて新羅という国しか朝鮮半島にはないわけです。あるいは、もうちょっと前の時代を言うと、五六二年には加耶が新羅に最終的に滅ぼされておりますから、加耶の影響というふうに見るのか新羅の影響と見るのかというのは微妙です。先ほどのお話にあったように、朝鮮半島の山城でも、百済の時代の山城でありながらその後新羅が山城として使っていて、どちらかというと最終的には新羅の城と見た方がいいという山城もあります。重層性というのは、そういう意味での重層性があります。

それから、今日の亀田さんのお話にあったように、渡来文化にもっと多様性を見て取れるのではないか。百済・高句麗・新羅というふうに一般的に言うのだけれども、百済だけではなくてそれぞれ

の影響があるのではないか、というお話がありました。

それで今日は、その重層性や多様性をめぐって、渡来文化というのをどう捉えたらいいのかということをお話したいと思います。一応目次として、第一章では、渡来文化の重層性や多様性をどう考えたらよいかというお話をいたします。第二章では、それが鞠智城にはどのように見えるかというお話をして、最後の第三章では、今後の鞠智城の調査や研究で渡来系技術についてどういうことが分かるだろうか。研究はどういうことを目指すべきか、についてお話ししたいと思っています。

最初に、今日の亀田さんのご報告が、最後に時間がないために端折っていただきましたので、まとめのところだけでも亀田さんに補足していただけるとありがたいと思います。

亀田修一

いろいろお話ししておりましたら時間がかかってしまって、すみませんでした。それでは、最後のまとめのところだけお話しいたします。

まとめですが、何が言いたいかといいますと、まず山城の選地です。はじめに山城をどの辺(あたり)に造るかということにつきましては、百済からの偉いさんたちが来て場所を決めていると思います。

山城の外郭構造に関しましても基本的に百済に類例がありますので、それでいいのかなと思います。しかし、石垣の構造などにつきましては、明らかに高句麗的なものが入ってきています。これは多様性

の一つと思います。このような点で単純に百済とは言えないのではないか、と思っています。

それから、門に関しましても基本的には百済的なものでいいのですが、このスライドの②の門の一番下に赤で書いていますように、水門に関しましては百済と新羅の両方があり得るのかなと思っております。

内部施設の八角形建物に関しましては基本的に新羅でいいのかな、と僕は思っています。先ほど、田中さんもお話しになっていたのですが、百済では確実な八角形の建物は分かっていません。ですから、無理やり百済としなくてもいいのかな、と思います。少なくとも新羅に八角形の建物があることは動きませんので、ひとまずは、新羅を中心に考えるべきかなと思っています。

貯水施設に関しましては、韓国の中で今後調査が進めば、恐らく、日本のものと類似した土手だけで水を溜め、後ろは素掘りの貯水施設が出てくるのではないかと思っています。

それから、瓦に関しましては、先ほども佐藤さんが紹介されたように、小田富士雄先生は高句麗百済系とおっしゃっています。ただ、小田先生は基本的には畿内経由とのお考えです。僕は、少なくとも、丸瓦が瓦当面の上だけに被っている例は近畿では分かっていませんので、畿内は経由してない可能性があると思っています。そうしますと、現状では、やはり高句麗系か新羅系か。なぜ、このようにこの瓦の系譜に高句麗が付くのかといいますと、実は朝鮮半島の中で、先ほどの田中さんのスライドにもありましたように、高句麗はいろいろなものが多様なのです。朝鮮半島南部地域、つまり百済と新羅の国境

線エリアに、かなり独特のものを作りだしています。この点に関しましては明らかですので、そういう意味で、ちょっとここに高句麗が入っています。そして、やはり新羅との関係が強いかなと思っています。

軸摺金具に関してはよくわかりません。

まとめますと、日本列島の古代山城の技術に関しましては、基本的に百済とか、どこか特定のものというよりは、多様なものが入っていると思っています。その多様なものが入る理由の一つが、新たな百済系の渡来人たちが上に立ち、それ以前の多様な渡来人たち、新羅だったり加耶だったり高句麗の人たちがいて、その人たちが地元の人たち（古くからの倭人たち）と一緒に関わるので、結果的に重層的な渡来系のものが見えてくるのかなと思っています。

こちら（本文図22）がそのモデルです。この岡山の鬼ノ城に関しましては、ヤマト王権が発注者で、実際に上の方に立つのは百済の亡命将軍です。さらに、僕は最近、工兵部隊の責任者クラスも来ているのではないだろうかと思って、これ「工兵部隊の責任者クラス」を入れています。これは、結構大事かなと思っています。といいますのは、かなり高位の亡命貴族たち、例えば日本で言うと正三位クラスの偉いさんたちが、ずっと現場に張り付いて鬼ノ城を造っているのかというと、そんなことはないと思っていますので、実際に工兵部隊の責任者クラスも来ているのだろうと思っています。それに地元の渡来系の人たち、新羅系の人とか加耶系の人が加わります。特にこの地域は後の郡名が賀夜郡です。そして

その中に、現場監督クラスから技術者クラスまでが、重層的にいると思っています。賀夜郡、下道郡、窪屋郡、都宇郡とか、この都宇郡は港の津ですから港湾にも関わった渡来系の人たちがいる、そういういろんな人たちが関わって、実際の肉体労働や資材調達も含めて、鬼ノ城を築城したのだと思っています。

筑前の大野城が築城された大野郷では、ここ十年来の調査で新羅系の人たちの生活跡や墓が見つかっています。だから、そこの担当者も同じように、大野城の築城には新羅の人も関わっているだろう、と考えています。このように、実際の具体的な例、岡山が分かりやすいので挙げているのですが、具体例を考えたら、いわゆる歴史的な重層性、地域的な広がりも含めて多様なものがあるという見方となります。それに、この（本文図22の）白猪屯倉、岡山の場合ですが、白猪屯倉は御存知の方も多いと思いますが、百済系の新しくやってきた王辰爾さんの甥の胆津がここにやってきて、戸籍を作ったりしています。この胆津さんは文系です。いわゆる技術者系ではありませんが百済系の人で、胆津さんたちと一緒に吉備の地に来た人たちがいて、鉄などに関わっていたという理解をしています。ということで、先ほど言ったことと同じになりますが、古代山城には、新たな百済系の将軍、技術者たち、それ以前に来ていた各地の渡来系の人たち、そして在地の倭人たちが関与して、渡来系技術が重層的に見られるのかなと思っています。

佐藤

ありがとうございます。大変よくわかりました。

私、どうもすぐに渡来系と言ってしまうのですけれども、五世紀代に大勢の渡来系の人達が朝鮮半島からやって来ているわけですが、七世紀代にも白村江の戦い前後に大勢やって来ている。日本書紀を見れば、高句麗からも、百済からも、新羅からも大勢の人が日本列島に渡って来ておりますし、その人達が東国に多く安置されています。今日、最初に吉村武彦さんがご挨拶でお話しされたように、武蔵国には高句麗から渡来してきた人々で郡を興した高麗郡があり、新羅郡も八世紀に置かれています。東国には高句麗系も新羅系も百済系も渡来人がやって来ています。下野に新羅系が影響力を持っていたり上野の多胡郡で上野三碑を作ったりしたように、新羅系の渡来人が大勢いて漢字文化も伝わってきたと考えています。このように、東国を考えた場合でも、高句麗だけとか新羅だけとか百済だけという形ではない影響を在地社会に与えているのだろう、ということがあります。

また、五世紀代に渡来してきた人と七世紀代に渡来してきた人が全く同じかというと、それぞれの時代の大陸や半島の技術を体現しながら来ています。古代史で有名なのは、倭国に送られてきたカラスの羽に書かれた文書を、その時のヤマト王権の文人は読めなかった。しかし、新しくやって来た渡来人達はすぐ分かって、ご飯を蒸す湯気に当てて、カラスの羽に書いた文字は墨で書いてあるから読めないのですけど、布帛に文字を転写してすぐに読んだという話があります。これは、古い時代にやってきた古い漢字文化を身につけた人達には新しい文字が読めなかった、ということを象徴しているのだろうと私どもは考えています。そのように、五世紀代の影響もあれば、七世紀代の影響もそれぞれありうる、このあたりが今回の重層性の問題かと思います。

さらに亀田さんのお話を聞くと、同じ重層性でも、例えば大野城や鬼ノ城の築城を指導した百済からの亡命将軍のような立場の人から、現場監督にあたる工兵部隊の責任者クラスの人もいれば、その下には技術系の渡来人もいるし、もともといた在地の渡来系の人々もいて、さらに在地の人々もいるというような形での、ランク別というのか、そういう重層性もあり得ると思いました。

今回は、このようなことを考えたい、ということなのです。

一　渡来文化の重層性や多様性

佐藤

今日は、弥生時代にさかのぼって渡来系の技術の基本的なことを教えていただきました。全体のお話を聞いた上で、渡来系の技術を考える上での重層性とか多様性についてコメントをいただきたいと思いますが、順番に、まず石川さんいかがでしょうか。

石川日出志

やはり弥生時代と古代は、もう全然違うってことを改めて痛感しますね。亀田さんが示された「備中鬼ノ城築城モデル」図、私でも非常によく理解できるものです。あの図をモデルに弥生時代の渡来系技術と在来の人々との技術的な関係、あるいは渡来系の技術や物がどう社会に普及していくかということを考えたときに、土器づくりの場合ですと、現場の作業を行う一番下のクラスにとどまる。それから一番ちゃんと根づいているのが青銅器製作技術ですけども、それも下から二番目クラスです。それもごく少数の一工人グループのレベルです。それよりも上のクラスは、弥生時代にはないと思いますね。

亀田さんの図は、システム体系のピラミッド構造で、一番下のクラスが実際の作業を行う人のレベルです。これ、土器ですとごく少数の技術伝承する人がいれば、一人でも二人でもいれば、すぐ受容できる。青銅器鋳造技術だと、やはり二番目の技術者クラスでしょうか。朝鮮半島から原料を入手する仕組

みと技術とを持って少人数のグループが入って来ていれば、根づいちゃう。ですから、青銅器でもこの三番目の現場監督あたりに届くか届かないかレベル。それ以外の部門、このピラミッドの上半分は弥生時代には全く関係しない、と思います。有力者クラスは、社会の仕組みなどでは大陸と様々な交流をしますけども、技術伝承レベルでは関与しないと思います。ですからこの比較は、私としてはとても理解しやすかったです。最後に思うのは、やはり古代山城からだとこのように見事に描けるのであって、例えば都城とか寺院からだと少し違う、古代山城ゆえに見えてくることが、とても面白く感じました。以上です。

佐藤

ありがとうございます。大事なお話をしていただいたと思います。

寺院の造営などでは、礎石建ちで瓦葺きの建物の体系を初めて導入します。しかも礎石建ちの建物を建てるためには版築という基礎地業や基壇を積まなくてはいけないという技術が必要です。日本書紀にも、蘇我馬子が日本で初めての伽藍寺院、飛鳥寺を建てるときには、百済から瓦博士とか鑪盤博士とか、そういう技術者を百済王から派遣してもらって建てたとあります。そして、その飛鳥寺の遺跡も明らかになっている、ということがあります。例えば弥生時代の水稲耕作、水稲農耕の技術体系が、日本列島で一気に広まったというイメージもありますが、そういうイメージはどうなのでしょうか。

石川

水稲耕作も、青銅器と同じように、その技術の連鎖を伝えるごく少数の設計者、技術者がいれば、大多数は地元の人達で対応可能なレベルだと思います。

佐藤

それはかなり早く広がったと思ってよいのでしょうか。私は、日本人は外から来た新しい技術を自分のものにするのは、結構早く慣れるのではないかという気がしているのですが。

石川

それができる部門と困難な部門があるのではないでしょうか。古代の場合だと古代山城は寺院建築や都城建設に携わる人レベルの技術者だけでは無理ですよ。立体的な土木構造物は、もう無理なのではないでしょうか。

佐藤

今日、石川さんが最後の方で報告なさったような、石垣や石積みの技術などは、やはりそう簡単には倭人が受容できないと。

石川

石積みを立体的に構築するとしても、古墳なんかはたかが知れている。わずか一～二メートル、ずっと上まで急傾斜でも持ち上げられるわけじゃない。場合によってはそれを段築するというような程度だと思うのです。それから竪穴式石室、横穴式石室も石積みをするのですが、最後に天井石で押さえることで構造を安定させている。

しかし、古代山城の石積みを伴う土塁はそうじゃない。石垣を積み、内部に土石、版築もあるのでしょうか、それ自体の重量で保持するという、全く違う土木技術だと思うのです。古墳時代と古代では全く違うんだな、と感じます。

佐藤

特に山城は、築城に失敗したらすぐ自分たちの命がなくなるわけですから、ちょっと違いますよね。

次に、今日の全体の話を聞いた上で、亀田さんいかがでしょうか。

亀田

石川さんの話を伺いながら、僕は主に古墳時代以降のことをやっているのですが、弥生時代の受け入れ方の話は、「あぁそうだよな」と思いました。その中で、やはり飛鳥時代とかになるとまた違うレベ

ルや内容のものが入ってくるので、今日お話しされたように、それぞれの時代に応じて入り方とか受け入れ方とかが違うのだな、と思います。

長谷部さんの話は、実は前回も伺っていて、基本的なところを話されていたので、そうだよな、っていうのと、最後にちらっと話されていました花崗岩の話、僕ほとんど今日触れられませんでしたけれど、あれは実は大事な話だと思っております。僕も昔、花崗岩を少し追っかけたことがあります。高句麗は少なくとも四世紀には花崗岩を綺麗に加工する技術があります。もっと古い時代からあるみたいですけれど、大事なことです。飛鳥時代に百済から入ってきた路子工っていう人が、飛鳥で須弥山と呉橋などの石造物を作ったりするのですが、そのような百済からの技術というのはそれでいいと思います。実は例外的に近江で石棺を花崗岩で作っている例があります。実物は見たことがないのですが、写真で見ると少なくとも石棺の内側はボコボコになっていてあまり上手くないなと思いました。ただ、渡来文化が古くから入っている近江だったらこのような花崗岩加工技術が入ってもいいのかな、と思ったのですが、やはり花崗岩加工に関しては古代寺院とか新しい段階に百済などの技術者の関係で入ったのかなと思っています。そういう意味で、鞠智城の解明には、是非とも花崗岩の研究をやっていただきたい。特に例の唐居敷を誰が作ったのかということは、とても興味深いと思っています。

田中さんのお話は、田中さんならではの写真を今日これだけたくさん見ることができて感激です。残念ながら僕は北方の山城に行ったことはないのですが、やはり高句麗山城の圧倒的な強さを感じまし

た。昔、橿原考古学研究所におられた有光教一先生と話したとき、僕が「百済の考古学、山城などをやっています。」と言うと、「百済の山城は、高句麗山城からみたら子か孫ぐらいだね。」って有光先生に言われました。いや、本当にその通りだと思います。高句麗山城を見ている人が南の山城を見たらやはり「ん？」と思う話なのだと思いました。有光先生から直接言われて「そうですね」としか言いようがなかった記憶がよみがえりました。

佐藤

ありがとうございます。本当にそうですね。

今ちょうど話が出ましたが、今日、高句麗系の山城のうち中国や北朝鮮のようになかなか私どもが行き難いところの山城の姿を見せていただきました。私も、高句麗の山城の石垣の写真を見せていただくと、これは凄いなと思いました。金田城どころではないな、という感じもいたしました。これまでの話と繋げて、例えば花崗岩の加工技術なども含めて、高句麗・百済・新羅の石垣の積み方の違いはあるのでしょうか。今日の重層性・多様性の話と併せて、田中さんからちょっとお話をいただきたいのですが。

田中俊明

花崗岩の問題ということは、なかなかわたしには難しいです。

高句麗山城にはいろんな要素がすべて揃っている、と考えていただいてよいです。今回いろんな技術ごとに集めるということをせずに、ざっと全体を見ていただくという形にしましたが、亀田さんが挙げられたような門だとかそれぞれの部分をテーマにすれば別の並べ方ができたので、それぞれの例が出せるというようには思いましたね。

花崗岩はちょっと別にして、高句麗でもある程度の切り石を積み上げるというのは、集安の王陵クラスの古墳に使われる技術が先行すると思いますから、そうすると四世紀になります。そして、それより後に山城に使われるというように考えます。山城が先行するということはない、と思うのですよね。そうするとやはり将軍塚を完成形として、それより前に築かれていた太王陵なり、集安には大きな石を何段にも積み上げた有段式の積石塚がありますけども、そういうところでまず使われていたと思います。ですから五女山城でも都として見れば別に紀元前後からこの山上を使っている。その時代を示す遺物も出ます。しかし、城壁もそうかと言うとそうではない。城壁は後になって造ったと考えるべきだと思いますから、山城を使っている時期と城壁を造った時期は一緒にしてはいけません。石築の城壁は、一番早くてそのくらいの時期かなと思います。

さらにわたしの感想というか、亀田さんの鬼ノ城の築造は六六七年ぐらいのことでしたので、要する

に滅亡時ぐらいまでの渡来人ということですよね。そして秦氏にせよ東漢氏にせよ、そもそも重層的というか複合的なので、そういう技術者がもし仕えるとすればその中にそういう技術が入っていてもいいと思いますが、それから後のことも考えていいのではないか。佐藤さんは、六七〇年で新羅というふうに言うべきみたいに仰いましたけれども、唐との戦争があるのでそれを終えて六七六年に統一新羅です。統一新羅という言い方は日本だけですけど、その時期から後にしても、別に新羅技術というわけではなくて、百済の技術もそのまま伝わっているし、高句麗系と言ってもいい、百済系と言ってもいい。だから、その後になって新羅人もやって来ますが、そのあとの重層的なことも、やはりもう少し考えてもいいかなと思うのです。六六七年で完成して、それまでに来たその渡来人の複合的なあり方が反映しているというだけではなくて、もう少し後のことも含めていいのではないかなと思います。

個別に年代も考えていかないといけないというところでしょうから、それはこれから、もう少し細かいことに期待をしたいと思います。

佐藤

私、話を分かりやすくしようと思って六七六年の新羅による統一以降は新羅でいいのではと言ってしまったのですが、確かに新羅になっても高句麗系の技術はあるし、百済系の技術もあるし、伝統的な新羅もあるし、加耶系も残ってはいる、と私も思いました。

花崗岩は、人力で細工し難いほど、もの凄く硬い石ということです。私は奈良文化財研究所にいるとき、所長の坪井清足さんから「花崗岩の礎石を使ってる寺は格が高いんや、凝灰岩のものはそうでもない。」ということを教わった記憶があります。鞠智城も花崗岩を使っているということです。今までのお話をふまえて、石垣の技術も含めて、鞠智城にも石垣が残っているところがあるわけですが、いかがでしょうか、長谷部さん。

長谷部善一

鞠智城の花崗岩の使用について、まずご紹介したいと思います。最近私が鞠智城で、礎石建物で使われている石材を数えました。それが約三百個、一棟につき十二個とか十六個とかあるのですが、その総てを数えると約三百個ないといけないところが、今のところ二百個ぐらいしか残ってないのです。あとの分は、後世抜き取られたりしてちょっとわかりません。その中で礎石を石材別に分けてみますと、五割が花崗岩で二割が凝灰岩、そして一割が安山岩となり、残りはその他となります。いろんな石材が使われておりますが、半分が花崗岩、この五割というのは非常に大きな数で、これ今からもうちょっと研究を進めていきいかなければなりませんが、時期が古い建物礎石、国（大宰府）の関与があったのではないかと言われている礎石建物には花崗岩が使われていて、その後、時代を経て八世紀以降、九世紀に近くなると多様な石材が使われる、ということが少し分かってきています。

鞠智城は、西側土塁線あたりで非常に多くの花崗岩を採ることができます。城内で一番建物群が建てられているところから数百メートルも行かないところで、今でも西側土塁線を歩くと花崗岩が露出しているところが多くありますので、そこがおそらく供給元だろうと考えています。そういったところで鞠智城を考える上では、花崗岩、さらに阿蘇を控えた熊本県北部に立地している以上はやはり凝灰岩の使用、この辺りもしっかり考えていかないといけないかなと考えております。

石垣ですが、鞠智城にも「馬こかしの石垣」とか「三枝の石垣」があると言われておりますけれども、これらはまだ発掘調査の方が進んでおりません。今後、石材なども見ていきたいと思います。けれども鞠智城で、唐居敷であるとか、礎石以外のところでの花崗岩の使用というのは、ちょっと私も一見したところでは見当たらないかなと思っております。

佐藤

唐居敷は、すべて花崗岩ですよね。三メートルも幅のある立派な唐居敷が堀切門にあり、また深迫門や池の尾門にも唐居敷があります。唐居敷の軸摺穴を覗くと鉄製品で擦れた痕跡が残っているので、今日の亀田さんが紹介してくださった鉄製の軸受け器具があったということは間違いないと思うのですけれども、系譜がわかるといいなと思います。

二　鞠智城から見る渡来文化の重層性

佐藤

あと、今まで鞠智城を考えるときは割と百済の影響というものを考えてきたわけです。今日の、今までの話から鞠智城を考えるとき、重層性や多様性というのはどう考えられるのでしょうか。百済系の金銅仏の話もありますし、あるいは出土した木簡に、おそらく菊池郡に住んでいた「秦人忍」の米の荷札木簡もあって、渡来系の人達との関係を、どのようなところで見ればよいのか。ということで、長谷部さん、ちょっと先生方に聞きたいことはございませんでしょうか。

長谷部

今日すぐ聞きたいところということまでは、私も今日すぐすぐには出てきませんけれども。

田中先生のスライドを見せていただき、その後の亀田先生のコメントをお聞きしたところ、非常に、鞠智城を考える上で「もっと自由に考えていいんだな」というふうに思いました。これまで熊本県では、百済系というところを非常に重要視して研究を進められてきた、というところがあるかと思います。

近年、若手研究者の特別研究というのを鞠智城で毎年やっております。その中で昨年、美術史分野の若手研究者の方が鞠智城の貯水池跡から出土した銅製の菩薩立像ついて検討なさいました。この菩薩立

像についても多くの新たな知見が示されています。そういった意見も今後は参考にしながら、いわゆる多様な部分での研究というのをもうちょっと広めていかねばと考えています。

佐藤

鞠智城では熊本県教育委員会が、四十歳以下の若手の研究者の方に鞠智城を研究してください、それについては研究助成金を差し上げますということで、毎年四人の方に研究費を差し上げて研究していただいています。その若手研究者の報告は、毎年、素晴らしく新鮮な研究成果を挙げてくださっています。その中で前回は、美術史の研究者の方が、百済系の金銅仏と言われているが新羅系の可能性があるのではないか、ということを報告されました。これも、ちょっと多様性に入ってくるかもしれません。

さて、田中さんにちょっと伺っておきたいのですが、先ほど、有光教一先生は「百済の山城は高句麗から見れば孫クラスじゃないか」と言われたのですけれども、鞠智城をご覧になるといかがでしょうか。

田中

百済の城では、鞠智城のように低丘陵というか、あのような感じの山城のイメージ、あまり浮かばないですね。でもさっきちょっと話していたら、ソウルの夢村土城が丘陵低いのですね。城壁を周りに

造っているんですが、かなり低いですよね、夢村土城の場合は。でも、ぴったりと百済的な山城で、鞠智城とよく似ているなっていう感じの山城は、わたしの印象ではなかなか見出しがたいという感じがします。

佐藤

わかりました。百済の夢村土城とか扶蘇山城は、高句麗に攻められて落城してしまいますね。けれど、高句麗の城は落城しないで隋と唐をしばしば追い返した。先ほどあったように、隋や唐は皇帝自らが攻めてきたのに追い返してしまうこともありますよね。

田中

その百済自体が滅んでしまいますので、おっしゃるとおりです。ただ、夢村土城については、そこから都が移っただけで、夢村土城が落城したわけではないというように見えませんかね。四七五年に攻められた時の城はそれなので。

最近、夢村土城でも高句麗の遺構が確認されてきました。今、北門のところを発掘しているんですが、当初、高句麗は漢江よりもあまり南に下りてきて支配をしていない、という考え方が多かったのです。ソウルの漢江に嵯峨山堡塁というのがあるのですが、そういう堡塁だけ造って、南まで支配に下り

て来ていないのだ、みたいな考え方あったのです。しかし、夢村土城の中から高句麗の遺構が出てきています。発掘している北門のところから道路が見つかっていまして、南門から入ったとこにある王宮推定地に向かう道路ではないかと言われています。多分これから発掘していくのでしょうが、今調査しているところに連結されるんじゃないか、というような高句麗の道路が見つかっている。ちゃんと高句麗も麓に下りて、ソウル地域の漢城の平地部分を使って支配していた、ということです。ちょっと様相が変わってきました。後から新羅も入ってきますので、高句麗はソウルを七十年ほどしか使わないのですが、そのような状況があって、そのあともソウルは使われ続けてはいるのです。

佐藤

古い時代、ソウルには百済の王都があったのです。漢江の南にあったのですが、高句麗が攻めて来て、漢江の北の山城を拠点にして百済を追い払ってしまった。百済は王都を追われて南の方に、公州だとか扶余の方に部を移転していくという変遷がある。百済の王宮があったソウルの地が高句麗のものになる。ただし、そのあと新羅がそこを奪って、結局新羅が強くなっていくという流れがあります。漢江に面したところにある夢村土城だとか風納土城は、百済の王城です。これについて私はちょっと落城したという言い方をしてしまったのですけれど、落城ではなくて移転していったという方が正確ですね、すみません。

三　今後の鞠智城の調査と研究

佐藤

さて最後に、あまり時間がないので大変恐縮なのですけれども、これから鞠智城の調査研究を進めていくにあたって、今日のシンポジウムを踏まえて、どのような方向の研究が望まれるか。私は先ほど、鞠智城に残っている石垣の研究をもうちょっと進めていただけるといいと個人的に思ったのですけれども、そういった示唆をいただけるとありがたいと思います。石川さんいかがでしょうか。

石川

私は鞠智城の調査研究に望むことというよりも、その研究を受けとめる側でしかありません。その点で私の関心は、やはり石垣技術、土塁技術、城壁技術です。これだと、古墳時代との比較とか、通時代な見方ができますので。

佐藤

亀田さんいかがでしょうか。

亀田

はい、今日一通りお話をうかがって、花崗岩の検討、これを是非とも続けて欲しいです。といいますのは、門のあの花崗岩は現地で採れたものなのか、それともどこかから持ってきているものなのか。

長谷部

城門の唐居敷の花崗岩ですよね。あれは恐らくは、まだ分析までしたわけではないのですけど、表面観察だけでいくならば、すぐそばの地元で採れた石材でしょう。

亀田

すぐそばで？

長谷部

はい。西側土塁線には、掘切門の唐居敷を超えるような大型の石材が地表に見えておりますので、そういったところから選んで持ってきているのだと思われます。

亀田

そうしますと、そういうところを掘れば石切場みたいなのが見つかる可能性があると思うのですよ。あれだけ大きい石材なので、もしそういう石切場みたいな場所が見つかると凄く面白い話になるのかなと、今日伺いながら思っていました。

長谷部

その可能性は非常に高いと思っております。西側土塁線の一部は、今まで版築調査の目的では調査がおこなわれていますが、花崗岩の採掘場、石切場としての目的では調査はされていませんので、将来の調査課題として残しておきたいと思います。

亀田

もうちょっといいですか？これはもう以前から言っている話ですが、貯水池の中を掘って欲しい、これが一つ。それから、北東側の城壁線はあまりまだよく分かっていないですよね。あの辺も実は、今日も田中さんが紹介されていたように、崖をそのまま使っているというのもあると思います。その崖の上に、やはり何か作っているのもあるのかなと思っています。香川県の屋嶋城跡も似た様子が見られます。そういう調査もできるのかなと思いますので、まだまだ、いろいろネタはあると思います。是非と

もその辺トライしてください。

佐藤

それでは田中さん、お願いします。

田中

鞠智城はこういったシンポジウムを継続されていますし、先ほども話題になった若手研究者に助成して、最新の研究を集めるとかなさっている。だから一番進んでリードしている、と思いますので、そういう役割をずっと果たしていただければありがたいと思います。

佐藤

なかなか今、予算も厳しい時代にはなってきているようですが。それも含めて長谷部さんいかがでしょうか。

長谷部

仰っていただいたこと、非常にありがたいと思います。今後もこの鞠智城シンポジウムと若手研究者

の特別研究、これについて私たち歴史公園鞠智城・温故創生館の存在意義の一つ、これはそれぞれ一つだと思っていますから、この二つをしっかり継続するよう取り組んで参りたいと思っております。

佐藤

今、石垣だとか花崗岩の研究課題の話がありましたが、門の構造なども最近、報告書を目指してまとめておられると聞いたのですが、それについてちょっと紹介していただけますか。

長谷部

近年、鞠智城の東側の城門、深迫門の整備を目的に発掘をしました。小規模な発掘が多かったのですが、今、一旦掘るのを止めて、これまでの成果の取りまとめを始めたところです。深迫門の整備をするにあたっては、今までのトレンチを繋ぐように少し広めに調査区を設けて、門の構造などを確認する調査を最終的にはやりたいと思っています。それについては文化庁からも、最終的な調査をやるようにとアドバイスをいただいております。まず、その調査をおこない城門の位置を確定させてから、城門の整備などに移行していくと思っております。歴史公園鞠智城のガイダンス施設、温故創生館から歩いて一番近いのがこの深迫門跡ですので、皆さんに来ていただき見ていただくのにも非常に良い場所かなと思っております。

佐藤

それを踏まえて、報告書とともに、模型も作られるという話を聞いたのですが。

長谷部

今年度、文化庁の補助金をいただいて深迫門の地形模型を作っています。鞠智城の城門、深迫門の構造ですとか、土塁のとり付き方を皆さんに分かりやすく説明する方策の一つとして作っています。

佐藤

地形だけでなくて、土塁だとか石垣だとか、門の構造も分かるといいなと私は思っているのですが。

長谷部

土塁とかその辺は地元模型をもとに復元することもできますので、先生方とも議論させていただきたいと思っております。

佐藤

ぜひよろしくお願いします。

ということで今日、田中さんからはエールもいただきましたが、今回十七回目となる鞠智城シンポジウム。随分長く積み上げてきたのですけれども、先ほど申し上げた若手の方の研究助成でも、先ほどの美術史の方の報告のように、毎年フレッシュな研究成果をどんどん積み上げてくださっているということです。鞠智城は、これからも調査・研究を重ねていくということですので、調査・研究の成果はこれからもまだまだ注目されるものが得られるかと思います。

今日も、私お話を伺って、まだ鞠智城で学ばなくてはいけないことがいっぱいあるな、課題がたくさんあるな、と思いました。亀田さんが示してくださった備中鬼ノ城築城モデル、ピラミッドみたいなモデル図は、どうやって説明して肉付けしていけるのだろうかということも含めて、また、できましたらこういうシンポジウムの機会を今後とも続けていただけるとありがたいと思っております。また皆様にも期待していただければありがたいと思っております。

本日は長いこと、ありがとうございました。最初のくまモンやころう君の舞台にすごい迫力があって、どうやってシンポジウムを盛り上げようかなと思っていたのですけれども、最後まで熱心にお聞きいただきましてどうもありがとうございました。それではこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。

まった拠点を形成した。大型山城が多く、石築・土築ともにあり、技術的には朝鮮三国山城の基本となっている。それに対して百済は、土築の山城が一般で、規模も小型である。城壁はとうぜん版築土塁であるが、下部前面に石を積み上げるもの（列石）がある。新羅は、高句麗山城の影響を受けた部分もあり、石築・土築ともに多いが、列石はみられない。

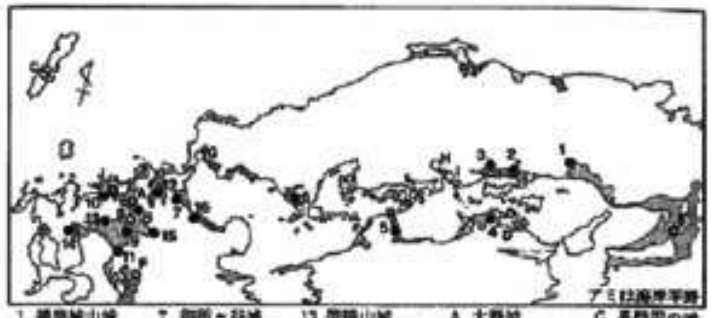


図3　西日本の古代山城分布図

（向井一雄『よみがえる古代山城』）

古代山城構造比較

（向井一雄「山城・神籠石」『古代の安徳遺跡群Ⅱ』奈良文化財研究所、2004）

	山城名	所在地	面積(km²)	城壁(m)	最低標高(m)	外郭城構造					列石・石材							城門		類型
						土塁・石塁	版築・壁	折・曲	線形	水門	列石	石材加工	石材搬入	線型・屈曲	築き方	段築・雛壇	列石部材（有無・質量g）	城門	門礎	
1	鞠智城山	熊本県たつの市	1.8	450	350	石?	内托	折?		石垣		野面	現地					○?	凹型	通地1外郭1-a
2	大野小野山	鞠山(現岡山市・瀬戸町)	3.4	198	64	土	内托	折	○	石垣	○	割石	現地	線型	横	×	×	○?		通地1外郭1-a
3	亀城山	鞠山(現総社市	2.8	400	230	土・石	内托	折	○	石垣	○	割石	現地	屈曲?	横	×	○0.5	○	凹○凸	通地1外郭1-a
4	鹿嶋城山	香川県坂出市・丸亀市	6.2	462	273	石・土	内托	折		石垣	○	野面	現地	線型	横	×		○	凹型	通地1外郭1-a
5	永納山	愛媛県西条市	2.5	128	15	土	内托	折	○		○	割石	現地	線型	横	×	○0.0			通地1外郭1-a
6	石城山	山口県光市・周南市	2.5	350	230	土	内托	折	○	石垣	○	割石	現地	線型	横	○	○2.15	○	凹型	通地1外郭1-a
7	御所ヶ谷	福岡県行橋市・豊山町・苅田町	2.9	247	75	土	内托	折	○	石垣	○	切石	現地	線型	横	○	○1.8	○		通地1外郭1-a
8	阿志岐	福岡県筑紫野市	2.8	339	98	土	内托	折	○?	石垣	○	切石	現地	屈曲?	横	×		○?		通地1外郭1-a
9	高良山	福岡県久留米市	2.7	250	35	土	内托	曲	○?	石垣?	○	切石	現地?	屈曲	横	×				通地1外郭2
10	雷山	福岡県糸島市	2.3	483	300	土・石なし	内托?	折		石垣	○	切石	搬入	屈曲	横	○	×			通地1外郭2
11	女山	福岡県瀬高町	3.0	202	4	土	内托	曲	○	石垣	○	切石	搬入	屈曲	横	○	○3.0			通地2外郭2
12	鹿毛馬	福岡県嘉穂町	2.2	70	0	土	内托	曲	○	土塁	○	切石	搬入	屈曲	横	○	○3.0	○?		通地2外郭2
13	帯隈山	佐賀県佐賀市	2.4	174	9	土	内托	曲	○	土塁?	○	切石	搬入	屈曲	横	○	○3.0	○		通地2外郭2
14	おつぼ山	佐賀県武雄市	1.9	66	0	土	内托	曲	○	石垣?	○	切石	搬入	屈曲	横	○	○3.0	○		通地2外郭2
15	肥木	福岡県杷木町	2.3	130	0	土・石なし	内托?	曲	○?	土塁?	○	切石	搬入	屈曲	横	○	×			通地2外郭2
16	唐原	福岡県上毛町	1.7	73	0	土・石なし	内托?	曲?		土塁	○	切石	搬入	屈曲	横	○	×	○?		通地2外郭2
A	大野城	福岡県太宰府市・宇美町	6.5	410	140	土・石	内托	折?	○	石垣	○	野面	現地	線型?	横	×	○1.6	○	○型	通地1外郭1-a
B	基肄城	佐賀県基山町	4.4	416	130	土	内托		○?	石垣		野面	現地					○	○型	通地1外郭1-a
C	金田城	長崎県対馬市	2.8	276	270	石	内托	折?		石垣	○?	野面	現地					○	○型	通地1外郭1-a
D	鹿嶋城	香川県高松市	4.0	292	260	石	内托	折?				野面	現地					○		通地1外郭1-b
E	高安城	大阪府八尾市・奈良県平群町		480		土?	内托?													通地1外郭1-b
F	鞠智城	熊本県山鹿市・菊池市	3.7	160	45	土	内托?		○?		○	野面	現地	線型?	横	×	○1.6	○	○型	通地1外郭1-a

日本の古代山城の多くは、百済的であるとされる。『日本書紀』天智4年（665）条に、

> 秋八月、達率答炑春初を遣わし城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣わし大野及び椽（き）の二城を築かしむ。

とあるように百済官人を派遣して築城させており、関係は明白である。達率という高位の官位をもつような高官が築城技術を持っていたとは考えられず、工人たちを従えて指示をしたということであろうが、百済技術であることは問題がない。記録のない多くの古代山城も、そのような百済山城の特徴と合致するといえる。

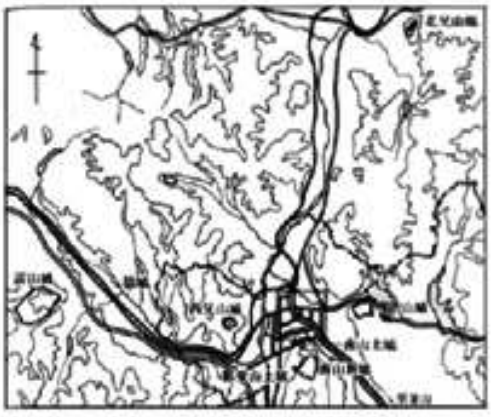
そうしたなかで、鞠智城はやや特異かもしれない。ほかの古代山城に共通する特徴をもちながらも、低い丘陵に立地し、調査の進展にもよるが官衙建物も多く、機能的に異なる点があるようである。ただし、漢城時代の夢村土城なども、似たような特徴を持っており、鞠智城が百済山城の類型から大きくはずれるということではない。

を混ぜて突き固め、上を粘土で覆ったもので、高さは10～20mある。城内は平坦で、ここに宮殿が並んでいたはずである。2007年にレーダー探索（物理探索）によって、およその遺構配置はわかった。その後、2014年から城内の発掘が始まり、現在に至っている。

A～Dの四地区にわけて年次的に調査が進行している。最初に発掘されたC地区の調査では、17基の建物址、それに重複する九基の建物址が確認され、合計26基の建物址が確認された。それが、殿舎の建物のように、東西建物と南北建物が配置されており、王宮に関連する建物のようにみられる。ただ、今後つづく、全体の発掘を通して考えられなければならず、すこし先のことになる。

月城城壁や城内の調査に先立って、南側の南川に面したところは別にして、周囲の堀（垓字とよぶ）の調査が行われ、その造営時期が5世紀後半であることがわかった。その後、2014年以後、城壁の調査も進み、4世紀に開始され、400年を前後する時期に完成したのが最初であると考えられるようになった（『月城西城壁発掘調査資料集』国立慶州文化財研究所、2021）。北側の垓字は、7世紀末に埋められ垓字としての役割を終えている。東北の一部は、東宮への通路として、護岸石築が作られ造景化した。7世紀後半に月城の性格が変わったことを意味している。

西南部の月城城壁調査によれば、城壁は地山の上に築かれている。これまで自然丘陵を利用し、低いところを補うだけであったとみていたものが、基礎からすべて築かれていることが確認されたのである。城壁調査は進行中で、ほかの地区でもそうであるのか、全体的に造られた丘陵であるのかどうか、今後の調査を待たなければならない。



月城周囲の状況についてみれば、南には南山があるが、その北端に**都堂山土城**と**南山土城**がある。それらの南側に**南山新城**が築造された。これまで10点発見されている「南山新城碑」によって591年築造が確定できる。それに先行して、東に**明活山城**が造られているが、この場合にも、土城が以前からあったようである。西には**西兄山城**がある。羅城をもたない新羅都城は、これら周囲の山城が防御に重要な役割をはたしている。明活山城は、近年、北門址附近と城壁の一部が発掘調査された。7世紀以後の遺物がほとんどみられず、その頃には廃棄されたのではないかという意見もある。647年の毗曇の乱に際に反乱軍がここに駐屯し、月城の王軍と対立している。そのことと関わりがあるのかもしれない。

新羅の典型的な山城として知られているのが**三年山城**であり、忠北報恩郡にある。歴史的にも重要である。470年の築城記事があり、それに従っている。稜線に沿って築造した包谷式山城で、周長1680m。土砂を交えず純粋に石材のみで、板状割石を用い、横口積みと井字形の小口積みを併用して垂直に積む。

5．朝鮮三国の山城と鞠智城

ここまで朝鮮三国の山城についていくつか例示しながら述べてきたが、簡単に整理すれば、高句麗は山城による領域支配を貫徹した。山城自体に居住性はなく、山麓や近傍に別の城を築き、両者あい

4．新羅の山城

新羅は、現在の慶州盆地に発祥し、滅亡の935年まで、一度も中心地を遷すことがなかった。王城は**月城**であり、周囲に山城を配している。

新羅の王宮は、基本的に月城にあった。『三国史記』巻34・地理志1に、

当初、赫居世二十一年（前37）に宮城を築き、金城と名付けた。婆娑王二十二年（101）に金城の東南に城を築き、月城と名付けた。または在城と号した。周長一〇二三歩である。新月城の北に満月城がある。周長一八三八歩である。さらに新月城の東に明活城がある。周長一九〇六歩である。さらに新月城の南に南山城がある。周長二八〇四歩である。始祖以来、金城にいたが、後世になると、多く両月城にいるようになった。

ここには、宮城として金城・月城がみえており、月城も新月城と満月城に分かれると記している。そして、王は始祖の赫居世以来、金城にいたが、婆娑王の時（101年）に月城を築き、その後は両月城にいるようになった、というのである。

しかしこの記事には、疑問がある。『三国史記』冒頭の巻1・新羅本紀1・赫居世21年（前37）条に「京城を築いた。金城と名づけた」とある。ここには、先の地理志とは異なり、金城を京城のことであると記している。京城とは王都全体のことであるが、宮城はそうではなく、王宮を指すとみるべきである。従って、地理志と新羅本紀の説明が大きく異なることになる。『三国史記』において、すでに混乱があるのである。実態としては、王都全体すなわち京城を金城とよび、宮城を月城とよんだと考えられ、つまり新羅本紀の叙述が正しい。おそらく『三国史記』の編者は、金城と月城との違いについて、よくわかっていなかったと考えられる。

なお、上記の地理志の記事に「または在城と号した」とあるが、月城からは、「在城」銘の瓦が多数発見されている。「在城」とは「王の住まわれる城」の意で、実態に即した呼称といえよう。

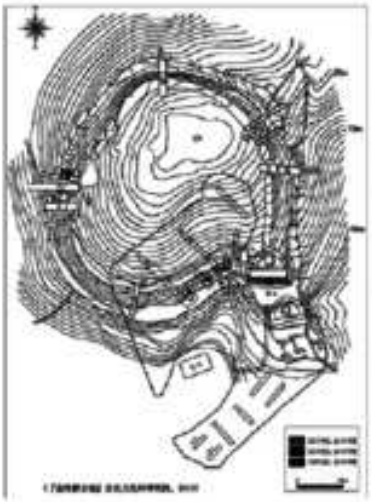
始祖の時代、すなわち国の最初から、王都があるのは必然である。伝説上の建国年代を別にして、具体的に「建国」の絶対年代がいつであるのかは、新羅史の理解の上では重要であるが、ここで必要なことは、月城の築造年代である。以前は、上記の婆娑王の記事をそのまま認めて101年築造としてきたが、わたしはずっとそれに反対してきた。新羅本紀3・炤知麻立干9年（487）条に「秋七月、月城を修築した」とあり、翌年に「春正月、王が月城に移居した」という記事があるが、それこそが実際に、月城を王宮としたはじまりであると考えていた。しかし実際には、それよりも先行することが近年の発掘調査で確認された。

月城の規模は、報告者によって数値が一定しないが、およそ東西900m、南北260mで、面積は6万余坪。南面は、南川が自然断崖をなしており、ほとんど城壁をつくっていないが、そこを含めて周長約2400mという。城壁は土石

址山城との接合部分の発掘調査の結果、包谷式の山城が百済時代に最初に築造され、山頂式山城の築造時期は、部分的に一～二段階遅いとわかった。近年の発掘でもおよそそれが裏づけられているが、泗沘楼山城の一部が百済にさかのぼる可能性も指摘されている。

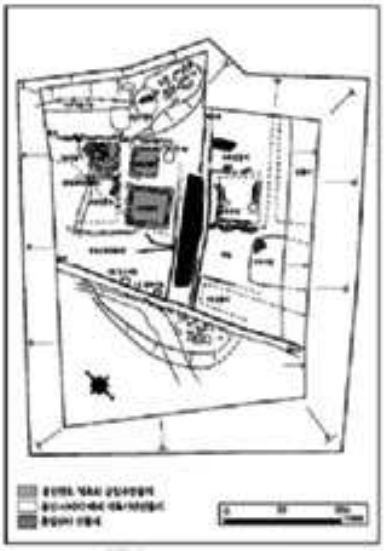
この王都には、**羅城**が築かれている。扶蘇山城から東に延び、以前に青山城とされていたところで南に折れ（ここまでを北羅城）、山を越えて陵山里寺址の西側を通り、さらに山を越えて錦江河口近くまでつづく（これを東羅城）。かつては扶蘇山城から西に延びる西羅城や、南の山の上に延びる南羅城も想定することがあったが、現在は、西羅城については認める研究者もいるが、なかったとみるほうが多く、南羅城はなかったとされるようになった。北羅城や、東羅城の陵山里寺址の西側は発掘され、外側には石築があり、芯の部分は土塁であるというのが基本である。

これ以外の山城について益山（全羅北道）を例にしたい。益山には、王宮里遺跡があり、7世紀前半の離宮とみられるため、まったくの地方ということではない。そこにおける山城をみると、まず**益山土城**（五金山城）があり、円光大学校馬韓百済文化研究所が1980年と1984年に城壁試掘調査と南門址の発掘調査をし、その後、2016年になって城内の試掘調査、つづけて2018年にかけて4次にわたって発掘調査をしている。「北舎」銘土器や「首府」銘の印章瓦など7世紀百済の遺物が出土している。



知られていなかった西門址も発見されたが、統一新羅時代に廃棄されたこともわかった。周長690mである。また、その東側に**金馬堵土城**がある。金馬渚という歴史的地名があり、それをまちがえて金馬猪・金馬堵・金馬都などと書き、金馬が脱落して、猪土城・堵土城・都土城などわけのわからない名称になっている。周長370m。1991年と2017年に発掘され、版築土塁と列石がみられる。百済山城の基本形態といえるもので、日本の古代山城の特徴に通じるものである。列石前に柱穴があるが、築造に際して必要であったもので、柵を立てるわけではない。日本でも多く検出されている。

や特異である。6号建物址は、南向きであるが、軸を30度ほど東に振っている。石築の基壇が二重になっており、下段は正方形に近く、一辺約8.5mである。上段には南北760cm、東西630cmの建物基壇がある。壁は、ほかの建物は大壁建物であるが、これは柱穴列は確認できず、瓦片や礎石様の石材もあって、礎石建物であった可能性がある。東西にL字形の煙道がある。このあたりは、王宮に関連する施設と考えられている（李南奭・李賢淑『公山城城内マウル第４・５次発掘調査　公山城王宮関連遺蹟』公州大学校博物館、2016）。



公山城の城壁は現在、石築の部分が多いがそれはほとんど後代の修築によるもので、ほんらいは土築であろう。土城は東門址の外側に少し残っているが、それが百済時代の築造と確認されている（安承周・李南奭『公山城城址発掘調査報告書』公州大学博物館・忠清南道、1990）。ただし2012年の調査では、その点が明確にはならず今後の課題といえる。

最後の都となった泗沘（扶余）には、街の北側に**扶蘇山城**がある。1981年に国立文化財研究所・忠南大学校博物館・国立扶余博物館によって軍倉址など城内の発掘がはじまり、現在まで調査がつづいている。1988年からの1991年にかけては、国立文化財研究所によって東門址附近が発掘された。その結果、従来、東門址と考えられていた箇所は、百済時代には土塁が連続しており、後代（統一新羅時代）になってそこを開口して門にしたもので、百済時代の東門址はそれよりも95mほど離れた北側の下層で検出された。このように、百済時代の築造以後、統一新羅時代において、単なる補修程度ではない改造があったことが確認できたことは重要であり、逆に、発掘を経ていない地区の城壁・門址等について、外見のみで単純に判断できないことの警鐘となる。

百済時代の東門址から南側に10m離れた土城内側の瓦積み層である赤褐色粘土層で、「大通」という刻印のある瓦片が2点発見された。「大通」銘刻印瓦は、公州市内の大通寺址でも発見されており、そこが文献にもみえる大通寺址であることを示す最も有力な根拠になっていたものである。「大通」はそもそも梁の年号で、527～529年の間に使用された。「大通」が寺名ではなく、年号を示すとすれば、遷都よりも10年ほど前となり、城壁が遷都に先立って築造されていることを示す資料になる。

全体は包谷式山城で、約2200mある。それを内側で区画する山頂式山城が2つある。北にあるものを泗沘楼山城とよび周長約700m、南にあるものを軍倉址山城とよび周長約1400mである。ところで、東門址よりも西側の、包谷式山城と、軍倉

を調節するために版築する。城壁に石灰の痕跡が残り、『三国史記』にみえる「蒸土築城」という語に結び付けている。現在の地表面から高さ6～13mで、幅は40mを越えるところもある。周長は2285mである。当初、木柵で城壁を補完したというようなみかたがされ、現在も一部復元しているが、その後の調査で造営時の永定柱の痕跡であるとみるようになってきた。2013年から漢城百済博物館附設百済学研究所が発掘を再開し、現在もつづいている。北門の外から、内側の生活空間で、475年にこの地に入った高句麗の道路も確認されている。

中期王都熊津の王城である公山城は、錦江に面し、周長が2660mあり、土城部分が735m、石城部分が1925mである。『新増東国輿地勝覧』巻17・公州牧・城郭条に「公山城」がみえ、注に「州の北二里にある。石築。周四千八百五十尺、高さ十尺。中に井三・池一がある。また軍倉がある。○地元の言い伝えでは、これは百済時代の古城で、新羅の金憲昌が依拠したところである、という」とある。ただし「これは百済時代の古城であるといい伝えている」とする程度で、金正浩『大東地志』にいたって「百済の聖王四年に熊津城を修築したというのがこれである」というように、公山城を明確に熊津城としている。

その後も、公山城が王城であったとみなされてきたわけではない。関野貞も、この地を訪れて城内から扶余の扶蘇山城出土のものと類似する土器片・瓦片を見て、「これは正しく熊川時代の山城であることを始めて推定することが出来て、非常に愉快に感じた」とする程度であった（「百済の遺跡」『朝鮮の建築と芸術』）。今西龍も、公山城を就利山城と混同していたようで「就利山はもと王宮址と伝ふる江辺なるが恰も扶餘に於ける扶蘇山に似たり。此の地には何等の遺物なきものの如し。……新羅王朝時代、王氏高麗時代を通じて今日に至るまでの重要なる政治的都市たるにも拘らず、遺物・遺跡の見るべきもの多からざるは遺憾とす」（「百済都城扶餘及び其の地方」『百済史研究』）としている。公州において百済遺跡の調査を進め、公山城が百済の王城であることを明確にしたのは、軽部慈恩であったといえる（『百済遺跡の研究』吉川弘文館、1971）。

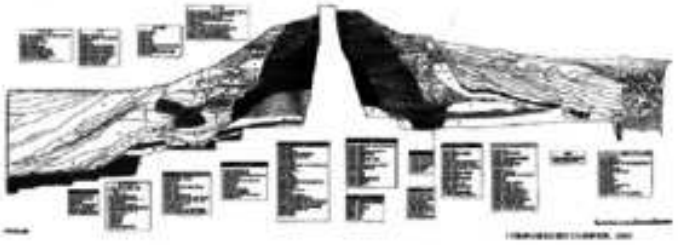
公山城の発掘調査は、1980年に公州師範大学（のちに公州大学校）百済文化研究所が実施したのが最初であり、同校博物館（現、歴史博物館）がつづけている。王宮の位置は、城外説もあり、明確ではないが、城内では最も平坦な双樹亭前の広場を有力候補地と位置づけている。近年の城内マウルの調査において、百済時代の15棟の建物址や、貯水施設・竪穴遺構・道路・排水路・鉄器工房址などが検出されているが（統一新羅時代の建物址も7棟）、6号建物址と7号建物址のあいだに広場があり、や

下の小さいものが多い。

百済は、漢城（ソウル江南）に発祥し、475年に高句麗の攻撃をうけて漢城王都が陥落し王が殺され滅亡するが、477年にまったく別の場所、熊津（現在の公州）で復活した。そこは急遽おちついた先なので、その後計画的に都づくりをして遷都した。それが結果として最後の都となった泗沘（現在の扶余）である。この王都の変遷に即して百済史を区分すれば、前期漢城時代→中期熊津時代→後期泗沘時代、ということになる。泗沘への遷都は538年であり、滅亡は660年である（そのあと復興運動が3年つづく）。

王都の城についてみておけば、高句麗とは異なり、漢城時代には平地の城のみで、熊津・泗沘時代には、山城が造られる。漢城時代は、ソウルを流れる漢江が南北に流れる地点の東にある風納土城と夢村土城に王宮があったと考えられる。なお、王宮の位置は、全時代を通して、まだまったくわかっていない。

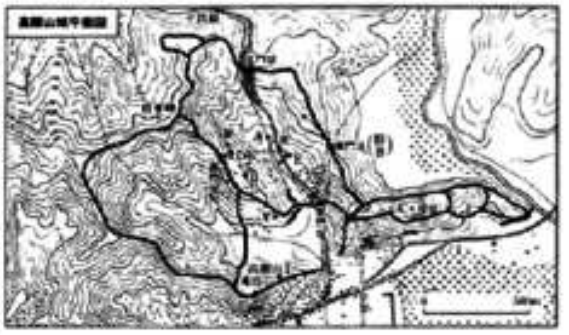
風納土城は、ほぼ長方形で、ほんらいは3500mはあったとみられる。平地土城であるが、城壁築造については、山城を考えるときにも資料となる。西壁は漢江の洪水などで流失し、南壁も開発でかなり失われた。1997年の発掘を通して、城内で環濠聚落が確認され、環濠が3世紀前半～中葉に廃棄されたとみられることから、城壁の築造はそれ以後と考えられるようになった。さらに1999年に城壁の調査が実施され、遅くとも3世紀を前後する時期に築造が完了しているものと考えられるようになった。発掘を通して、土城の幅は40mに達することが確認され、高さもほんらい12mほどあったと考えられている。1964年に城内が試掘調査されたことがあるが、その出土土器を通しても、築造年代は限定できず、ただ、夢村土城と並行する時期に用いられたことが確認されるのみであった。2011年に漢城百済博物館の展示のために、三回目の断面調査がなされた。この時には、その内部や下層から土器が発見され、年代を限定することができるようになった。その結果、3世紀の中後半に着工して、4世紀中半の以前に初めて完成され、4世紀末と、5世紀中半に増築されて規模が拡大された、という。初築時には高さ10.8mあったと推測され、増築時には13.3mまでになったとされる。延べ人数138万人の大規模工事であったとみられている。



夢村土城は、オリンピックの施設がその一帯に建設されることになり、1983年から発掘調査がはじめられ、遺構の確認によって89年まで継続し、その後はオリンピック公園として復元整備された。築造年代については、城壁の調査において、西晋代の銭文陶器片が出土したことにより3世紀末かとされたが、現在では4世紀以後、風納土城よりも遅れるとみられている。自然丘陵を用い、稜線に沿って高さ

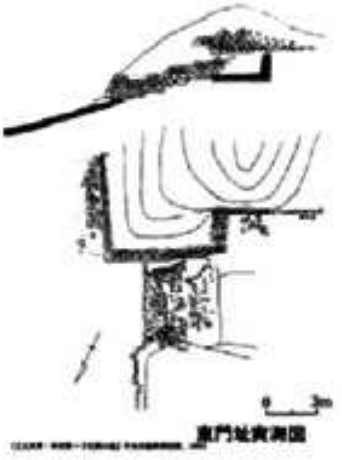
安市城は645年に唐の猛攻をうけた。遼東城・白巌城を降伏させたあと、6月20日に安市城に到着し、攻撃をはじめた。攻撃の前に太宗は、「安市は城が堅固で兵も精鋭である。城主は勇敢で、蓋蘇文の乱に際しても服さず、蓋蘇文も下すことができなかった」として、建安城を先に攻撃する案をもちかけたが、李世勣らの反対をうけ、やはり安市をせめることになったのであった。高句麗ではすぐに、北部の靺鞨の高延寿と高惠真が、東南方面から救援軍15万を率いて安市城に近づき、東南8里に陣した。唐軍は李世勣が安市城の西嶺に陣して高句麗をさそいこみ、長孫無忌が山の北から狭い谷にそってうしろにまわり、太宗は北山に登って観望した。この会戦で高句麗軍は大敗し、両将は唐に寝返った。この北山はその勝利のけっか唐が駐蹕山と改名した。李世勣が最初に陣した西嶺や太宗の陣した東嶺など、それぞれ該当する山もある。

もう1例、撫順の**高爾山城**をみる。基本土築で、一部石築である。**高句麗山城で最も早くに発掘調査がなされた**。まず1940年に池内宏・三上次男らが東城の住居址・門址および小城の塔址を中心に、ついで44年に三上次男らが東城の西門址を中心におこなった。56年と63年には撫順市文化局文物工作隊が地表調査して現況を確認した。さらに83年から3年にわたり公園化計画と関連して、撫順市博物館と遼寧省博物館が共同で、東城と南衛城6ヶ所の発掘調査をおこなった。



高爾山城は、西北の海抜230mの将軍峰を最高峰とするいくつかの峰にまたがっており、その頂上から南にのびる稜線上の城壁を境にして、東城と西城とにわかれる。東城が主城であり、高句麗時代の築造で、遼代以後に西城、さらに両城の南側に南衛城、東城の北に北衛城が築かれた。城壁の残高は2～5mで、総長4kmほどになる。東城の南門址は両側に高さ10mの版築土塁が残り、西側には南に26m離れて高さ約5mの版築土塁がある。これらは甕城をなしていたものとみられる。南門址西側に水溝があり、大きな石が残っていた。そこに水口門があったはずである。北門址は両側の城壁が直角にのびる角にあるが、採土のため構造はよくわからない。

門址は東西にもある。40年に発掘された東門址は、門の両側が石塁で、南側がよく残っていたが、階段式に切石を5～6段積む。石積みの内部には小さい割石をつめていた。



3．百済の山城

百済もまた、伝承的には高句麗とともに夫余から出た、としているが、現実には、系譜関係はない。高句麗は貊族であり、百済は韓族である。民族系統が異なるといえる（ただ先進大国の高句麗と敵対する必要が起こり、対等であると政治的に主張するようになった）。山城についてもほとんど関係がない。**百済の山城は基本的に土築であり、前面下段に石築をすることが多い**（列石）。**規模は2km以**

ルートと、太子河から遼東郡に向かうルートが2大主要路である。太子河は本渓の西のダムをすぎると大きく屈曲して東北流し、大きな岩盤にぶつかってふたたび西に流れをかえる。その岩盤の上に燕州城がある。東南に高く、西の城門口村にかけて低くなる独立丘陵の上で、太子河に面する東南側は絶壁のため城壁を築かないが、ほかは堅固に積み上げられた石塁で、周長約2500mある。西南の門址は集落のなかで最近調査された。すぐ西に小高い丘陵があり、城壁はその上をのぼり、西北の門址にむかっていったんさがっていく。ゆるやかな傾斜をあがっていく北壁は高さ7m前後あり、幅4m余ある。外側に雉が5ヶ所以上あり、それとは位置をずらして城壁に登る城台が5ヶ所ある。それぞれ約70mの間隔をおいている。雉は幅5m、長さ5.30mで、下段は大きな切石を階段状に積み、角をまるく整えている。東南の最高所は海抜200mで、後代の烽火台址があり、その周囲を石塁が囲んでいる。城内からは、太子河下流方面から攻めてくる敵を見通すのは絶好であるが、またぎゃくに城外から城内はよく見通せ、隠れようがない。

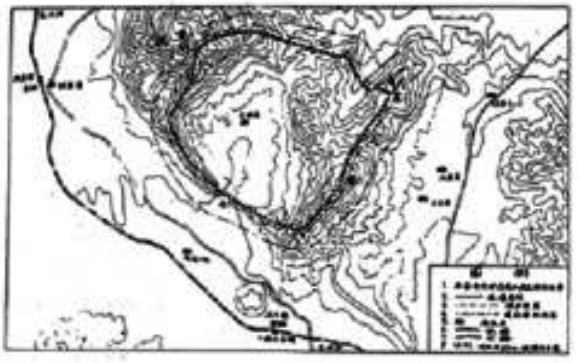
燕州城は、高句麗の白巌城にあてられる。白巌はまた柏崖・白崖・白石とも表記する。高句麗には蒼巌城（わたしは五女山城とみる）もあり、岩盤に立地する山城の印象による命名かとみられる。唐は巌州とし、遼もそれをうけて巌州とした。燕州はそれと音通であり、つまり巌州城ということである。中国史書では、『隋書』にみえるのが早いが、『三国史記』には、547年に改築し、551年には突厥が来攻したとみえている。高句麗が遼東郡治（平地城）を奪取したあと、その背後のまもりとして築城したものと思われ、早くても4世紀末か5世紀はじめのこととみることができる。『旧唐書』高麗伝では「山に因り水に臨み、四面険絶す」とする。この城が攻撃をうけたのは、645年であった。城主は孫伐音（孫代音）で、陰暦5月17日、唐軍が遼東城を下すと、降伏の意志を表明したが、すぐにそれを翻し、唐軍は28日から攻撃した。烏骨城ほかから救援が来たが、6月1日には降伏した。攻撃のさいに、皇帝太宗は西北から、李勣は西南から攻めた。西北の城外はゆるやかな傾斜をなし、攻撃しやすい。城壁をとくに高く積み上げているのはそのためであろう。降伏したとき、城内には男女1万余人いたという。他城からの兵も多かったのである。太宗はここを巌州とし、城主を刺史とした。ただし唐軍の退却後は、すぐに高句麗の手にもどることになり、唐も翌年春には州を廃している。

土築山城の例もあげる。難攻不落で有名な安市城にあたるのが、海城の**英城子山城である。石築か土築か、どちらが堅固かといえば、どちらも堅固である。山城はどこも難攻不落と言ってよく、陥落するのは内応者がいるなどによる。どちらが選ばれるかは、材料調達の問題であろう。**

海城市街から東南に7kmの英城子村にある英城子山城である。析木・岫岩へ向かう公路のすぐ東で、ちょうど平野部から山地にはいる入り口をおさえるかたちになっている。集落は城の西南の門をはさんで内外にわたっている。門の両側は版築の土塁を下から高く築いており、そのまま稜線上につづいていく。全体が土城で、周長4kmある。東北の山頂から西南のふたつの谷をとりこんで稜線上に土塁が走るが、ふたつの谷のあいだの中央部におりてくる稜線にも土塁を築き、ふたつの部分にわけている。門は西北・東北・東南にもある。西北側には外郭があるようにみえる。

は、漢の玄菟郡の県城に由来するとみられる西側の下古城子土城ではなく、東側の嘲哈城とみるべきである（『広開土王碑』に「忽本の西の山の上に築城した」）。高句麗の住地には前107年に武帝が玄菟郡を置き、高句麗はその圧力に対する抵抗のなかで力をつけ、興起していった。県城を奪い取った高句麗は、それを利用するとともに、近くに山城を造った。

高句麗山城は、特に遼東方面において、名の残る巨大山城が多い。**周長2kmを越えれば大型山城というが、そうした大型が多い**。名が知られるのは、隋・唐の侵略の際の記録が残るからである。その中のいくつかをとりあげてみる。まず最大拠点となった烏骨城である。烏骨城に比定されてほぼまちがいないのが、瀋河をさかのぼった鳳城市にある**鳳凰山山城**である。



鳳城市街の南に海抜930mの鳳凰山がある。遼東随一の名山とされ、奇岩峭壁のつらなる勇壮な山である。この鳳凰山とその東南の海抜765mの高麗山との稜線をつなぐかたちで、ふたつの山がつくる谷というより小盆地を囲んでめぐる巨大な山城が鳳凰山山城である。自然の岩盤を利用しており、すべて城壁をつくっているわけではないが、全長15～16kmある。谷は北東から南西にかけてはしるが、南西側が大きく開いている。両山からのびる稜線は麓に達して低い丘陵となるが、そのあいだの平地をむすぶあたりに南門址があった。正門である。現在は、東半に軍の倉庫がたち、よく確認できない。いっぽう北門址は両山の鞍部で、かなり高い位置にある。北へぬける通路のかたわらに石積みが残る。その門址の左右の稜線に、整然と積み上げた城壁がよく残る箇所が多い。急角度の傾斜面で、もともと連続して積んでいるわけではないが、残りのよいところで高さ6mほどある。北門をぬけると、大きく谷がひろがっており、北から登るのは容易ではない。

『翰苑』注に引く『高麗記』は、焉骨山とよび「国の西北にある。高句麗人は屋山という。平壌の西北七百里にある。東西の二嶺は、千仞の高さで壁立する。ふもとからいただきまでみな蒼石である。岩山が高くそびえるようすを遠望すれば、荊門の三峡に似ている。上には草木もないが、ただ青松が生えており、幹は雲表に達する。高句麗は南北の峡口に段を築いて城としている。この城は夷藩の枢要のところである」と詳述している。現状とかわらない状況がよくうかがえ、伝聞ではなくじっさいの見聞であろう。「夷藩の枢要」とあるのは、そのとおりで、645年の唐の侵攻のさいに、安市城の救援にむかって逆に唐軍にとらえられた高延寿・高恵真は、安市城を攻めあぐねる太宗に次のように進言している。「烏骨城の褥薩は年老いて堅守することができません。兵を移してそれに臨めば、朝に至って夕べには勝つことなるでしょう。とおりみちの小城も風になびいて降伏するはずです。そのあとに食糧を収め、鼓行して進めば、平壌はかならずや守ることができません」と。褥薩（褥薩）は大城に置かれた地方官で、都督にあたる。他の城・小城とは格がちがう。ここがおちれば、付近の小城が戦わずして降るというのも、けっして誇張といえない。

石築山城の例をもうひとつあげる。高句麗の西への進出は、蘇子河から渾河を経て玄菟郡に向かう

約8km、渾江の北側に位置する五女山城である。海抜820mで、玄武岩の岩壁がそそりたつ勇壮かつ怪異な山である。頂上部は平坦で、池（天池）とふたつの井戸がある。城壁は頂上部から200mほど降りた東側山腹を南北に弧形で1000mほど走り、南端で西に折れて小点将台下の稜線をのぼるかたちでさらに120mほどつづく。両側から積み上げる夾築で、外側の高さは6～8m、内側は1～2mである。外壁は大きい石を2～3層積み、その上に奥がせまい楔形のやや小さい石を整然と積み上げる。高いところでは27層におよぶ。下段は階段状に、少しずつうしろにずらして積むが、それは高句麗の築造法の特徴である。

遺物は、発掘の際に多量出土し、例えば袋状鉄斧などは紀元前後までさかのぼりうるもので、高句麗前期の遺物を含んでいることはまちがいない。これを通して、五女山頂上部が高句麗前期の活動拠点であったことが確認できる。それをふまえれば、城壁の築造法や構造が高句麗的である五女山城が高句麗の山城であることは、もはや問題ないといえる。ただし、**現存する城壁がはたして高句麗前期までさかのぼるものかどうかは、なお未確認といわなければならない。山城としての使用開始時期と、現存城壁の築造時期は、かならずしも同じではない。**その点でいえば、桓仁・集安地域の山城を高句麗「早期」の山城ととらえ、その築造法を「早期」のものとみなして、山城築造法の変遷を考えることがあるが、それは方法的に問題である。この地域の山城は確かにほとんど前中期の重要な山城といえようが、そのまま現存城壁の年代とみるのは短絡である。五女山城の場合も、東門付近の城壁は、積石塚の基壇部の発展過程などもふまえると、3～4世紀までくだらせて考える必要がある。この特異な地形を擁する山城は、頂上部を守るためには、亀裂部分を守れば十分で、絶壁をよじ登ることはほとんど不可能である。まさに天然の要害であり、ことさら城壁を築かなくてもよいとも思える。あるいは当初は、城壁を築かなかったかもしれないのである。

このように、城壁そのものについては、なお保留せざるをえないが、山城としては高句麗前期までさかのぼるとみてもおかしくない。そのいっけん異様な山容は、霊なる山として畏敬の念を与えるにじゅうぶんでもある（遼寧省文考所編『五女山城』文物出版社、2004）。なお近傍の居城といえるの

80年代にも調査をしているようである。それによれば、城内に多くの円形の坑があり、住居址かとみられる。従って、**高地性の集落を城壁で囲んだもの**というべきである。城壁は、土・石・土石混築のものがあるが、文字どおりの柵は確認されていない。城柵というのはそういう成語であって実際に木柵などが構築されていたかどうかは別の問題である。

朝鮮三国王都の位置と変遷
●は王都、数字は遷都年を示す。境界線は500年、（ ）は現代地名。

2．高句麗の山城

高句麗は夫余から出たとみることがあり、高句麗人自身もそのように言っている記事がある。しかし現実には、民族的系統はなく、先進大国の夫余に対する意識が強く、その当初の本拠地（吉林市）を奪取したあと、夫余と同族であると主張するようになる。

高句麗では多くの山城が造られているが、**基本的には居住性がない**。戦時にやや長期に立てこもることがあり、その痕跡が残ることがあるが、通常は近傍に居住空間があり、山城はいわゆる「逃げ城」である。その点は**夫余とは異なるものであり、城郭史の系譜としては異なるというべきである。**

高句麗は、広開土王の領土拡大をへて、5世紀の後半、長寿王の時代に最大版図を実現した。すでに王都は平壌に遷っており、それを中心にすれば、西北は遼河まで、東北は現在の吉林省吉林市と延辺地区琿春を結ぶラインまで、南は朝鮮半島の中部、韓国の忠清南道の北部から慶尚北道の北部を結ぶラインまでおよぶ、きわめて広大な領土となった。そのご南方の境界は、新羅の成長によってしだいに後退していくが、西北・東北の領土はほぼ最後まで維持される。この広大な領土を支配するうえで、高句麗は**各地に山城を築き支配の拠点とし、かつ防御施設とした**。山城を中心とした支配は高句麗文化の大きな特徴であり、百済や新羅にも影響を与えている。ここではいくつかの山城をとりあげ具体例に即して高句麗の防御体制や地方支配の実態について述べることにしたい。

（『高句麗の歴史と遺跡』）

高句麗の発祥の地は、鴨緑江中流とその支流渾江の流域である。最初の都は卒本（忽本）といい、現在の遼寧省桓仁県にあたる。

高句麗の王都は、その後、中期＝国内（吉林省集安市）、後期＝平壌（北朝鮮）と変遷するが、平壌時代の後半を除いて**山城と近傍の居城とのセット関係**で成り立つ。卒本時代の山城は桓仁鎮の北東

朝鮮三国の山城と鞠智城

田中　俊明（滋賀県立大学名誉教授）

朝鮮三国とは、高句麗・百済・新羅の三国を指す。この三国では山城が大きく発展した。ただし三国それぞれの特徴は異なる。これらの地域の山城のいくつかをとりあげ、その特徴について述べ、鞠智城を考えるときの材料を提供したい。

1b1 郟州商城

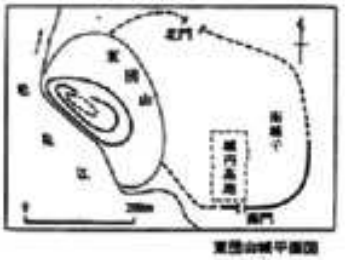
（宮本一夫『中国の城郭の歴史』神話から歴史へ』清水社、2002）

1．夫余

漢族の地域において、城郭は古くから造られている。**中原地域**の河南省には殷王朝の時期にあたると考えられる紀元前2千年紀の城とみられる偃師商城・鄭州商城などが残り、夏王朝までさかのぼる可能性もある。しかしそれらは、基本的に**平地の土城**である。黄河流域を中心にした中原の黄土地帯において、**間質土で版築**する（夯土）土城が一般的であり、現在までよく残っている。しかし山城を見ることはほとんどない。山城は周縁地域にみられるもので、ここにとりあげる中国東北地区ではむしろ**山城が基本**である。なお、中原地域以外では版築は**粘質土を交互に挟む**必要がある（例えば時代は降るが、遼の上京城〔内蒙古巴林左旗〕などにもみられる）。

朝鮮三国をとりあげる前に、「東夷」世界のなかで最も先進的で、漢文化にも近い夫余についてみておきたい。

夫余の当初の本拠地とみられるのは、吉林省吉林市である。市街の中心部をとりまくように第二松花江が流れるが、その東岸に東団山がある。海抜252m（比高60m）の独立丘陵である。楕円形の土石混築の城壁を三重にめぐらしている。『魏志』夫余伝に「城柵は円形に作り、牢獄に似ている」とあり、それに該当するとみられる。吉林市の西北にある九台県でも小規模の円形の城址が確認されており、夫余の遺構ではないかとされている。



東団山城平面図

吉林省九台県は、吉林市と農安市との間にあるが、その県城の北80kmの上河湾鎮に七基の山城がある。康家興「吉林九台上河湾考古調査」（『考古』1961年3期）によれば、1959年8月に吉林省文化局と九台県文化館・上河湾人民公社文化館の共同で、現地調査を行っており、また1960年春には長春地区文物普査隊が調査をしている。その後吉林省文物志編委会『九台県文物志』（同会、1986）の作成にあたって、

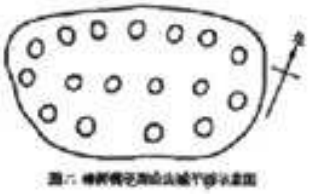


図7：[illegible]

奈良文化財研究所編2002『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所学報63
奈良文化財研究所編2004『川原寺寺域北限の調査―飛鳥藤原第119-5次発掘調査報告―』
西住欣一郎2014「鞠智城跡貯水施設跡について」熊本県教育委員会編『鞠智城跡Ⅱ－論考編1－』83-95
藤澤一夫1981「難波宮八角建築の性格」財大阪市文化財協会編『難波宮址の研究 第7　論考篇』7-18
扶余郡文化財保存センター2013a『扶余羅城整備事業　扶余羅城―北羅城Ⅰ―青山城試掘調査―』（財）扶余郡文化財保存センター発掘調査研究報告23（韓国）
扶余郡文化財保存センター2013b『2010扶余古都保存事業 扶余羅城―北羅城Ⅱ―』（財）扶余郡文化財保存センター発掘調査研究報告27（韓国）
妻哲夫2022『難波の古代史』ブイツーソリューション
向井一雄1999「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』27、地域相研究会、7-38
向井一雄2014「鞠智城の変遷」熊本県教育委員会編『鞠智城跡Ⅱ－論考編2－』75-105
向井一雄2016「西日本山城の城門構造」小田富士雄編『季刊考古学』136、雄山閣、58-62
向井一雄2017『よみがえる古代山城』歴史文化ライブラリー440、吉川弘文館
村上幸雄・乗岡実1999『鬼ノ城と大廻り小廻り』吉備考古学ライブラリィ2、吉備人出版
森公章1998『「白村江」以後』講談社選書メチエ
山口裕平2003「西日本における古代山城の城門について」『古文化談叢』50（上）、九州古文化研究会、65-95
山田隆文2011「鉄製の門扉軸摺金具について」『勝部明生先生喜寿記念論文集』勝部明生先生喜寿記念論文集刊行会、404-413

［引用挿図］（いずれも一部改変引用）

図1：村上・乗岡1999、図2：総社市観光プロジェクト課提供、図3・12-5：総社市2005、図4・14-1・3：亀田1995、図5：中原文化財研究院2012『江華玉林里遺蹟』、図6-1・図7-3・図8-1～3・図9-1～3・図10-2・図11-2・図12-1・4・図14-2・4・図15-④：亀田撮影、図6-2：九州歴史資料館2010『大宰府　その栄華と軌跡』、図7-1：金・趙2001、2：岡山市1989、図10-1：車勇杰氏提供、図11-1：百済古都文化財団2018、図12-3：東潮・田中俊明1995『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社、図12-3：国立公州博物館1999、図12-6：姜・崔2007、図13-3：明日香村教育委員会2006『酒船石遺跡発掘調査報告書』p.56、図15：亀田2002a、図16-1：吉林省・集安市2004、図16-2：藤澤1981、図17・20-3：熊本県2012、図18-1：忠南大学校百済研究所2005『大田鶏足山城』、図18-2：岡山県2013、図19：小田2016、図20-1：公州大学校博物館1996、2：栗原2000、4：高岡寺院跡発掘調査会1978、図21：小澤2016、図22：亀田作成

亀田修一2016b「神籠石系山城と朝鮮半島の山城」小田富士雄編『季刊考古学』136、雄山閣、93-96
亀田修一2018a「日本列島古代山城土塁に関する覚書－版築・堰板について－」『水利・土木考古学の現状と課題Ⅱ』ウリ文化財研究院（大韓民国）、325-348
亀田修一2018b「古代山城の成立と変容」熊本県教育委員会編『鞠智城・古代山城シンポジウム－古代山城の成立と変容－』1-11
亀田修一2021「古代山城と地域社会－備中鬼ノ城を中心として－」熊本県教育委員会編『令和2年度（2020年度）鞠智城座談会　地域社会からみた鞠智城』17-31
亀田修一2022「第2章　日本の考古学－西日本の古代山城－備中鬼ノ城を中心に－」亀田修一・白石純編『講座　考古学と関連科学』雄山閣、21-38
姜鍾元・崔ピョンファ編2007『錦山栢嶺山城－1・2次発掘調査報告書－』忠清南道歴史文化院（韓国）
漢陽大学校博物館2006『二聖山城　二聖山城発掘20周年記念特別展』（韓国）
金善基・趙相美2001『益山笂土城試掘調査報告書』圓光大学校馬韓・百済研究所（韓国）
金秉模・沈光注編1988『二聖山城〈2次発掘調査中間報告書〉』漢陽大学校博物館（韓国）
吉林省文物考古研究所・集安市博物館2004『丸都山城』文物出版社（中国）
栗原和彦編2000「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧」九州歴史資料館
九州歴史資料館編2009『水城跡』
熊本県教育委員会編2012『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第8～32次調査報告－』熊本県文化財調査報告276
熊本県教育委員会編2023『鞠智城シンポジウム2022成果報告書　渡来系技術から見た古代山城・鞠智城』
百済古都文化財団編2018『扶余羅城 東羅城Ⅳ－陵山里山5間　雉・城壁－』（財）百済古都文化財団発掘調査研究報告69（韓国）
公州大学校博物館編1996『千房遺跡』（韓国）
国立公州博物館1999『大田月坪洞遺蹟』国立公州博物館学術調査叢書8（韓国）
国立扶余博物館2003『扶余羅城』国立扶余博物館遺蹟調査報告書10（韓国）
国立文化財研究所2002『風納土城Ⅱ－東壁発掘調査報告書－』（韓国）
古代山城研究会1996「讃岐城山城跡の研究」『溝濃』6、1-48
西条市教育委員会2016『史跡永納山城跡保存整備基本計画書』
島津義昭・鶴嶋俊彦ほか1983『鞠智城跡』熊本県文化財調査報告59
車勇杰2016「韓国山城の懸門構造」小田富士雄編『季刊考古学』136、雄山閣、63-68
鈴木拓也2011「文献史料からみた古代山城」『条里制・古代都市研究』26、条里制・古代都市研究会、13-28
積山洋2014『東アジアに開かれた古代王宮　難波宮』新泉社
全赫基2022「韓国の古代山城の集水施設からみた鞠智城の研究課題」『令和3年度鞠智城跡「特別研究」論文集　鞠智城と古代社会』10、熊本県教育委員会、79-98
総社市教育委員会2005『古代山城鬼ノ城』、同2006『古代山城鬼ノ城2』
総社市教育委員会2011『鬼城山－国指定史跡鬼城山環境整備事業報告－』
大平村教育委員会2003『唐原神籠石Ⅰ』大平村文化財調査報告書13
大平村教育委員会2005『唐原山城跡Ⅱ』大平村文化財調査報告書16
高岡寺院跡発掘調査会編1978『高岡寺院跡発掘調査報告書』
高松市教育委員会編2016『屋嶋城跡－城門遺構整備事業報告書』高松市埋蔵文化財調査報告172
田中俊明2014「朝鮮三国における八角形建物とその性格」熊本県教育委員会編『鞠智城跡Ⅱ－論考編2－』31-51
中山圭2005「鞠智城出土の軒丸瓦－朝鮮式山城古瓦の一様相－」『九州考古学』80

のかにもよるが、いずれにせよこれらの資料が日本列島における鋳鉄製品の最古段階のものとなるようであり、大野城跡の軸摺金具は飛鳥地域から寺院の鋳鉄関係の工人が来た可能性もあるが、百済からの亡命者のなかの工人が作った可能性はあるものと考えている。

［引用・参考文献］（50音順、韓国・中国の名前は、日本語読みして50音順に並べた）

泉武2018「前期難波宮孝徳朝説の検討」『橿原考古学研究所論集』17、八木書店、66-77

入佐友一郎・小澤佳憲編2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』福岡県教育委員会、福岡県文化財調査報告書225

大阪府立狭山池博物館2021『狭山池のルーツ―古代東アジアのため池と土木技術―』

岡山県古代吉備文化財センター編2001『下庄遺跡・上東遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157

岡山県古代吉備文化財センター編2006『国指定史跡鬼城山』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告203

岡山県古代吉備文化財センター編2013『史跡鬼城山2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告236

岡山市教育委員会文化課編1989『大廻小廻山城跡発掘調査報告』

小澤佳憲2016「日韓の古代山城出土軸摺金具」小田富士雄編『季刊考古学』136、雄山閣、74-76

小田裕樹・次山淳・豊島直博・竹本晃・市大樹・黒板貴裕・関広尚世2008「石神遺跡（第19・20次）の調査－第145・150次」『奈良文化財研究所紀要2008』90-107

小田富士雄1977a「百済系単弁軒丸瓦考・その一」『九州考古学研究・歴史時代篇』学生社

小田富士雄1977b「百済系単弁軒丸瓦考・その二」『九州考古学研究・歴史時代篇』学生社

小田富士雄編1983『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書10、名著出版

小田富士雄編1985『西日本古代山城の研究』日本城郭史研究叢書13、名著出版

小田富士雄2013「鞠智城創設考」『古代九州と東アジア』同成社、146-166（小田2012「第Ⅴ章 第1節 鞠智城の創建をめぐる検討」熊本県教育委員会編『鞠智城跡Ⅱ―鞠智城跡第8～32次調査報告―』熊本県文化財調査報告276、407-426に一部補足）

小田富士雄2016「大宰府都城1期軒丸瓦考」『古文化談叢』75、九州古文化研究会、193-209

小田富士雄編2016『季刊考古学』136、雄山閣の中に、小鹿野亮「阿志岐山城跡」、小田富士雄「おつぼ山神籠石」、亀田修一「神籠石系山城と朝鮮半島の山城」、下原幸裕「大野城（福岡県）」、杉原敏之「水城（福岡県）」、田中淳也「金田城（長崎県）」、田中正弘「基肄城（佐賀県）」、平井典子「鬼城山（鬼ノ城）」、矢野裕介「鞠智城（熊本県）」、山田隆文「高安城（奈良県）」、渡邊誠「屋嶋城（香川県）」などが収められている。

春日市教育委員会2000『大土居水城跡』春日市文化財調査報告書28

亀田修一1995「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』42-3、pp.48-66

亀田修一2001「朝鮮半島の石造物と亀」千田稔・宇野隆夫編『亀の古代学』東方出版、56-75

亀田修一2002a「朝鮮半島古代山城の見方」編集代表西谷正『韓半島考古学論叢』すずさわ書店、545-575

亀田修一2002b「吉備の瓦塔」『環瀬戸内海の考古学―平井勝氏追悼論文集―』古代吉備研究会、429-454

亀田修一2009「鬼ノ城と朝鮮半島」岡山理科大学『岡山学』研究会編『鬼ノ城と吉備津神社－「桃太郎の舞台」を科学する』吉備人出版、58-71

亀田修一2012「対馬金田城小考」『百済と周辺世界』成周鐸教授追慕論叢刊行委員会、810-830

亀田修一2014「古代山城は完成していたのか」熊本県教育委員会編『鞠智城跡Ⅱ－論考編1－』17-40

亀田修一2015「古代山城を考える－遺構と遺物－」岡山県古代吉備文化財センター編『古代山城と城郭調査の現状』全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会、1-26

亀田修一2016a「西日本の古代山城」須田勉編『日本古代考古学論集』同成社、574-595

代山城には見ることができず、鬼ノ城の築城技術に関する一つの特徴になっている。鬼ノ城の城壁土塁前面の石敷きについても現時点で最も近い例は忠清北道稷山蛇山城のものである。この山城については百済のものと考えられているが、新羅のものではないかという考えもある。

備中鬼ノ城の築城については、弥生時代以前からのこの地の人々、5世紀頃におもに加耶南部地域から入ってきた渡来人たちの子孫、6世紀後半以降に畿内を経由して入ってきた新たな加耶（・新羅）系の渡来人たちの子孫、そして、白村江の戦い前後以降に入ってきたおもに百済系の人々など、多様な人々が備中鬼ノ城築城に関与することでほかの山城には見られない特徴的・個性的な山城が完成したのではないかと考えている。

北部九州の筑前大野城の唐居敷の軸摺金具について、小澤佳憲は創建時のものは百済系、繕治のものは新羅系の可能性を呈示し、肥後鞠智城跡の軒丸瓦については、百済系、高句麗・百済系、百済系・新羅系、新羅系の可能性が提示されている。

5．おわりに

以上、西日本の古代山城について、渡来系知識・情報・技術を意識して、述べてきた。660年の百済の滅亡、663年の白村江の戦いにおける敗戦、そして多くの百済系の人々の亡命・移住などを背景に、百済の亡命貴族（将軍）たちの指導のものに朝鮮式山城が築かれたという『日本書記』の記録などから古代山城は百済系の技術によって築かれたと一般的に考えられている。確かにそれはその通りであるが、具体的な遺構や遺物を細かく検討すると、少なくとも百済のみの技術で築かれたとは考えづらい。それまでに日本列島に渡って来ていた多様な朝鮮半島の人々も古代山城築城には関わっていたと考えることで、各地の古代山城の多様性や個性が説明できるのではないかと考えている。

小稿をなすにあたり、下記の方々にお世話になった。末筆ながら記して謝意を表したい。失礼ながら敬称は省略させていただいた（五十音順）。
小田富士雄、角田徳幸、高正龍、丹羽崇文、松波宏隆、向井一雄

［註］

(1) 最近、広島県内で古代山城研究会の方々と地元の中世山城などを研究されている方々が共同でその可能性がある場所を踏査され、現在その確認作業が進められている。公刊されたものとして、松尾洋平2023「古代山城　茨城（ぬばらのき）推定地の合同踏査について」『備陽史探訪』229、2-4　がある。

(2) 古墳時代以前の鋳鉄製品としては、比較的多く出土している各地の鋳造鉄斧以外には、兵庫県加古川市行者塚古墳（5世紀初め）と和歌山県紀の川市貴志川丸山古墳（5世紀）の鍬、大分県日田市ダンワラ古墳（5～7世紀）の金銀錯嵌珠龍文鉄鏡（きんぎんさくがんしゅりゅうもんてっきょう。鏡は弥生時代のもの）などがあるが、極めて少なく、これらはいずれも舶載品と考えられている。6世紀末以降になると、古代寺院の湯釜などに鉄釜が作られ、使用された可能性があるが、具体的な事例としては奈良県川原寺北東部で7世紀末頃の鉄釜鋳造遺構が検出されている（奈良文化財研究所2004）。本文中の山田寺東回廊の地覆石の軸摺穴に残された鉄製品が鋳鉄製品であり、641年～7世紀末の創建段階のどの時期のものかにもより、さらに大野城跡の軸摺金具が665年の初築時のものか、698年の繕治時のも

た。小田富士雄は肥後鞠智城もこの時に築かれたと考えている。筆者も備中鬼ノ城はこの667年頃に造営されたと考えている（亀田2009）。朝鮮半島から大和までの陸・海の交通の要衝に山城を築く意図があり、備中鬼ノ城もこの意図に沿って瀬戸内海の東西交通の要衝である吉備のこの地に屋嶋城とともに築かれたと考えている。

図22　備中鬼ノ城築城に関わった人々

そうすると、備中鬼ノ城の場所を選んだ人物は、少なくとも山城を使っての防御体制を理解している人物と考えられる。筆者はこのような山城の配置を考え、防御網を描くことができた人物は純粋な倭人ではなく、『日本書紀』天智天皇4年（665）条の百済滅亡前後に日本列島に渡って来た将軍・貴族たち、またはそれ以前に日本列島に来ていた渡来系の人物、その子孫たちであったと考えている。達率憶禮福留と達率四比福夫のような人物が備中鬼ノ城築城に関わり、指導して選地・縄張などを行ったのではないかと考えている。

実際の工事はだれが行ったのか。吉備は瀬戸内海交通の要衝であり、選地・縄張を行った達率クラスの人物がこの地に張り付いて指導し、造営した可能性も十分考えられるが、やはり実際の工事においては、現場監督のような現地で指導する人物が必要である。少なくとも、この地の陸路・海路などの交通網、土地の様子を知る人物が必要である。つまり、このような現場監督、現地指導者には、将軍たちの補佐クラスの人物と地元のそのようなことを手伝うことができる人物、渡来系の人々がいたと考えることが素直であろう。

こうして、実際の築城に必要ないろいろな技術者、土塁を築く、版築を指導する、足場を組む、石材を加工する、水門を含めた石積み城壁の石を積む、門を建てる、角楼を造る、城内の管理棟・倉庫を建てる、それらの工事に使用する鉄製工具類を作る、工事に必要な土・石・木などの素材、実際の作業を行う人々をどのように集めるのかが、現場監督およびその周辺の作業チームの仕事になると考えている。このような総合プランナーはやはりある程度の経験者でなければ難しいのではないであろうか。

百済から亡命してきた人々の中のこのような知識や技術を持った将軍、工兵部隊の責任者クラスの人物などが、地元のそのような作業を行うことができる技術者（おもに渡来系の人々、そして一部倭人）や実際の作業をする人々（おもに在地の倭人たち）を集め、築城していったのではないであろうか。

以上のような想定をすると、「備中国大税負死亡人帳（びっちゅうのくにたいぜいふしぼうにんちょう）」に記された人々やその親兄弟の中に備中鬼ノ城の築城や修繕に参加した人物もいたかもしれない。さらに地元である賀夜郡の人々だけでなく、備中国全域の技術者や作業者が動員された可能性は高いのではないであろうか。少なくとも近隣の都宇郡、窪屋郡、そして下道郡の人々は動員された可能性が高いと思われる。

備中鬼ノ城にはほかの古代山城には見られない多様な特徴がある。例えば、角楼の下部の石垣やその上部の版築の土壁に縦方向の柱の痕跡が残っている。このように城壁の中に柱痕跡が残る例は高句麗や朝鮮半島中部地域の高句麗と関わる可能性がある山城にみることができ、現時点では西日本の古

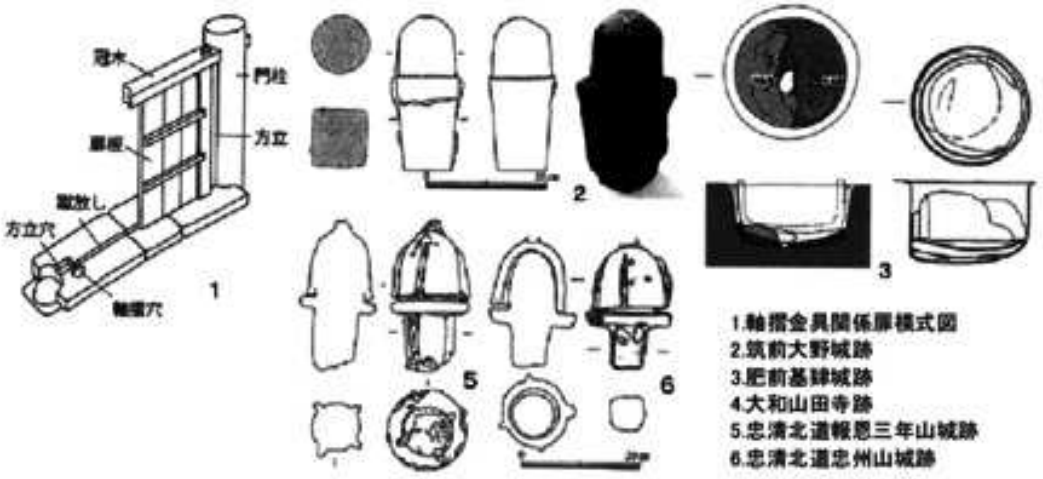


図21　日韓の軸摺金具関係資料

の可能性を考えるようになり、中山圭（2005）は百済系・新羅系の可能性を考えている。

軸摺金具　軸摺金具は門の扉の回転軸に使用される金具で（図21）、日本列島では古代寺院の大和山田寺跡（641年造営開始～7世紀末創建完了？）東面回廊中央扉口（SX065）地覆石に穿たれた軸摺穴の中に残された金具（奈良文化財研究所2002、p.109-Fig.32）と古代山城では2006年に確認された筑前大野城跡北石垣城門跡金具と2014年に確認された肥前基肄城跡東北門跡の唐居敷の軸摺穴に残された金具がある（小澤2016）。朝鮮半島ではそれ以前から少しずつ確認されていたが、日本列島での確認によって両地域の山城の資料がさらに検討されることになった（山田2011、車2016など）。

この軸摺金具およびこれを使用した唐居敷の軸摺穴の形などを検討した小澤は大和山田寺跡東面回廊跡例と肥前基肄城跡東北門跡例、そして大野城跡の円形の浅い軸摺穴を持つ唐居敷（太宰府口城門跡推定Ⅰ期、坂本口城門跡、水城口城門跡など）と鞠智城跡の各城門の唐居敷などを7世紀中頃の日本列島初期のものとし、方形で深い軸摺穴をもつ大野城跡北石垣城門跡・小石垣城門跡・クロガネ岩城門跡・太宰府口城門跡Ⅱ期唐居敷、備中鬼ノ城の方形軸摺穴唐居敷などを7世紀後半～末頃に比定している。そして、前者は百済系、後者は新羅系と推測している。

大野城跡北石垣城門跡出土の軸摺金具（図21-2）は鋳鉄製品で、7世紀以前の船載鋳造鉄製品を除くと最古段階のものとなる可能性があり、大野城築城・補治段階に百済からの渡来人やそれ以前の渡来系の人々によって作られた可能性があるのである[2]。

4．渡来系知識・情報・技術を使用した古代山城の遺跡・遺構・遺物の系譜

これまで、古代山城にみられる渡来系の知識・情報・技術について、遺跡・遺構・遺物を対象に簡単に整理してきた。以下、それらの系譜について簡単に整理してみたい（図22）。

まず、筆者は西日本の古代山城の発注者はヤマト王権と考えている。次に、具体的な場所の選定はだれが行ったのか。663年の白村江の戦いにおける敗戦を契機として、664年に筑前水城、665年に長門城、筑前大野城、肥前基肄城が築かれ、そして667年に対馬金田城、讃岐屋嶋城、倭国高安城が築かれ

型式）：②段階：670～689年（～③段階：689～700年頃）としている。このうちⅢ類は観世音寺などの寺院においても使用され、8世紀代まで使用されている。同様に基肄城Ⅰ式の系譜の軒丸瓦は豊前地方で8世紀前半まで使用されている。

これらの小田政庁Ⅰ期の軒丸瓦の系譜であるが、かえり弁軒丸瓦（020A・020Ba）については、古くから小田は「百済系単弁軒丸瓦」と呼び、大和坂田寺経由の百済系軒丸瓦としている（小田1977a・b）。鎬弁軒丸瓦（030・032・033）については、大和豊浦寺関連の瓦を経由した高句麗百済系としている（小田2013）。

つまり、いずれのグループの瓦も畿内を経由した百済系と高句麗百済系とされている。そして、鞠智城跡の創建年代について、対馬金田城築城と同時期の第2次防衛構想に入っていたが、なぜか667年11月条の記載から漏れ、軒丸瓦についても大野城の鎬弁瓦（033）を直接の祖型として作られたと考えている（小田2016、p.194・196）。

以上のように、小田は北部九州の筑前大野城と肥前基肄城と肥後鞠智城の軒丸瓦について、畿内経由の百済系のもの、高句麗百済系のものが北部九州のなかで展開したと考えている。

筆者も基本的にはこの考えに賛同しているが、鞠智城の軒丸瓦に関しては、「外縁の下半がない」という特徴が気になっている。瓦当部に出来上がった行基式丸瓦を被せただけの「丸瓦被せ技法」の軒丸瓦は日本列島では、筑前大宰府政庁（月山東官衙・日吉官衙・蔵司官衙・国分松本遺跡出土、030型式：7世紀後半～末）、肥後鞠智城跡（7世紀後半～末）、武蔵高麗郡高岡廃寺（8～9世紀）でしか確認されておらず、朝鮮半島においても忠清南道千房遺跡（7世紀後半）（公州大学校博物館1996）でしか確認されていない（図20）。

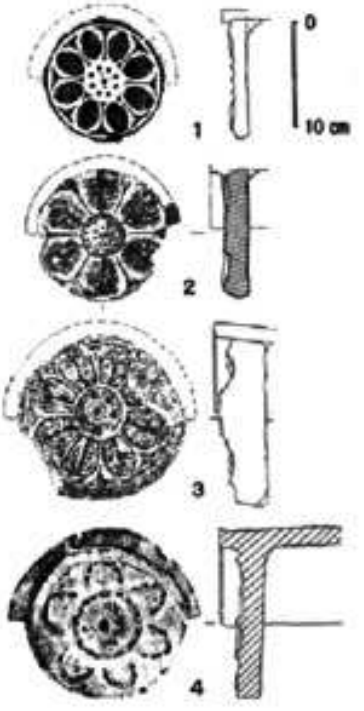


図20　日韓の丸瓦被せ技法の軒丸瓦（1/6）
1.忠清南道千房遺跡
2.大宰府政庁月山東官衙跡
3.肥後鞠智城跡
4.武蔵高岡廃寺

忠清南道は旧百済地域であり、この千房遺跡を百済寺院と考えることも可能であるが、出土軒丸瓦の文様は古新羅系で、筆者は660年の百済滅亡後に新羅瓦を用いて創建された新羅寺院と考えている。ということで、類例が少なく、不確実ではあるが、丸瓦被せ技法は新羅系の技法ではないかと推測している。さらに大宰府政庁関連遺跡で出土している030型式の軒丸瓦は6弁であり、百済瓦にはほとんど見られず、高句麗瓦や新羅瓦に多い。そして、鞠智城跡の軒丸瓦は8弁ではあるが、中房のまわりに溝を持つ。この特徴も新羅瓦に比較的見られる特徴である。また、遠く関東の武蔵高岡廃寺の瓦は蓮華文がかなり崩れ、8～9世紀のものと考えられているが、中房内蓮子が1個という特徴は基本的に高句麗瓦の特徴であり、弁数も6弁である。

以上のように、肥後鞠智城跡の軒丸瓦に関しては、筆者は近年新羅系の可能性を考えている。古く島津義昭・鶴嶋俊彦ほか（1983）は百済系と考え、筆者もそのように考えていたが、途中から新羅系

築している（図18-1、全赫基2022）。日本列島の山城の貯水施設のような自然の土壁を利用した例は分かっておらず、今後類例が発見されるものと思うが、現時点では朝鮮半島のどの地域の貯水施設の影響を受けて日本列島の貯水施設が出来上がったのかはよくわかっていない。

3．渡来系知識・情報・技術を使用した古代山城の遺物

古代山城出土遺物には土器、瓦、土製品、鉄製品、青銅製品、木製品など多様なものがあるが、7世紀段階の古代山城築城時に新たな渡来系技術を使用して作られたものとして、区別しやすいものは瓦である。門の扉に使用された軸摺金具（じくずりかなぐ）も新たに朝鮮半島からもたらされた技術による可能性がある。

瓦　古代山城において瓦がまとまって出土している城跡は、筑前大野城跡（665年築城、698年繕治）、肥前基肄城跡（665年築城、698年繕治）、肥後鞠智城跡（698年繕治）である。ただ、その初期段階のものは、665年頃の築城時のものか、それとも698年の繕治工事段階に使用されたものか、明確な識別はできていない。そしてそれが、それ以前のその地域にあったものか、畿内などから伝えられたものか、朝鮮半島からの新たな情報や技術によって作られたのか厳密な区別は難しい。

7世紀末以前のこれらの瓦については小田富士雄が古くから検討している（小田1977a・b、2013、2016など）。図19が、小田（2016）が政庁Ⅰ期とした瓦で、大野城、基肄城、鞠智城などで出土した単弁（素弁）蓮華文軒丸瓦である。栗原和彦（2000）の分類をもとに、蓮弁の文様から大きく鍋弁（しのぎ）グループ（030・032・033）とかえり弁グループ（020A・020Ba）に分け、Ⅰ類（大野城主城原033型式・基肄城Ⅰ式）：①段階：665～670年、Ⅱ類（大野城主城原020A型式）・Ⅲ類（020Ba型式）・Ⅳ類（032

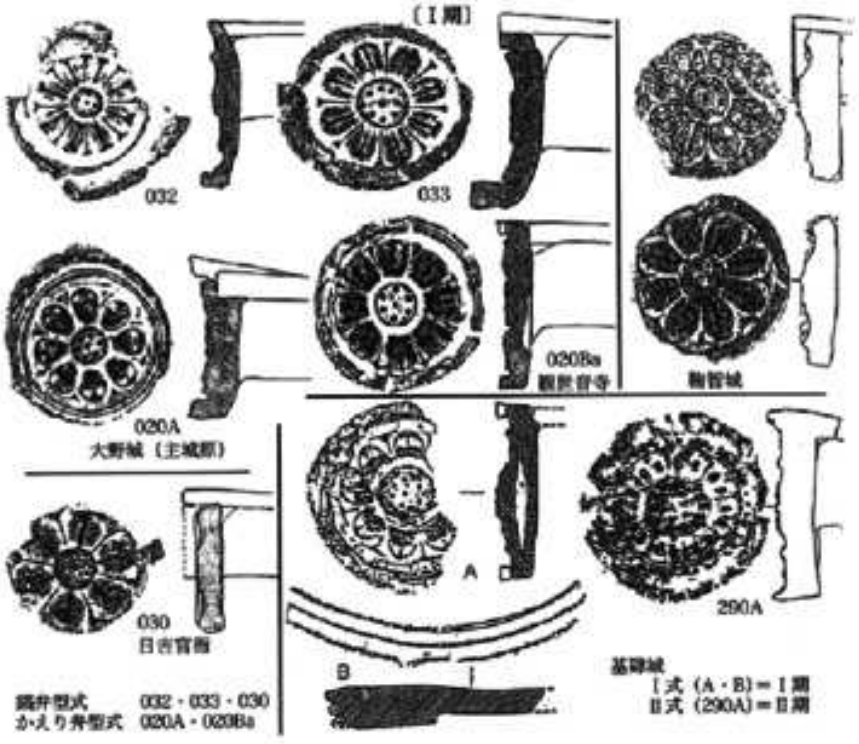


図19　北部九州古代山城出土瓦の小田富士雄分類

一方、古代寺院以外では、摂津前期難波宮の東西の八角形建物跡（図16-2）が7世紀中頃まで遡る最古の八角形建物跡と考えられている（積山2014）。柱配置は3重の柱列が同心円状に配されている。ただ、近年この八角形建物は天武天皇代のものではないかという意見も出されている（泉2018、湊2022）。地方では上野三軒屋遺跡に掘立柱建物（のちに礎石建物）の八角形建物跡がある。この遺跡は上野国佐位郡正倉跡として国の史跡に指定されている。7世紀後半に造営され、9世紀後半まで維持されたようである。平安時代の1030年頃に作成された「上野国交替実録帳」の佐位郡正倉の項に記された「八面甲倉」がこの八角形建物跡に該当すると考えられており、倉庫と考えられている。建物の柱の配置は、井桁状に配され、高句麗集安丸都山城の八角形建物跡と同じ柱配置で、鞠智城跡の八角形建物跡のような放射状配置ではない。

それでは、肥後鞠智城跡の八角形建物のルーツはどこか。筆者は現時点では韓国京畿道二聖山城の八・九角形礎石建物（図15、7世紀後半～8世紀：金秉模・沈光注1988、漢陽大学校博物館2006）や忠清南道公山城の十二角形礎石建物など古新羅・統一新羅の多角形建物がそのルーツの可能性を考えている。

②貯水施設

貯水施設遺構は、肥後鞠智城跡、備中鬼ノ城、豊前御所ヶ谷神籠石、讃岐屋嶋城跡、そして筑前大野城跡などで確認されている。籠城するには当然無くてはならない施設である。肥後鞠智城跡の貯水施設では堤防状遺構と岩盤掘削堰堤が検出され、備中鬼ノ城の貯水施設では土手状遺構が調査され（図18-2）、貯水機能とともに城壁の破損防止のために使用された可能性が考えられている。この2ヵ所のほかに、豊前御所ヶ谷神籠石の貯水施設推定地は未調査であるが、その可能性は高い。讃岐屋嶋城跡の貯水施設に関しては、一部が発掘調査されただけで、詳細は不明であるが、地形的には堤防状（土手状）遺構を持つ貯水施設がいくつかつながって築かれていたものと推測される。さらに筑前大野城跡では鏡ヶ池と呼ばれる場所があり、現在も水がたまっている。

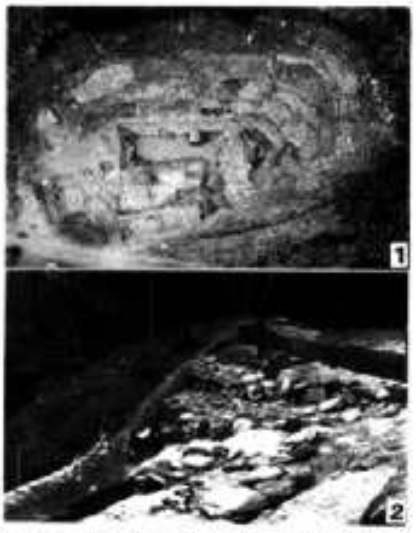


図18　朝鮮半島と日本列島の貯水施設
1.大田鶏足山城跡
2.備中鬼ノ城土手状遺構1

日本列島の古代山城の貯水施設は大野城跡の鏡が池のようなため池状のものとそのほかの例のような谷部の低いところに堤防状のものを構築し、水を溜める構造のものがある。堤防状施設については、鞠智城跡例のように土で積み上げたり、削り出して築いたものと、備中鬼ノ城のもののようにそれに石を貼ったものがある。堤防状遺構の奥側（池の両側）は自然の土の斜面がそのまま使用されている。鬼ノ城の土手状遺構は2ヵ所調査されたが、城内の地形をみると、ほかにも同様のものはあるようで、さらに第1水門貯水池と呼んでいるものはやや小型で土手状遺構はないようである。大野城跡の鏡が池のグループのようである。

朝鮮半島の山城で確認されている貯水施設は方形や円形、楕円形などの形で、石組によって壁を構

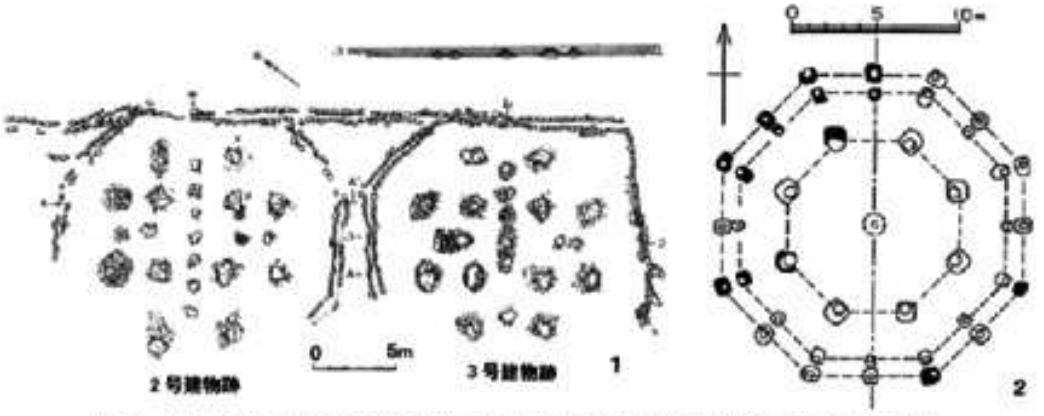


図16　高句麗集安丸都山城八角形建物（1）と摂津前期難波宮西八角形建物（2）（1/400）

ず建てられ、のちに掘立柱建物または礎石建物に建て替えられている。柱の配置は中央に心柱に該当する柱穴があり、そこから南側建物跡（32・33号建物）は柱列が3重に、北側建物跡（30・31号建物）は2重に、そして、放射状に配されている。時期は7世紀後半で、素弁八葉蓮華文軒丸瓦が関連する丸瓦・平瓦とともに葺かれていたと考えられている（熊本県2012）。

日本列島の八角形建物は古代寺院では、大和法隆寺東院夢殿と大和栄山寺八角堂が現存し、大和興福寺北円堂の前身の円堂院などが記録で確認できるが、いずれも8世紀のものである（向井2014）。また八角形の塔としては、山背樫原廃寺の塔が発掘調査で八角形であることが確認され、大和西大寺（8世紀）の塔も記録と遺構で八角形であることが確認されている。これらのなかで最も遡る可能性があるものが山背樫原廃寺の八角塔跡である。細かな創建時期は分からないが、寺は7世紀中頃の創建と考えられ、塔もその時期の可能性がある（亀田2002b、p.446）。そうすると、現時点では肥後鞠智城跡の八角形建物とほぼ同時期の日本列島最古段階の八角塔となりそうである。軒丸瓦の文様は高句麗新羅系のものである。軒平瓦は無文軒平瓦で、顎面に軒丸瓦と同じ文様を押した顎面施文軒平瓦で、顎面施文軒平瓦としては、最古段階のものと推測される。

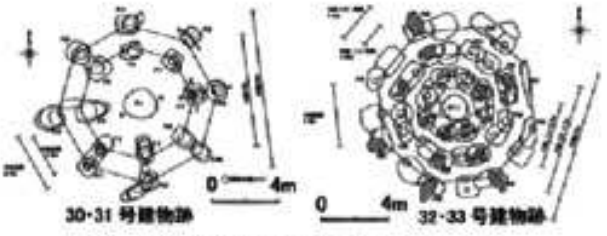


図17　肥後鞠智城跡の八角形建物跡（1/400）

八角形の塔の系譜については、一般的に平壌清岩里寺跡（5世紀）など高句麗寺院の塔につながると考えられている（田中2014）。高句麗の2番目の都とされている中国吉林省集安の丸都山城の城内にも八角形建物跡が2棟ある。時期ははっきりしないが、周辺で出土している瓦は6世紀後半～7世紀のものである。ただ、柱の配置は心柱を中心とした放射状配置ではなく、井桁状配置をしている（図16-1、吉林省・集安市2004）。

樫原廃寺の八角塔は寺院建物や伽藍配置研究などによれば、今述べたように高句麗寺院との関係を考えるのが一般的である。ただ、基壇は瓦積基壇で、これは百済との関わりが推測され、また、この地域は渡来系氏族の秦氏が力を持っていた地域である。

この肥前おつぼ山神籠石以外には神籠石系山城で上記の唐居敷関連のものを除くと明確な門跡は確認されていない。

水門　城内の水は基本的に谷部に排水溝を作って流出させている。通水施設を持たず、そのまま石塁・石垣の間を自然に流れ出るようにしたものも備中鬼ノ城などで確認されているが、西日本の古代山城では一般的に、土塁や石塁の下部に排水溝を作ったいわゆる「水門（水口）」がある。その通水口の数は一つの石垣に1ヵ所の例が多いが、2、3ヵ所のものもあり、横に、上下に、また斜めに並ぶものも見られる（図14）。

この排水溝の床面は、一般的には城壁の最下部、地山面をそのまま利用するものがほとんどで、単独の排水溝が地山面から少し高い石塁や土塁内に確認されるものが筑前大野城跡、豊前御所ヶ谷神籠石、備中鬼ノ城などで確認されている。豊前御所ヶ谷神籠石では現在の外面の床面から数十cmのところに底石を少し突出させ、その側面に側石を立てて丈夫な排水溝を作っている。備中鬼ノ城では石垣の上面に排水溝を作り、その上に土塁を載せている（図14-4）。このような排水溝の高さが何らかの意味を持つのかよくわからないが、百済地域には地山を床面に利用するものが比較的多く見られる。

（3）内部施設

①八角形建物

古代山城においては、掘立柱建物跡と礎石建物跡が検出され、管理棟、倉庫、兵舎、作業小屋、祭祀関連建物などの用途が推測されている。これらの掘立柱建物と礎石建物は一般的に平面形が長方形をなしており、古代山城築城以前の宮殿や一般の建物との区別はできない。その中にあって注目されるものが肥後鞠智城跡の八角形建物跡である（図17）。2棟確認されている。どちらも掘立柱建物がま

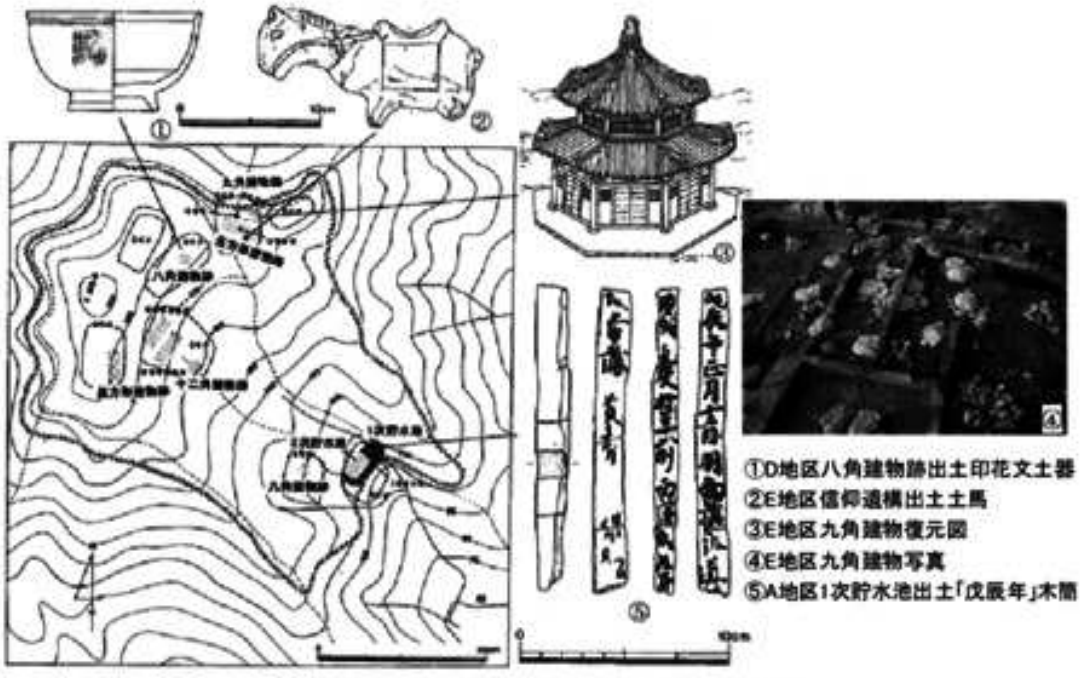


図15　京畿道河南二聖山城（1/8,000）と出土遺物ほか

門があったものと推測される。周防石城山神籠石と播磨城山城跡の唐居敷に関してはこれで完成形の可能性もあるが、未完成品である可能性もある。また、讃岐屋嶋城跡では立派な石組みの門跡が確認され、一部柱穴跡が検出されているが、石製の唐居敷は検出されていない。流出してしまった可能性と木製唐居敷の可能性が推測されている。

一方、柱を石の上に載せる礎石は、対馬金田城跡（図13-2）、筑前大野城跡で確認され、播磨城山城跡と大和酒船石遺跡（図13-3）にもその可能性のあるものがある。筑前大野城跡太宰府口城門跡の礎石は唐居敷使用門の改修時に使用されており、8世紀前半のものと考えられている。播磨城山城跡のものはよくわからない。大和酒船石遺跡のものはもし酒船石遺跡の石垣・土塁に伴うものであるならば、7世紀中頃まで遡ることになる。対馬金田城跡の礎石に関しては、石塁の城門に伴うものと城内土塁のビングシ門跡に伴うものすべてが同じグループのもので、城内土塁が外周の石塁と同じ時期のものか、それとも遡るのかによって使用時期に幅が出てくる。少なくとも現時点まで対馬金田城跡では8世紀に入る土器などは出土しておらず、ビングシ門跡礎石が遡るならば、筑前大野城跡の礎石建物の門よりも古い段階に礎石建物の門が建てられていたことになる。

朝鮮半島では、いずれ発見されるものと思っているが、掘立柱を添える石製の唐居敷はこれまで確認されていない。木製の唐居敷がおもに使用されていたのであろうか。讃岐屋嶋城跡の城門跡では掘立柱の柱穴は検出されているが、石製唐居敷は検出されていない。朝鮮半島で推測されている木製唐居敷を使用していたのであろうか。

また、酒船石遺跡の円形の孔のみをあけたものの類例は朝鮮半島では、高句麗吉林省龍潭山城で実見したことがある（図13-1）。

門の建物：掘立柱建物・礎石建物　今述べた唐居敷と礎石を使用した門のほかに、唐居敷を使用しない掘立柱建物の門が肥前おつぼ山神籠石東門跡などで想定されている。ただ柱穴が大きくなく、門部分の城壁構築用の柱穴という考え、門の柱と工事用支柱を兼ねたものという考えもある（山口2003註19）。

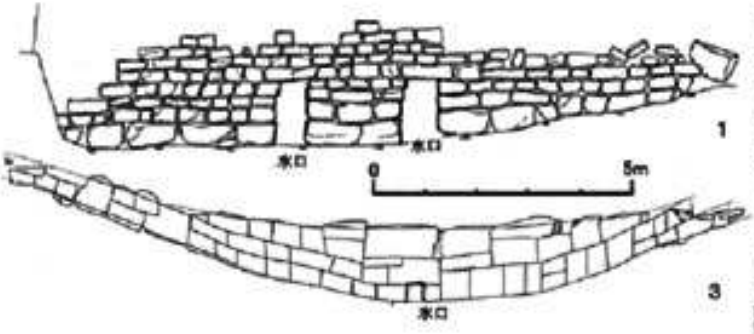


図14　朝鮮半島と日本列島の水門（水口）
1.光州武珍古城東門跡
2.忠清北道沃川城峙山城跡
3.肥前おつぼ山神籠石第2水門跡
4.備中鬼ノ城第2水門跡

1.6m、対馬金田城跡三ノ城戸は約1.6m、筑前大野城跡北石垣城門跡は約1.4mである。

朝鮮半島の懸門を整理した向井一雄（2016）は、懸門の高さ（城門前面石垣高）に注目して、3mを超えるものが多い新羅から、1.5m程度が多い百済を経て、日本列島の古代山城の懸門へという伝播ルートを想定している。

門の平面的特徴：甕城・枡形　甕城（おうじょう）、枡形（ますがた）のような平面構造を持つ門跡は讃岐屋嶋城跡、備中鬼ノ城北門跡（図12-5）などで確認されている。どちらも懸門で、城内に入ったあと、まっすぐ進むことができず、一度左に曲がってしか入れないようになっている。このような構造の門は百済の錦山栢嶺山城（クムサンペクニョン）南門跡（姜鍾元ほか2007）に見ることができる（図12-6）。

讃岐屋嶋城跡や備中鬼ノ城のような全面的な調査を経たものではないが、筑前大野城跡の懸門である北石垣城門跡もその地形を見ると、同様の構造になっていると思われる。また、筑前大野城跡の太宰府口城門跡の場合は、門内を通過したのち同じように直進できないように掘立柱の板塀のようなものが作られていたことがわかっている。このような板塀などによる遮蔽装置は備中鬼ノ城西門跡にも見られ、同南門跡も門を通過して石段を登ると前面に土と石の壁があり、直進はできないようになっている。

敷石・排水溝　対馬金田城跡、備中鬼ノ城、讃岐屋嶋城跡と大野城跡観世音寺城門跡の床面には敷石があり、対馬金田城跡と讃岐屋嶋城跡ではそれらが階段をなすこと、また備中鬼ノ城北門跡（図12-5）と讃岐屋嶋城跡ではその下部に排水溝があることも確認されている。

朝鮮半島では石敷きの門としては、高句麗平壌城内城平壌神社門跡、新羅明活山城北門跡、百済錦山栢嶺山城南門跡（図12-6）など朝鮮半島三国に見られるが、百済では栢嶺山城以外はよくわかっていない（向井2016）。

門礎石：唐居敷・礎石　城門に関する重要な遺物が門礎石である。掘立柱の柱を添える唐居敷（からいしき）と上に柱をのせる礎石がある（図21-1、向井1999）。前者は筑前大野城跡、筑前水城跡、肥前基肄城跡、肥後鞠智城跡、周防石城山神籠石、備中鬼ノ城、播磨城山城跡、讃岐城山城跡で確認され、九州のものは円形の柱が添えられるように丸く刳り込まれており、瀬戸内海沿岸地域のものは基本的に方形の柱が添えられるように方形に刳り込まれている。ただ、備中鬼ノ城の東門跡の唐居敷は円形に刳り込まれている。また周防石城山神籠石と播磨城山城跡、讃岐城山城跡には方形の刳り込みと方立、蹴放の段差などは作られているが、軸摺穴がないものがあり、讃岐城山城跡では柱を添えるための方形の刳り込みが貫通していないものもある。少なくとも讃岐城山城跡には未完成の唐居敷が存在し、未完成の

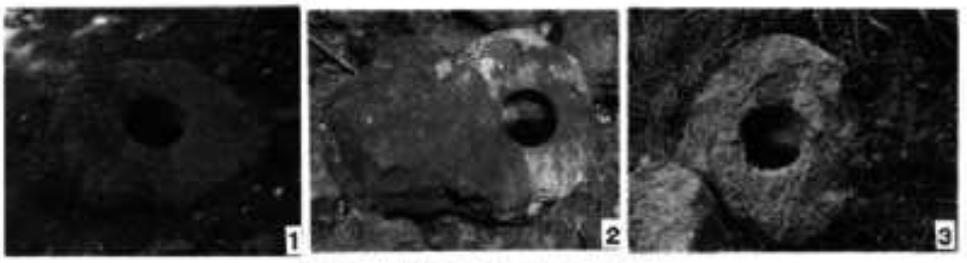


図13　朝鮮半島と日本列島の円孔礎石
1.吉林省龍潭山城跡　2.対馬金田城跡二ノ城戸　3.飛鳥酒船石遺跡

図12　朝鮮半島と日本列島の城壁内の柱痕跡・懸門・甕城
1.備中鬼ノ城角楼　2.平壌大城山城跡蘇文峰　3.忠清南道大田月坪洞遺跡
4･5.備中鬼ノ城北門跡　6.忠清南道栢嶺山城跡南門城

②門

平門と懸門　古代山城の門は基本的に城外から城内へ多少の傾斜はあるにしてもそのまま入る「平門（へいもん）」と考えられていた。しかし、讃岐屋嶋城跡において門に段差がありそうであることが確認され、備中鬼ノ城の発掘調査においても段差のある門跡が確認され（図12-4・5）、朝鮮半島の山城の「懸門（けんもん）」ではないかと注目されるようになった（車勇杰2016）。そしてこのような視点から各地の山城の調査が進められ、現時点では上記2ヵ所のほか、対馬金田城跡、筑前大野城跡でも懸門が確認されている。ちなみに城外面と門床面の高さの差は、讃岐屋嶋城跡城門跡は約2.5m、備中鬼ノ城北門跡は約

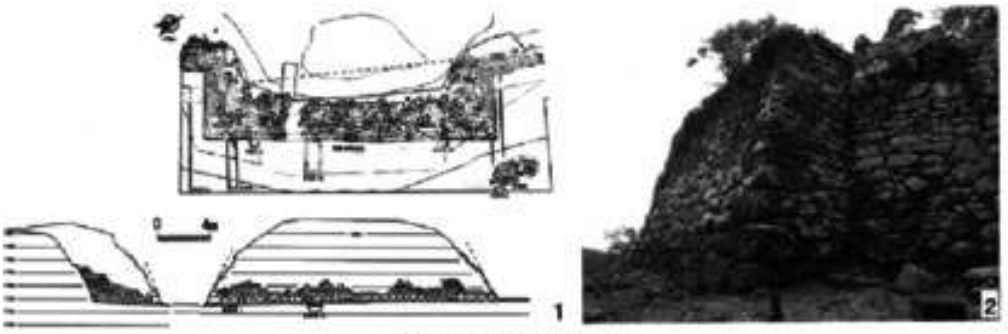


図11　百済と日本の雉城
1.忠清南道扶余羅城東羅城雉城　2.対馬金田城跡雉城

と7世紀という時間的な差があり、これらをどのように説明することができるのか、現時点ではわからないが、少なくともそれぞれが「算木積」であることは間違いないと思われ、宿題としておきたい。

敷石　例は極めて少ないが、備中鬼ノ城の土塁の内外裾部で敷石が確認されている。外面の敷石の場合、土塁前面の柱は切断されるなどしてその上に石が敷かれたことになる。ほかに土塁の外側の敷石は筑前大野城跡小石垣地区でのみ検出されている。朝鮮半島では忠清北道稷山蛇山城跡などで検出されている（図10-1）。ただ、朝鮮半島でも例は少ないようである。

雉（雉城）　雉（雉城）は城壁の外面に上から見て、方形または半円形に突出させた構築物で、敵が城壁に迫ってきたときに、側面からも攻撃できる極めて有効な防御施設である。形態、地域によって雉城、曲城、馬面などとも呼ばれている。この雉が角を持つ城のコーナー部分に設けられ、その上に建物が建てられている場合、「角楼」と呼ばれている。

日本列島ではこの雉に関しては、古くから対馬金田城跡の一ノ城戸（図11-2）が注目されていたが、後世の作り直しではないかとの意見もあった。しかし、備中鬼ノ城（図12-1）の調査で初めて古代山城に伴うものが確認され、対馬金田城跡のものも上部は改変されているが、基礎部は当初のものと考えられるようになった。さらに讃岐屋嶋城跡の浦生石塁横の突出部もその可能性が検討され（高松市2016）、筑前大野城跡にもありそうであると考えられている。

このような雉に関しては、中国・朝鮮半島に類例があるのであるが、車勇杰氏によれば、百済地域の雉は横長型で、備中鬼ノ城や対馬金田城跡のものは百済型と考えられるとのことである（車勇杰氏のご教示による）。

ちなみに、百済最後の扶余羅城の東側城壁線には2ヵ所の雉が検出されている。北羅城雉城は長さ13.1m、奥行1.1～1.4m、高さ約10m？（扶余郡文化財保存センター2013a・b）、東羅城雉城は長さ22.4m、奥行5.3m、高さ約5～6m（図11-1、百済古都文化財団2018）である。ともに横長型であり、備中鬼ノ城や対馬金田城跡の雉は車勇杰氏のご教示の通り百済型でよさそうである。

また、備中鬼ノ城の角楼は正面から見て城壁（石垣と土塁）の間に柱の痕跡が確認できる（図12-1）。このような石垣・土塁構築法は、日本列島の古代山城では基本的に見ることができないが、高句麗平壌大城山城や百済地域の大田月坪洞遺跡（図12-2・3）など高句麗と関わると考えられる山城でみることができる。

図9　高句麗古墳と日本古代山城の算木積
1.集安西大塚古墳南東隅角部　2.讃岐城山城跡城門北側石積み（西より）　3.讃岐城山城跡城門（西より）

に使用された可能性はある。現時点では、西日本の7世紀中頃以前の花崗岩切石礎石の加工技術が古代山城の切石列石などに使用された可能性と、新たに7世紀中頃に入ってきた花崗岩加工技術が古代山城の列石などに使用された両方の可能性がありそうである（亀田2001）。

列石・石垣の石材加工と石積み　上記のように九州の神籠石系山城の列石は基本的にきれいに加工されており、いわゆる切石になっている。特に上前面を鍵形（L字形）に加工するものが比較的見られる。この上面鍵形加工は、本来この加工面まで土塁を削り出すためのものと推測される。

九州の列石石材は、上面鍵形加工のほかは基本的に正面を方形に加工しているが、豊前唐原山城跡（大平村教育委員会2003・2005）には逆に上部前面側を少し高くして、後側を低くした逆L字形のものがある。このような加工は筑前阿志岐城跡で類似したものが見られるだけである。豊前唐原山城跡や筑前阿志岐城跡の上前面を一段高く加工して石材を積み上げる方法は日本列島の古代山城では基本的に見ることができず、高句麗の古墳や山城の石積みにおいて見ることができ、高句麗の石材加工技術とつながる可能性がある。さらに筑前阿志岐城跡ではこのような加工がない石材に関しても積み上げるときに前面を少し下げて階段状に積んだ部分がある。このように上の石を少し後ろに下げることに意味があれば、やはりこれも高句麗の石材の積み方に繋がるのかもしれない（図8）。

また、日本列島の中世から近世の城の石垣の石組みにおいて、隅角に「算木積（さんぎづみ）」と呼ばれる積み方がある。この中近世の「算木積」の起源についてはよくわかっていないが、讃岐城山城跡の城門跡で見ることができる（図9-2・3）。この城門跡については、「算木積」で積まれているため新しく積まれたのではないかという意見もある。しかし、筆者は以前中国集安に行く機会があり、図9-1のような「算木積」で築かれた西大塚古墳（積石塚）を見学した。この古墳は4世紀代のものと考えられており、隅角には積み直しは確認できなかった。つまり高句麗と讃岐の「算木積」については4世紀

図10　百済・新羅と日本の土塁前面石敷き
1.忠清北道稷山蛇山城　2.備中鬼ノ城

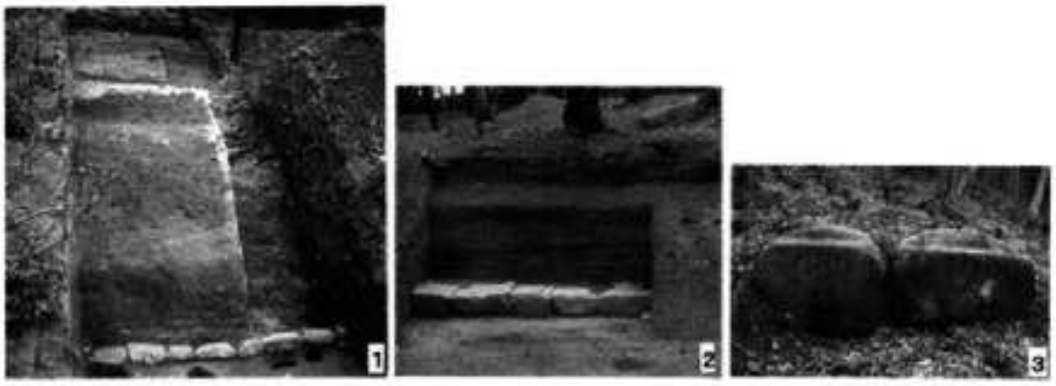


図7　百済と日本の土塁と列石
1.益山市益山猪土城　2.備前大廻小廻山城　3.豊前唐原山城

べ、この列石が朝鮮式山城との区分の大きな目安となり、切石の列石が北部九州の「神籠石」を象徴している（図7-2・3）。そして瀬戸内海沿岸地域の神籠石系山城では一部周防石城山神籠石に切石加工した石材が使用されているが、基本的に割石・一部自然石で、九州と瀬戸内の神籠石系山城の違いを示している。また、北部九州の切石列石には硬い花崗岩が使用されてものが比較的多く、これも特徴の一つとなっている。

一方、朝鮮式山城ではこのような切石・割石の列石はないと考えられていたが、調査が進む中で、比較的小型の割石や自然石を基礎部に並べた土塁が筑前大野城跡や肥後鞠智城跡で検出され、朝鮮式山城と神籠石系山城の近さが認識されるようになった。特に対馬金田城跡のビングシ門跡付近の土塁の基礎部でごく小範囲であるが、備中鬼ノ城の列石と類似した大きめの石材が確認された。この石材をどのように理解するのか、今後の調査に期待したい。

ただ、このような土塁基礎部の切石列石は朝鮮半島では明確に確認されておらず、北部九州の古墳の花崗岩加工技術が使用されたのではないかと考えられている。割石列石を土塁基礎部に設置した割石列石土塁もその例がほとんど知られておらず、この関連がよくわかっていなかった。しかし、百済時代のものと推測される全羅北道益山猪（イクサンチョ）土城で割石列石土塁は確認されている（図7-1、亀田2016b、金善基・趙相美2001）。切石列石土塁は今後の検討課題であるが、花崗岩の切石加工技術は6世紀末～7世紀初め頃に百済から飛鳥地域や西日本各地に伝えられたようであり、その技術が西日本の古代山城

図8　高句麗と日本の逆L字形段加工石材
1.集安将軍塚古墳1号陪塚　2.豊前唐原山城跡第1水門跡（北より）　3.豊前唐原山城跡第1水門跡（西より）

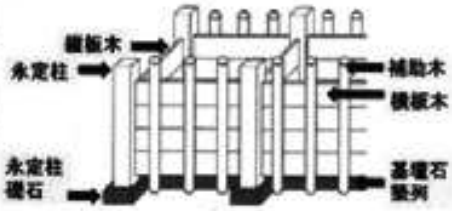


図5　仁川市江華島玉林里遺跡
江華中城（1250年）土塁と模式図

そういう意味では、古代山城の「版築」については、飛鳥寺など古代寺院に使用され始めた「版築」が古代山城にも使用されたとも考えられるが、百済からの亡命貴族（将軍）・工兵部隊の責任者クラスの人物などが665年の大野城などの山城築城時に独自に指導して、この版築技術を地元の人々に指導して作らせた可能性も十分考えられる。ちなみに大野城が築かれた筑前地域の665年以前創建の古代寺院は明確ではなく、筑後上岩田遺跡土壇がその可能性があるくらいで、九州全域でも確実に665年以前築造と推測できる古代寺院はよくわかっていない。

つまり、水城・大野城・基肄城などの版築土塁構築には北部九州の古代寺院の版築技術が使用された可能性は当然あるが、百済系亡命貴族（将軍）・工兵部隊の責任者クラスの人物などが地元の人々を使って、彼らの技術とともに新たな版築技術を教えて築いた可能性が高そうである。

敷粗朶工法　敷粗朶（しきそだ）工法は中国漢代の池の堤などに使用され、おもに水気のあるところの土手（堤・土塁）などに使用される工法で（大阪府立狭山池博物館2021）、日本列島では岡山県倉敷市上東遺跡の弥生時代後期の港関連の堤で確認され、少なくとも弥生時代から存在していたことがわかっている（岡山県2001）。ただ、この工法は日本列島には定着しなかったようで、7世紀半ばの奈良県山田道遺跡（小田ほか2008）で確認され、そして7世紀後半の福岡県水城跡（大堤）（図6-2、九州歴史資料館2009）で見ることができる。大土居水城跡の土塁の下層（春日市2000など）でもその可能性のあるものが見つかっている。

朝鮮半島での敷粗朶工法については、城関係ではソウル風納土城の城壁（4～5世紀）（国立文化財研究所2002）で検出され、扶余羅城（6世紀）においても検出されている。扶余羅城では、前述の陵山里寺跡南側の羅城東門跡の南側で検出されている（図6-1、国立扶余博物館2003）。使用される場所はやはり水気のあるところで、中国・日本列島での使用例と同じで、大宰府水城大堤はまさに扶余羅城の敷粗朶工法とつながるものではないかと推測している。

図6　百済と日本の敷粗朶工法
1.扶余羅城南側土塁前面敷粗朶　2.太宰府市水城跡敷粗朶

列石　神籠石系山城の土塁基礎部には基本的に切石や割石の列石を並

このように平地との比高差は、朝鮮半島の山城も同様であり、百済からの亡命貴族たちが直接・間接的に築城に関与した可能性は高く、日本列島の古代山城の選地や規模などについては渡来系の知識・情報・技術が活用されたものと考えている。ちなみに、日本列島の古代山城の規模に関しても城周がおおよそ2、3kmであることも、百済における地域拠点の城の規模を反映していると思われる（図4、亀田1995）。

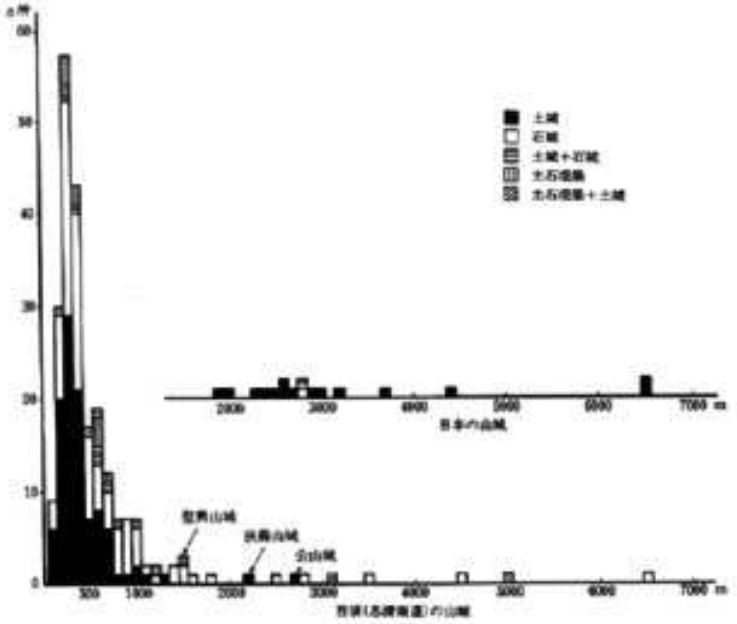


図4　百済と日本の山城の大きさと数

（２）外郭構造

①城壁

土と石　朝鮮半島の古代山城に関しては、そそり立つ石の城壁がよく紹介され、一般的に石の城がほとんどのようなイメージがあるが、少なくとも百済の中心域である忠清南道では土城と石城の数は半々であり、王都が置かれた公州や扶余地域では約7割が土城である（亀田1995）。つまり日本列島に山城を伝えた百済地域の山城は少なくとも土城がそれなりの数は存在するのである。

西日本の古代山城に関しても、石城は対馬金田城跡のみで、よく石垣の写真が紹介される備中鬼ノ城もほとんどは土で築かれている（図3）。また讃岐屋嶋城跡に関しても、確認されている門跡付近の城壁は石で築かれているが、そのほかの部分に関しては、切り立った崖をそのまま使用した可能性も推測され、その上に土塁が築かれている可能性も無視できないのである。このように西日本の朝鮮式山城・神籠石系山城は基本的に土で築かれた土城で、谷部などに石塁が使用されたと考えられる。

そのような意味で対馬金田城跡は特異である。金田城が築かれた場所が基本的に岩山であるという地理的な条件にもよるのであるが、少なくとも当時の日本列島において約3mを超える石垣（石築城壁）を築く技術はなく、やはり渡来系の人たちによる指導・実際の施工がなければ、難しかったと考えられる（田中淳也2016、亀田2012）。また、備中鬼ノ城も基本は土塁であるが、西門跡南東側の高石垣は5mを超え、少なくとも渡来系の技術者たちの指導がなければ難しかったのではないであろうか（図3、亀田2021）。

版築　土の城壁は一般的に版築土塁で築かれている。「版築（はんちく）」は新村出編2013『広辞苑　第6版』岩波書店では、「板でわくを作り、土をその中に盛り、一層ずつ杵で突き固めるもの」とあり、日本列島では、古代寺院の基壇構築に使用され始めたと考えられている。一部、古墳の中に「版築状」や「層状」積み土と呼んでその関連も推測されているが、ひとまず588年に造営が開始された大和飛鳥寺が最古の版築の使用と考えられている。

に、のちの日本列島の中世山城は尾根線上をおもに利用して郭（平坦面）を作っており、基本的に異なる。

古代山城については、その山のどの部分に城壁をめぐらすのかなどによって鉢巻式、包谷式などに分類されているが、実際には山の形などによって多様である。また標高の高低差も、最低所がほとんど平地に接する肥前おつぼ山神籠石、筑前鹿毛馬神籠石、豊前唐原山城跡（大平村2003・2005）などから、最低所と平地との比高差が200m以上ある筑前雷山神籠石、周防石城山神籠石、讃岐城山城跡、讃岐屋嶋城跡（高松市2016、渡邊2016）など多様である。筑前大野城跡や肥前基肄城跡は平地との比高差は130～140mであり、肥後鞠智城跡（熊本県2012、矢野2016）は約30mとかなり近い。また崖の上に築かれた印象がある対馬金田城跡（田中淳也2016）も西から北側は比高差が100m以上あるが、東側、特に二ノ城戸付近では海との比高差は22mほどしかなく、海までの距離も100m弱である。ちなみに備中鬼ノ城の比高差は約250mである。

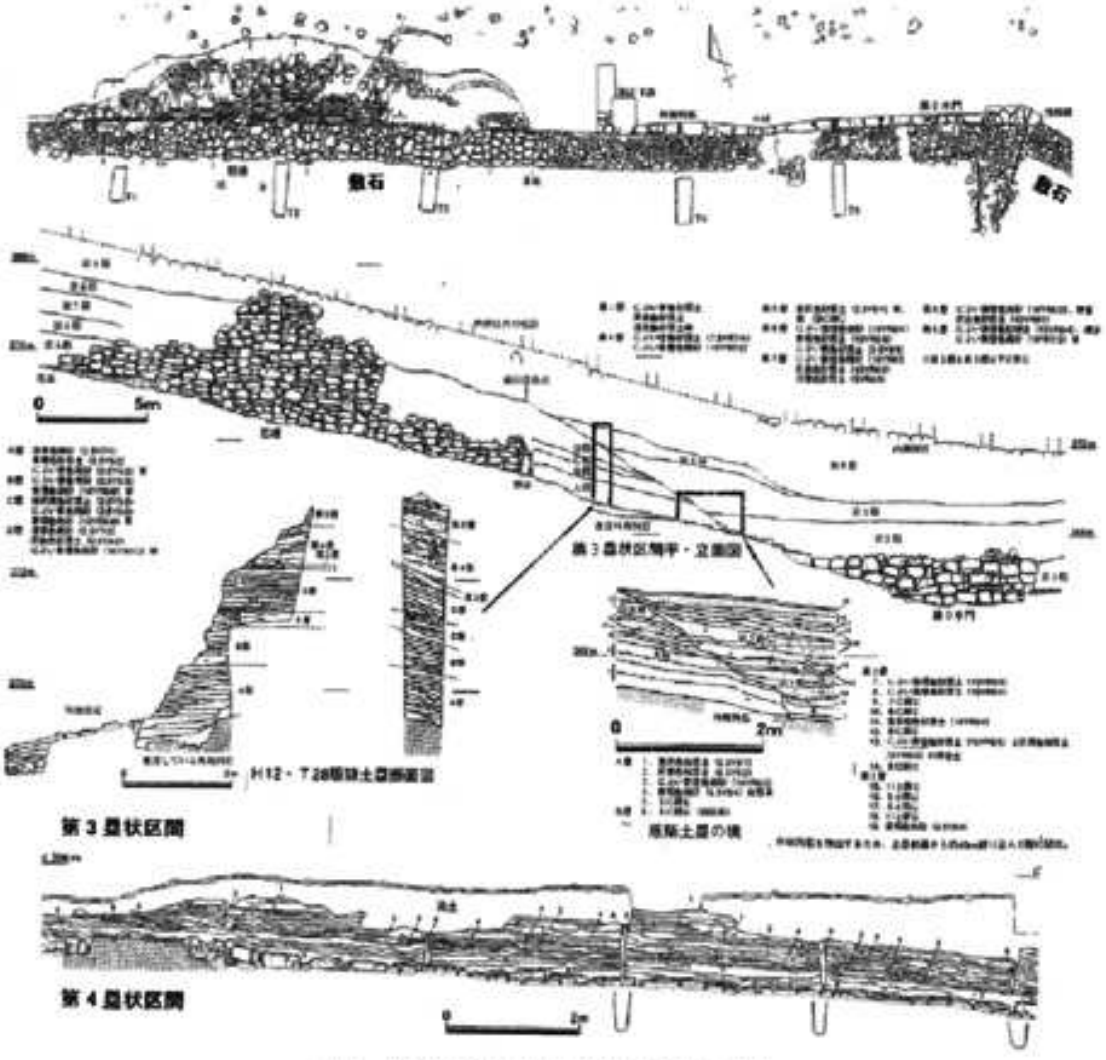


図3　備中鬼ノ城第3・4盛状区間の土塁・石垣

図1　古代山城の分布

A. 大野城跡　B. 基肄城跡　C. 長門城　D. 金田城跡　E. 屋嶋城跡
F. 高安城跡　G. 鞠智城後　H. 常城　I. 茨城
1. 播磨城山城跡　2. 大廻小廻山城　3. 鬼ノ城　4. 讃岐城山城跡
5. 永納山城跡　6. 石城山神籠石　7. 唐原山城跡　8. 御所ヶ谷神籠石
9. 鹿毛馬神籠石　10. 杷木神籠石　11. 高良山神籠石　12. 女山神籠石
13. おつぼ山神籠石　14. 帯隈山神籠石　15. 雷山神籠石　16. 阿志岐城跡

が、そのほかの朝鮮式山城・神籠石系山城の近くにはよくわからない。

次にこの北部九州から河内・大和までであるが、瀬戸内海沿岸の各国に1、2ヵ所ずつ築かれている。国府関連遺跡との関係が比較的推測しやすい例は備中鬼ノ城（総社市2005・2006、岡山県2006・2013、平井2016）と伊予永納山城跡（西条市2016）、そして讃岐城山城跡（古代山城研究会1996）くらいで、そのほかは交通の要衝にはあるが、特定の拠点との関わりはあまり明確ではないようである。たとえば、備前大廻小廻山城（岡山市1989）は備前国府推定地とはかなり離れている。

以上のような選地については、北部九州から大和までの陸路・海路の両方をある程度理解しておけば可能であろう。つまりヤマト王権側のそれなりに築城に関する知識を持つ人物であるならば、古代山城の選地は可能であろう。ただ、当時古代山城に関する知識を有した人物については全くの日本列島の人物もいたかと思うが、その近くには朝鮮半島との往来に関する知識や情報をもつ渡来系の人物がいた可能性はあると思う。一方、百済からの亡命貴族（将軍）クラスの人物が選地の責任者である場合も、彼らだけで築城の場所を選ぶのはやはり難しいのではないかと考えている。それぞれの地域の地勢情報（眺望・周辺の交通網・水があるのかなど）に詳しい人物、全くの一般の日本列島の人物もいたであろうし、多少なりとも築城に関する情報や知識を持った渡来系の人物などの存在も必要であろう。

つまり、北部九州から大和までの古代山城の選地に関しては、朝鮮半島での城作りに慣れた人物はやはり必要であり、地元の日本列島人や渡来系の人々の協力も必要であったと考えている。

縄張・高さ・比高差　縄張に関しては、7世紀以前に朝鮮半島の山城に類するものは基本的に日本列島には存在しない。弥生時代の環濠集落や高地性集落、古墳時代の豪族居館などの中に朝鮮半島の古代山城と類似するものがないわけではないが、弥生時代のものは時間的に間があきすぎであり、古墳時代のものは規模的にも小さい。朝鮮式山城のように城周2、3kmに及んで山の頂部付近を城壁がめぐる形態のものは古代山城築城以前の日本列島にはやはりないといえよう。ちなみ

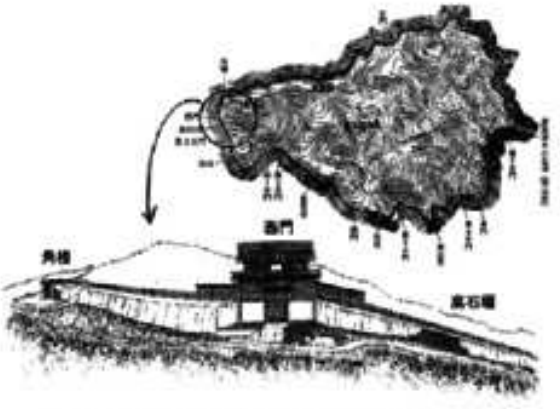


図2　備中鬼ノ城全体図と西門付近イメージ図

古代山城にみる渡来系技術

亀田　修一（岡山理科大学特任教授）

1．はじめに

日本列島の古代山城には朝鮮式山城と呼ばれているものと神籠石系山城と呼ばれているものがある。前者は『日本書紀』や『続日本紀』などの記録にみられるもので、後者はその本来の名前は分からないが、列石を伴う土塁や水門の遺構などから古代の山城と考えられているものである。特に後者に関しては、土塁前面下部の列石が大きな特徴として認識されている。

朝鮮式山城は、斉明天皇6（660）年の百済滅亡、天智天皇2（663）年の白村江の戦いにおける敗戦、百済からの多くの人々の亡命・移住、唐・新羅が日本列島へ攻めてくるのではないかという危機感などから築かれたと考えられている（森1998、鈴木2011など）。敗戦の翌年、天智天皇3（664）年に、まず水城（福岡県太宰府市など）が築かれる。翌4（665）年、長門国の城、筑紫国の大野城・椽城が百済からの亡命貴族（将軍）達率答**体**春初、達率憶礼福留・達率四比福夫らによって築かれる。さらに6（667）年、倭国の高安城、讃吉国山田郡の屋嶋城、対馬国の金田城が築かれる。そして文武天皇2（698）年、大宰府に大野・基肄・鞠智の3つの城を繕治させている。一方、高安城は大宝元（701）年に廃され、備後茨城・常城城は養老3（719）年に停止されたことが記されている。

このように記録にみられ、所在地がおおよそ確認されている朝鮮式山城が6ヵ所、記録にはみられないが、その遺跡が確認されている神籠石系山城が16ヵ所、合計22ヵ所の古代山城が確認されている。そして、記録はあるが、その所在地などがわかっていないものが5ヵ所あり、これに中国系山城といわれている怡土城を含めると、合計28ヵ所の古代山城があることになる。小稿では怡土城と所在地不明の5ヵ所の山城は外して述べていく[1]。

朝鮮式山城は上記のように百済の亡命貴族（将軍）が指導して築かれたことがわかるが、具体的にどのような「知識や情報や技術」が使用されて神籠石系山城も含めた古代山城が築かれたのか。筆者のこれまで発表してきた論文（亀田1995・2002・2009・2014～2016・2018・2021など）など参考にしながら考古学的な研究成果によって古代山城の「広義の渡来系技術」について見ていきたい。

2．渡来系知識・情報・技術を使用した古代山城の遺跡・遺構

（1）選地・周辺遺跡・規模・縄張・高さ・比高差

選地・周辺遺跡　北部九州から瀬戸内海沿岸地域を経て、大和までの範囲内でどのような場所が選ばれたのか（図1）。まず、玄界灘沿岸から有明海北部沿岸までの地域で、大宰府を中心とする地域、朝倉橘広庭宮を中心とする地域などが防御の拠点であると考えられている。海からの攻撃と、上陸してのちの主要交通路（のちの官道など）沿いの重要な場所に山城が築かれたと考えられている。大宰府の周囲には大野城（入佐・小澤2010、下原2016）・基肄城（田中正弘2016）・阿志岐城跡（小鹿野2016）と水城（杉原2016）および関連土塁などがあり、朝倉橘広庭宮推定地の近くには杷木神籠石がある。のちの国府などの地域拠点周辺に関しては、高良山神籠石の麓に筑後国府関連遺跡群がある

す。この点でも当時朝鮮半島では存在しなかった構造と言える。箸墓古墳の周濠東南部で検出された土橋部（図13）も簡素ながら裾石を備えて，周濠水の波から土橋を守る役割を果たしている。

３．古代山城の築造技術の由来は？

考古学・古代史の教員・院生との合同フィールドワークで，福岡・熊本両県にある主だった古代山城を巡検してきた。その際に注意して観察したのは，水門と土塁である。建築物とそれを構築するための基礎造成（地業）は寺院と官衙の瓦葺建築の構築技術体系を用いれば可能である。水門と土塁の石積み法も，それ自体は古墳時代後期の横穴式石室の構築技術との類似点もみられる。しかし，大規模な水門の構築と，水門も取り込んで急峻な谷と山陵を横断する堅固な石積みを伴う土塁は，朝鮮半島の古代山城の技術なくしてはとうてい不可能であろう。その由来を当日お教え願いいただくようお願いしたい。

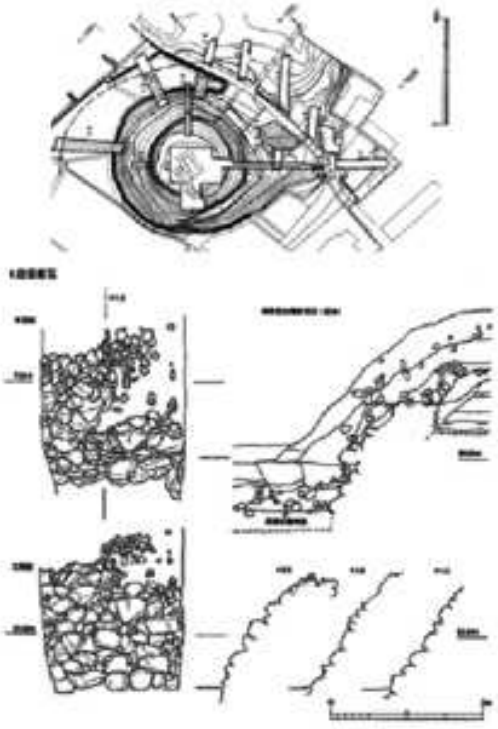


図12　ホケノ山古墳の後円部下段の石積み
（『ホケノ山古墳の研究』2008）

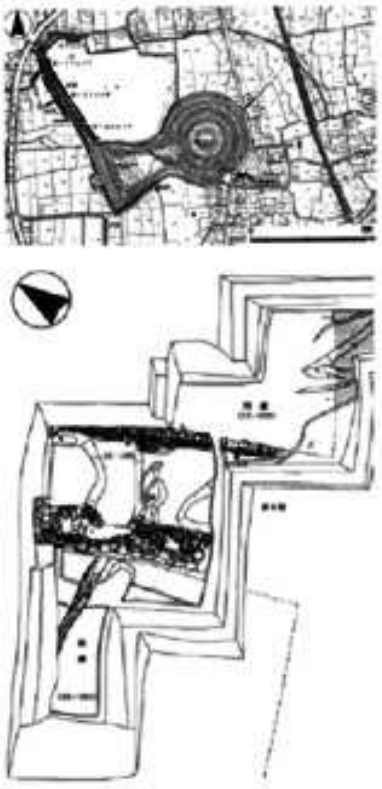


図13　箸墓古墳の土橋
（『桜井市埋文センター発掘調査報告書20』1999）

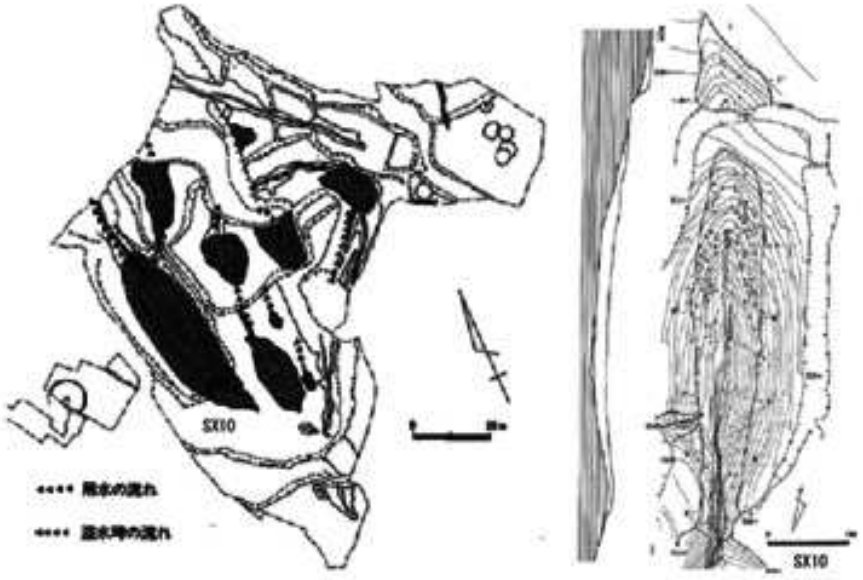


図11　三苫永浦遺跡の溜井遺構（『三苫永浦遺跡』1996）

約15～30cmの横木に添えて上流側に杭を密に打ち込み下流側に支保材をかませた構造を数列組み合わせた堅固な構造で、中期末から後期中頃まで下流から上流へと順次補い追加された状況である。流路の西側を検出しただけなので20～30mほどの幅になると調査者は見ている。井堰の他に、溜井も弥生時代中期には出現している。福岡市三苫永浦遺跡（図11）では、並列する小さな谷地形を利用した溜井が10基確認された。最大例で長さ53m・幅12m・深さ最大4mほどもある。しかし、周辺地形をみると、下流の水田域が河川から用水を確保することが不十分なことから給水するための施設とみられる。

土木技術という点では石積み構造も見てみよう。縄文時代にも環状列石や配石墓など礫石を用いて構造物をつくる例はあるが、立石部を除くと基本的には平面的であって、立体構造は著しく稀である。ところが弥生時代になると石積みによる立体的構造物が出現する。その最古の実例が、弥生時代早期～前期初頭の福岡県宗像市田久松ケ浦遺跡の木棺石槨墓群である。塊石を垂直に1m近く積み上げて槨構造をつくり、木棺を納めたのちに蓋石を架す。有柄式磨製石剣・磨製石鏃（舶載型式）や小形壺を副葬する習俗とともに朝鮮半島の木棺石槨墓が受容されたものである。福岡平野周辺ではこうした石積み構造はほとんどみられず、むしろ遠賀川以東の中・四国方面に簡略化した類例が広がる。その中で前期の島根県松江市堀部第一遺跡や広島県三次市高平遺跡では埋葬施設よりもむしろ埋葬群の上面を礫石で覆う構造となっている。この構造は中期前半にいったん不明瞭になるが、中期後半から後期になると、ふたたび方形および四隅突出型墳丘墓に現れて墳丘の裾部を覆い、次第に石積みが発達を遂げ、中部瀬戸内の墳丘墓を介して定型的前方後円墳へと引き継がれる。弥生墳丘墓では墳丘自体の盛土は顕著でないために裾列石はあっても、石積みは顕著ではない。定型的前方後円墳が形成される直前のホケノ山古墳の段階で墳丘を構成する重量ある封土を裾で堅固に抑えるために、積石構造が急速な発達を見せる（図12）。それはまた周濠に溜まる水面の波から墳丘を保護する役割をも果た

水田造成・灌漑施設　弥生時代の土木技術は，環濠だけでなく，水田造成や灌漑施設としての井堰も確認しておく必要があろう。近年近畿地方の奈良県御所市の中西・秋津遺跡では弥生時代前期，大阪府八尾市・東大阪市の池島・福万寺遺跡では弥生時代前期から後期までの大規模な水田跡が検出されて注目された。前者では調査区外を含めると水田域は10万㎡にも及び，後者では灌漑用水の給水の仕組みが詳しく分かっている。

弥生時代前期の水田跡は数万～十万㎡に及ぶと考えられるので，水田造成と合わせると集落の開設にともなう土木量はかなりのものとなる（仮に一集落60名とすると@200㎡を超える土量となろう）。環濠集落は中・四国地域では発見例が少なく大規模な例も少ないが，それ以外の地域では関東まで一般的な集落形態である。いまだ鋤・鍬類は刃先に金属を用いない早・前期の段階では，弥生時代後期以後に水田造成が大規模化するとしても鉄製刃先が普及することと比べると，相対的には厳しい労働であったと推定される。

土木技術では，環濠掘削や水田造成の他に，灌漑施設としての井堰の造成にも目配りする必要がある。弥生時代水田に伴って各地で井堰が検出されており，ここでは弥生時代でもっとも堅固な井堰遺構が確認された福岡市比恵遺跡（第131次調査）の事例を示す。比恵遺跡は，弥生時代中期には南隣の那珂遺跡と連続する南北約２km・東西600m内外にもおよぶ著しく大規模な集落で，後期末には中央を南北に貫く道を起点として碁盤目状の街区に編成替えされている。この街区は大陸の城市（城壁都市）の設計原理の影響を想起させるが，比恵・那珂遺跡がのる台地の自然地形に沿う点は城市の原則から外れることは注意しておきたい。ここで注目するのは城市ではなく，井堰遺構である（図10）。井堰は集落北端の東側を北へ向かう流路に設けてあった。下流から上流側に4列が確認され，各列は直径

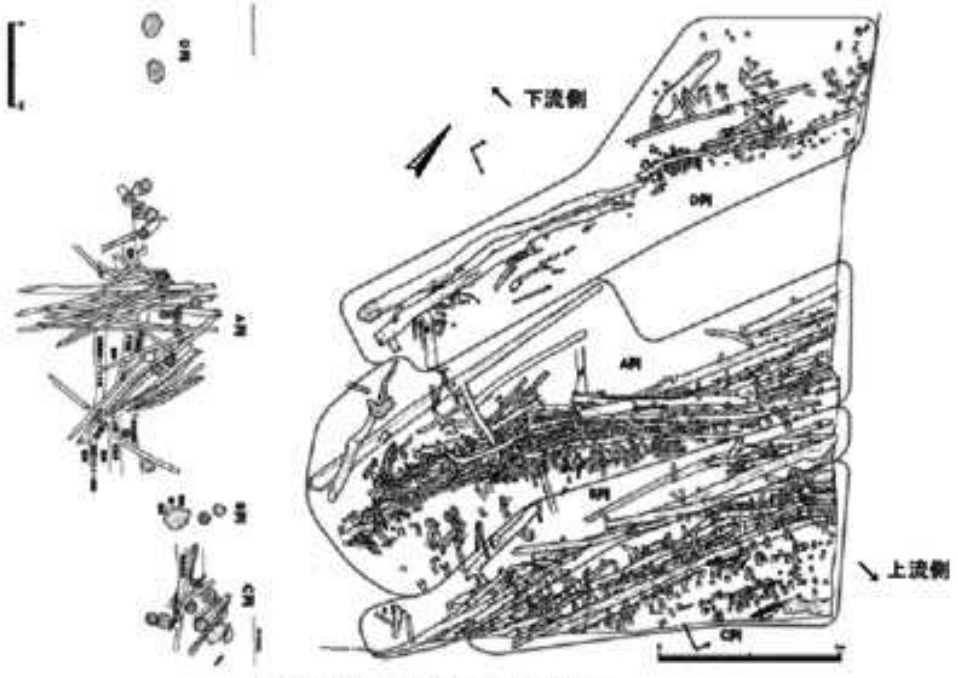


図10　比恵遺跡の井堰（『比恵71』2014）

製品はもたらされたものの製作（鋳造）技術は導入されないために，使用して破損した場，高温で鍛打したり鋳造し直したりの再生はできなかった。それゆえ，あたかも磨製石斧が破損した場合のように，鋳造鉄斧の破片を研磨して，より小形の鑿類に再加工するほかなかった（図７）。破片となった鋳造鉄斧の多くがこうした研磨による再加工が施してある。金属器が導入されても，弥生社会に技術移転ができたのは青銅器だけであった。

（３）土木・石積み技術

縄文時代には顕著でなく弥生時代になって大陸から導入された技術として，ものづくりのほかに，大地に構造物をつくる技術（土木・石積み）もある。これは，縄文時代からの変化を知る以上に，1000年内外のちに造成された古代山城の土木技術との違いの大きさを感じるために提示するものである。

環濠集落　土木技術では，集住する集落の居住域の周りに巡らす環濠（と土塁）と，灌漑水田の造成技術を挙げる。環濠施設は，縄文時代でも中期末の北海道に2遺跡の実例があるものの，その性格も由来も不明なので，ここでは略す。弥生時代に新たに導入された環濠集落は，中国の北方（内蒙古自治区興隆窪遺跡など）と長江中流域（湖南省八十撚遺跡など）に始まり，朝鮮半島経由で弥生時代開始期に導入されたものである。早期～前期初頭の福岡市那珂遺跡（図８・９）では外径約150ｍ・内径約125ｍの二重環濠で，断面Ｖ字形の外環濠は復元幅6～7ｍ・深さ約4ｍ，断面逆台形の内環濠は復元幅約3.5ｍ・深さ2.5～3ｍの規模である。環濠内の面積12000㎡，環濠が全周すると仮定すると掘削土量は8000㎥内外に上る。しかしこれは弥生時代最初期の環濠集落であって，弥生時代中・後期の数十万㎥におよぶ大規模環濠の場合は，環濠の規模も大きく，多重環濠も多いことから一桁以上大がかりな土木量になる。

図８　比恵・那珂遺跡
（久住猛雄「弥生時代の考古学」6所収論文2008）

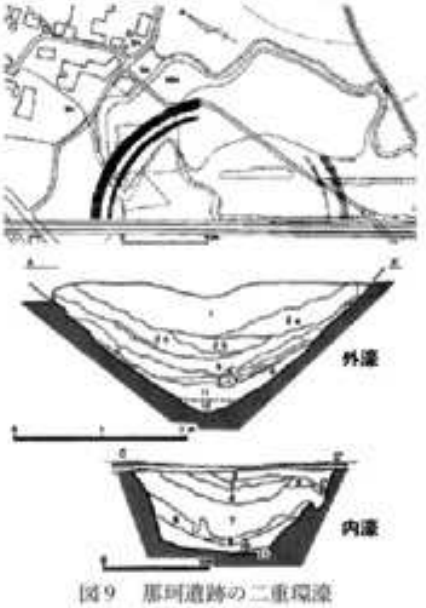


図９　那珂遺跡の二重環濠
（「那珂11」1994）

員が参画するものとなっている。北部九州から近畿周辺まで広く定着した青銅器群は，その由来を辿れば朝鮮青銅器文化に行きつくが，しかし青銅器の社会的意義が大きく変質している。

朝鮮半島では，弥生時代中期併行段階になると鉄製の利器と武器が普及していく中で，青銅武器・利器類は急速に後退する。一方，北部九州では，鉄製利器・武器類は次第に普及していくものの，武器形青銅器は銅矛を中心に大型化および儀器化が進行し，朝鮮半島型式から大きく逸脱する。いわば倭型式の形成であり，それは製作と流通の中心が九州から中・四国方面に移る銅剣でも同様である。導入時は剣・矛・戈の青銅武器としてセットをなしていたのが北部九州の銅矛・銅戈と中・四国の銅剣に分離する。その過程に併行するように小形で無文の小銅鐸から大型で有文の銅鐸が形成され，その分布も近畿周辺に移る。朝鮮半島系青銅器文化の青銅器群が一部を脱落させて導入され，北部九州に定着したものの，まもなく日本列島（倭国）内の各地域社会の中で分離・個性化する。本来は有力者の武威とともに司祭者であることを示す器物であった青銅器群は，分散・個性化して地域集団の祭器としての道を歩む。青銅器の社会的意義の変質である。

図6　青銅器生産の東方展開
（石川「銅鐸は九州で形成された」2022）

中期後葉に楽浪郡を介して漢王朝との交渉が始まり，多数の前漢鏡が北部九州にもたらされるとどうなるか。前漢鏡は面径20cm以上／15～17cm内外／10cm内外以下の大・中・小型鏡があり，大陸では大型鏡は諸侯クラスの墓葬に副葬されるなど，銅鏡のサイズ別に扱いの差異がある。それが北部九州では，のちの奴国・伊都国の須玖岡本遺跡D地点・三雲南小路遺跡1号甕棺のみが大型鏡を保有する。最上位の玉壁の扱いは異なるものの，銅鏡は漢王朝内の扱いに準じる。しかも外交による入手品であるから製作技術は伴わない。朝鮮半島系青銅器と全く性格が異なることに注意したい。

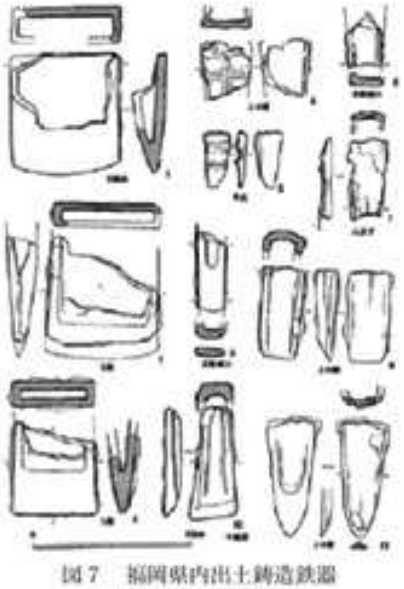


図7　福岡県内出土鋳造鉄器
（野島永「科研報告」2010）

鉄器とその再加工　かつて鉄器は，漢王朝の楽浪郡設置以後に日本列島にもたらされると考えられていた。しかし，それ以前である弥生時代中期初頭～中葉の鋳造鉄斧が広く西日本各地で発見され，その形態的特徴は戦国代の燕の型式に属す。最古の実例は前期後葉に遡るので，朝鮮青銅器文化第3期に伴う燕系鋳造鉄器が青銅器群とともに弥生社会に導入されたことが分かる。石川県小松市八日市地方遺跡では，鋳造鉄斧を装着する形態の斧柄がまとまって出土しており，青銅利器がほとんど欠落する中で，鉄製利器が思いのほか早く普及する状況が分かっている。

しかし一緒に導入された青銅器と異なって，鉄器の場合は，

図4　朝鮮青銅器文化第3期の組成
（『咸平草浦里遺跡』1988）

部九州で遅くとも中期初頭に始まった青銅器鋳造は，その型式が朝鮮半島青銅器文化第3期（図4）に合致しており，鋳造技術者が海を渡って来たことは確実である。その実際はどうだったのであろうか。

北部九州で最初に鋳造された青銅器は，武器＝銅剣・銅矛・銅戈，祭祀具＝小銅鐸，利器＝銅鑿・銅鉇であり，最近鋳型片が発見されて多鈕鏡も製作されたと判明した。武器類は細形型式であることをはじめ朝鮮半島青銅器文化第3期の型式がそのまま継承されている。ところが全ての器種が揃うわけではなく，八手・竿頭・双頭・柄付などの鈴付青銅器が欠落する。音響を発する小銅鐸は，石製鋳型で鐸身と舌を別づくりで製作できるが，鈴付青銅器は鈴の中に鈴玉を入れ浮かせるために鋳型土（真土）を用いる。これら鈴付青銅器はいずれも外面に凹面による精細な幾何学文様を施しており土製鋳型による鋳造である。春日市タカウタ遺跡の調査によって細形銅矛・銅戈にも土製鋳型が採用されていることが確認されたものの，土製鋳型による鈴付青銅器・精細凹面幾何学文をつくる技術は確認できない。この種の製品は舶載品さえ日本列島には出土例がない。基本的な技術体系は北部九州に定着したものの，当時もっとも難易度の高い技術は脱落している。

青銅器の組成　朝鮮半島青銅器文化の青銅器群が北部九州に導入され，定着した点に関してもう一点注意しておくべきことがある。青銅器の用い方である。朝鮮半島では，この段階の青銅器は武器＝銅剣・銅矛・銅戈，祭祀具＝多鈕細文鏡・小銅鐸・鈴付青銅器，利器＝銅鑿・銅鉇の各種青銅器がセットで有力者の墓に副葬される。北部九州でもこれら青銅器は有力者の墓の副葬品として出土する（図5）が，武器＝銅剣・銅矛・銅戈が圧倒的多数を占め，稀に多鈕細文鏡や銅鉇が加わるにすぎない。このことは何を意味するのであろうか。私は，当時朝鮮半島由来の最先端技術を駆使して器物を製作はするものの，その青銅器群を用いる有力者とそれを見る一般の社会成員の認識に，大陸との大きな違いがあるのだと思う。簡潔にいうと，朝鮮半島においては青銅の武器・祭器・利器が一括して有力者のもとに保持され，集団構成員に繰り返し誇示されることで保有者の社会的ステイタスが担保された。しかし，北部九州ではすでにその基本形が異なっており，武器類を重視し，なおかつやがて北部九州では銅矛が優位に扱われている。また，北部九州に定着し，製作され始めた青銅器群が九州から東方に波及する際（図6）に，中国地方では銅剣が重視され，近畿方面では小銅鐸が重視されて銅鐸として飛躍的な発展を遂げる。しかも，中国・近畿周辺では青銅器の管理に有力者が関わるとしても，青銅器を用いて行われる宗教儀礼は一般の集団構成

図5　福岡市吉武高木遺跡3号木棺墓の副葬品
（『吉武遺跡群Ⅵ』1996）

銅器鋳造を担う技術者の存在を物語るのであろう。これと対応するように韓国東南部の慶尚南道勒島遺跡・金海亀山洞遺跡・茉城遺跡では北部九州の城ノ越式や須玖１式土器がまとまって出土する。九州・韓国それぞれ特定の遺跡でまとまり，在来土器との折衷も見られるが，それが広く拡散することはない。双方の技術・情報・物資を担い携えた人々が，海峡を跨いで往来する，その拠点となった集落に足跡を残した。しかし，それら土器の製作技術が定着・拡散することはない。

その後しばらく土器に大陸の影響はないが，弥生時代後期になると再び北部九州の沿岸部に楽浪郡や三韓系の土器が出土する。これは社会的成長を遂げた北部九州の有力者層が積極的に大陸の物資と情報を求めたために往来が活発になったことを反映する。しかし，ここでも大陸系土器が北部九州の在来系土器に広く影響を与えることはない。

この次に，大陸から新たな土器製作技術が導入されるのは，5世紀における朝鮮半島南部の陶質土器の採用である（須恵器）。まったく新しい土器製作技術体系であり，弥生時代以来の酸化焔焼成の土師器との二重構造となる。それは古墳時代社会の全領域に及ぶ。

このように見てくると，弥生時代開始期である夜臼式土器に，朝鮮半島系の土器製作技術が広範に受容されて構造変換を起こしていることの意味を過小評価してはならない。

（２）青銅器鋳造技術の導入

青銅器鋳造技術　前掲のように，前期末～中期初頭に円形粘土帯土器が北部九州の特定の集落で集中して出土する。この段階に北部九州に青銅器鋳造技術が導入され，朝鮮半島から青銅地金の供給を受

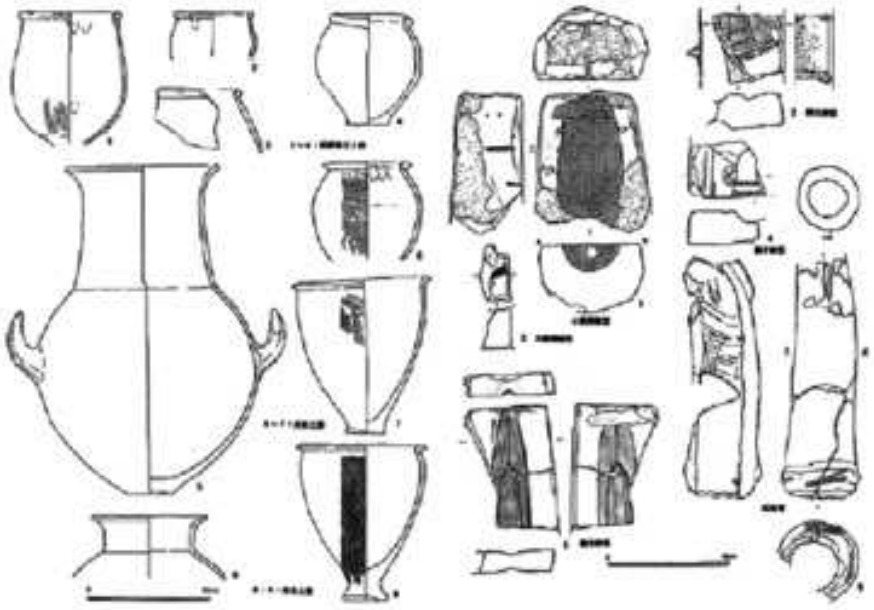


図3 熊本市八ノ坪遺跡の朝鮮系無文土器と青銅器鋳造具（『八ノ坪遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ』2005－08）

けて生産が始まった（図３）。土器や石器が，製品が手元にあればある程度は模倣が可能であるのとは異なり，青銅器は地金の入手から製品のデザイン，鋳型の製作，鋳造作業，鋳造後の仕上げ加工まで体系的な技術を要するので，それを保持する専門技術者がいなければ製作も技術継承もできない。北

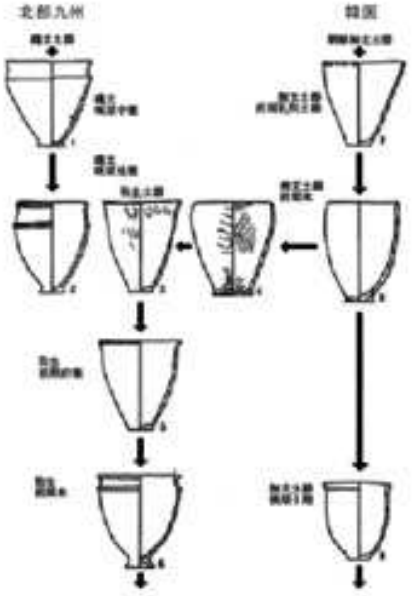


図１　弥生土器形成期に半島から土器成形技術が導入された（家根祥多1987「弥生土器の始まり」季刊考古学19）

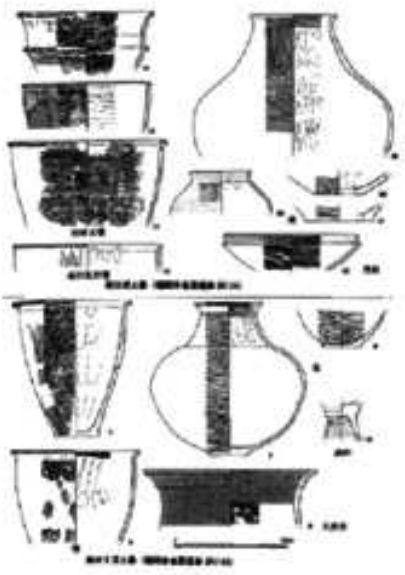


図２　夜臼式と板付Ⅰ式土器（『祖居7』2003）

年代から質・量とも資料が充実してくると境界が判別しにくくなり，弥生時代は水稲作の採用＝食糧生産社会の始まり，古墳時代は前方後円墳＝広域にわたる各地の最有力首長どうしが連携した政治的社会の始まりをもって区分するようになった。弥生時代の始まりは遠賀川式土器の出現で定めていたが，1978年に遠賀川式でも最古の板付Ⅰ式土器を伴う水田跡の下層から，従来縄文時代晩期末としてきた夜臼式土器のみを伴う水田遺跡が発見されて，下層の夜臼式土器を縄文／弥生のいずれと扱うか論争となった。1990年代末になって弥生時代早期とみなす意見が多数派となるが，それでも夜臼式を縄文土器とみる意見が根強く残っている。しかし私は，弥生土器は縄文土器に大陸からの土器製作技術が採用され，かつ東日本の装飾原理が加わって形成されたものであり，弥生時代の始まりを考える基準の一つと扱いたい。大陸からの土器製作技術を見てみよう。

そもそも縄文土器と弥生土器はどの地域でも連続的であって，縄文土器から弥生土器へと断絶するわけではない。しかし北部九州においては，夜臼式土器に朝鮮半島系の土器製作技術が採用され，それが定着して板付Ⅰ式以後の遠賀川式土器が形成される（図１・２）。その土器製作時技術とは，粘土帯を用いた外傾接合とハケメによる器面調整で，成・整形にかかる基本技術である。壺や甕の口頸部に段差を設けることや，甕の口縁部を刻む手法は在来の伝統で，壺に彩色を施す手法は遠く東日本から導入された。朝鮮半島の土器型式そのものが九州に根付くのではない。日常生活で用いる土器全般に，半島系の成・整形技術が採用されて土器型式が構造的な転換が起きた。その後はどうか。

前期末～中期前葉になると，朝鮮半島の土器型式そのもの導入される。円形粘土帯土器（水石里式）で，それは福岡県福岡市諸岡遺跡・小郡市横隈鍋倉遺跡，佐賀県小城市土生遺跡，熊本市八ノ坪遺跡といった数遺跡で集中して出土し，弥生土器との折衷土器もある。しかし他の遺跡ではごく少数しか見られない。土生遺跡や八ノ坪遺跡は青銅器を鋳造しており（図３），当時の最先端技術である青

弥生時代の渡来系技術の実像

石川日出志（明治大学国際日本古代学研究クラスター代表）

1．比較考古学という視点

古代の鞠智城を考える場になぜ弥生時代のことを採り上げるのか？といぶかる方がおいでであろう。弥生時代を専門とするゆえの私の限界だが，「比較考古学」という視点の提示でもある。比較考古学とは，時間（時代）と空間（地域）が隔たった，すなわち直接関連し合うことのない対象を比較して，それ自体を掘り下げるだけでは気づきにくい事柄・問題をつかむものだ。物事を比較する際に，どうしても類似する部分に注目してしまいがちだが，大事なのはむしろ異なる面を見出し，それを評価することである。

私は弥生時代研究でも比較考古学の手法を意識して採り入れている。もちろん大きく時空を隔てる訳ではないし，相互に関連し合う場合がしばしばであるものの，対象にのめり込むのではなく，突き放して特徴をつかむのに有効である。マイナーな東日本から弥生時代研究に入っていったことがきっかけである。通常典型とされる西日本と比較して，それとは異なる東日本の特徴を評価したり，弥生時代の中でも前期と中期と後期を相互に対比して違いや変化を見出したりする。本日は，その比較の時間幅を1000年内外まで広げてみようという次第。大陸から導入された技術がどう受容され，変容したのかに焦点を絞る。

2．弥生時代の大陸系技術

日本列島を舞台とする歴史を通覧した時，私は＜弥生時代は大きな転換期だ＞と評価する。それは，①自然の恵みを巧みに管理・利用する狩猟採集社会から稲作農耕社会に転換したこと，②この生業基盤をもとに社会変化を積み重ね，やがて古代国家形成する道を歩み入ること，③これにより日本列島に中と南・北の少なくとも三つの歴史世界が生み出されていくこと，の三点に注目しての評価である。そのもっとも大きなきっかけになったのは，朝鮮半島を含む大陸の社会との間で始まった様々な交渉である。

縄文時代にも朝鮮半島と北部九州との間で人・情報・技術の行き来はあった。しかしそれは朝鮮海峡を挟む地域内に限られ，そのことが社会に与えた影響は大きくはない。しかし，こうした限定的な往来が，次の新たな展開を用意した。つまり，海峡一帯で漁撈民として活動する海の熟達者の仲介によって，海峡を越えて人・情報・技術がもたらされ，それが根付くことによって日本列島の社会は大きく展開・転換する。本報告では，大陸系技術をキーワードにして，日常つくり使う器物である土器，当時の最先端技術である金属器，古代山城との比較という意味から土木技術をとり上げる。

（1）土器にみる大陸系技術

なぜ最初に土器を採り上げるのか。それは弥生時代の始まりを考える際に弥生土器の始まりがとても重要だからである。

日本考古学界ではかつて，縄文土器の時代を縄文時代，弥生土器の時代を弥生時代，土師器の時代を古墳時代としていた。各時代の土器は明確に識別できると思われていたからである。ところが1960

国内では花崗岩の使用は古墳時代に始まり、菊池川流域の史跡大坊古墳[8]、史跡永安寺東古墳[9]（玉名市）では重量のかかる天井や羨石に花崗岩が使用されている。しかし、その後は比較的加工が容易な溶結凝灰岩の使用が主流になる。その後、花崗岩が国内で再び注目を集めるのは6世紀末の飛鳥寺造営時以降の寺院造営まで待たなくてはならない[10]。

南側土塁線尾根上にある花崗岩転石

飛鳥寺造営時に百済から版築技法や花崗岩加工技術が工人らにより直接持ち込まれ、その後の国内での寺院建築の技術が確立する。この技術が、その後本格化するヤマト政権による古代山城築城に用いられたと考えることもできる。古代山城築城に際に百済からの亡命官人らの技術的指導があったことは文献等で確認されるが、城を築く場所（選地）、防衛目的での土塁（版築）の技術をどこに使うのかなど、城を築く思想がこの時、日本列島に伝えられてのではないかと考える。

最後に鞠智城で用いられている礎石群を構成する花崗岩技術に注目してきたなかで、鞠智城の礎石建物に一定数、花崗岩以外の種別の石材が用いられ続けていることに疑問があった。入手し易く、白色で見栄えのする花崗岩のみの礎石建物は1棟のみで、それ以外の礎石建物には花崗岩とこの地域では入手できない石材が混在して使用される。そこには各石材の産地から鞠智城築城や繕治のため集められた地方勢力の姿が垣間見える。

8世紀以降、防衛目的の城から倉庫群を伴い役所機能を有する城に変貌していく鞠智城が、ヤマト政権から地方勢力にどう引き継がれ、地元肥後の地方勢力がどう関わってくるかに注目したい。

---

[1] 『続日本紀』文武天皇二年（698年）五月二十五日条
[2] 熊本県教育委員会『鞠智城跡Ⅱ』－鞠智城第8次～32次調査報告－熊本県文化財調査報告第276集　平成24年（2012年）3月
[3] 古代山城サミット山鹿・菊池大会実行委員会『第2回古代山城サミット山鹿・菊池大会報告書』平成23年10月開催
[4] 岡田茂弘「三　城柵の設置」『古代を考える多賀城と古代東北』青木和夫　吉川弘文館
[5] 金赫基「韓国の古代山城の集水施設からみた鞠智城の研究課題」『鞠智城と古代社会－第10号－』2022
[6] 小山田宏一「渡来系の土木技術とため池・山城」『渡来系技術から見た古代山城・鞠智城』鞠智城シンポジウム2022　熊本県教育委員会
[7] 村上幸弘「鞠智城出土・銅造菩薩立像についての考察」『鞠智城と古代社会－第11号－』2023
[8] 玉名市教育委員会『史跡大坊古墳保存工事報告書』　昭和54年（1979年）
[9] 玉名市教育委員会『史跡永安寺東古墳・永安寺西古墳保存整備事業報告書』　平成18年（2006年）
[10] 廣瀬覚・高田祐一『日韓古代国家成立期における石工技術の比較研究』

令和４年（2022 年）鞠智城「特別研究」事業で『鞠智城跡Ⅱ』報告書刊行以来、初めて、仏教美術の観点から研究が加えられた[7]。引き続き菩薩立像と鞠智城築城の関係について研究が進むことを期待したい。

貯水池跡出土　銅造菩薩立像

（５）　花崗岩加工技術

鞠智城では、鞠智城Ⅱ期（７世紀末～８世紀第１四半期前半）に城を管理する建物や八角形建物などの施設が整備され城として最も充実した時期に入っている。長者原地区東側から上原地区東側にかけて、「コ」字形に配置された掘立柱による建物群や、総柱の倉庫群が作られる。更に、鞠智城Ⅲ期（８世紀１四半期後半～第３四半期）以降、掘立柱建物から礎石建物に転換が図られ長者原地区東側一帯において掘立柱建物から小型礎石建物への転換が始まる。

鞠智城では、これら礎石建物石材の多くに花崗岩が使用されるとともに、３つの城門の廂居敷にも花崗岩が使用され、堀切門跡では最大長３ｍを超える石材が確認されている。鞠智城周辺は先に選地のところで地形・地質を火砕流堆積物上に築城されていると解説したが、鞠智城灰塚から南側、西側土塁線付近から西側、有明海側に向かって花崗岩地帯が断続的に存在し、その東端に鞠智城が所在している。現在でもこの周辺では山中に入ると 1m 前後の花崗岩転石を容易に見ることができる。鞠智城で見られる礎石等に使用される加工は主に、簡易的にノミ等による敲打技法による整形で形そのものを割り出すなどの整形は見られない。

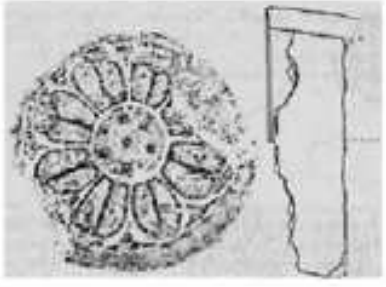
であろう木製品、銅造菩薩立像が出土している。

令和３年度（2022 年度）鞠智城「特別研究」事業において全赫基氏[5]は、鞠智城で確認された貯水池跡を朝鮮半島の古代山城の一つである河南二聖山城貯水池跡と比較した。その結果、韓国に残る古代山城の集水施設における祭儀的行為に類似性があるとし、貯水池跡出土遺物の比較等から古代朝鮮渡来系技術の一つと指摘している。また、令和４年度（2022 年度）熊本県で開催した鞠智城シンポジウムで小山田宏一氏[6]は、鞠智城で確認された貯水池跡が上流側と下流側で約９ｍ の比高差があること、また、水を貯める施設であることに注目し、上流側･下流側の貯水池内で与えられた役割が違っていたのではないかと指摘した。上流部では湧水を利用する泉井と貯木場として利用し、下流では粘土で流れを止め、水を溜め、曲池として利用していたのではないかとの見解を示した。貯水池跡が曲池であると仮定した場合、朝鮮半島の事例を提示し貯水池跡の形状等から、新羅からの影響を示唆している。併せて、貯水池跡から検出されている堤防状遺構で確認された「敷粗朶」について、地盤工学で使用される補強土工法と言う用語を用い、中国江南地方の良渚文化期（紀元前 2,000 年代）に登場したこの技術を、東アジア起源の技術として捉えている。

（４） 出土遺物

① 瓦

鞠智城では軒丸瓦、丸瓦、平瓦の３種類の瓦が出土している。うち軒丸瓦には、「単弁八葉蓮華文」と呼ばれる蓮の花をかたどった文様が施される。これは朝鮮半島の瓦の文様の影響を強く受けたものと考えられている。

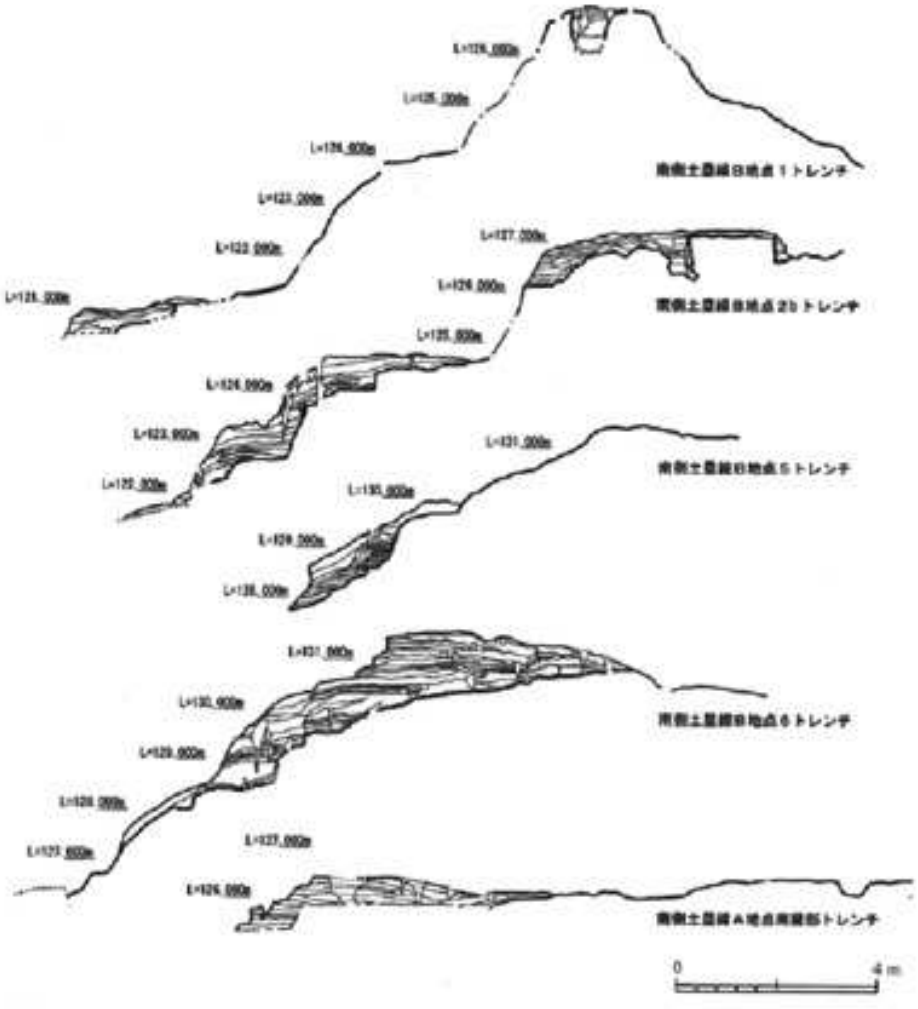


軒丸瓦（単弁八葉蓮華文）

② 銅造菩薩立像

菩薩立像は貯水池跡の池尻部底部から出土した。高さ 12.7 ㎝、最大幅 3.0 ㎝で横から見ると体部が S 字曲線を描く。顔の表情は丸みを帯び穏やかで、三面の宝冠、肩まで垂らした垂髪、両肩にかけられた天衣などもよく表現される。また、舎利容器と考えられる持物を臍の前で、両手で抱えるように持つ。この仏像は発掘調査の成果と、身体的特徴等から７世紀後半の百済仏で、朝鮮半島から持ち込まれた可能性が高いのではないかと考えられてきた。

このような地形を利用し当時、我が国に城壁築城技術の一つとしてもたらされた「版築」技術を用いて積まれた土塁が発掘調査で確認されている。南側土塁では尾根地形を段築状に成型し高所側に版築を用い土塁も築かれる。現存している土塁は版築の基底部だが、その幅は5m以上に及ぶところもありそこから復元される版築土塁の高さは数メートルに及ぶ。西側土塁線上でも版築技術を用いた場所が発掘調査で確認されており、城外に向い急斜面上の崖線に土塁が築かれた土塁が確認できる。



南側土塁線トレンチ断面

（3） 貯水池跡

長者原地区の西側、米原集落の南側に所在する谷部から平成8年（1996年）に古代山城では初となる貯水池跡を確認している。調査の結果、約5,300㎡の貯水池であることが確認され、貯水池内からは後に触れるが鞠智城内で使用されていた建築材や祭祀に使用された

いこと等も挙げられる。そこで肥後国北部の米原台地に選地された理由を考えてみたい。

鞠智城が立地する熊本県北部域は約９万年前に堆積した阿蘇４火砕流により覆いつくされ、菊池川等による浸食で河岸段丘を形成し、更に流域に沿い沖積平野を形成する。鞠智城は火砕流堆積物上の小規模な平坦部を取り込む形で周囲に小河川による谷地形を利用し、独立した丘陵と自然の土塁状地形を呈する。南側にはうてな台地が近接していることから直接城内を望むことはできず外部からの視認性は低い。現在でも城の位置を外部から特定するのは難しい。

大野城、基肄城、鬼城山（岡山県総社市）などの大半の古代山城は、外部からの視認性を意識しているが、鞠智城では外から見えない分、内部の平坦地に建物を集中的に配置するなど他の城との違いもある。このような土地を有していたことが、ここに築城し兵站基地として秘匿性を持たせる意味があったとも考えられる。戦う城、見せることで威圧する城、そして鞠智城のように兵站のため秘匿する城としての築城思想があった可能性も高い。

（２） 土塁・城門

選地のところでも述べたが、鞠智城が築城されたこの地域は火砕流堆積物が削り出した地形がよく残り、随所に痩せ尾根状地形が残る。うち、復元建物群の整備が進む長者原地区南側に所在する土塁線上には「堀切門」、「深迫門」の２つの城門が確認され、南側、西側土塁線の結節点では「池ノ尾門」が確認されている。

南側土塁線上に所在する２つの城門は、南側に車路（古代官道の一つ）が東西方向に整備されていることから、人の出入りを意識した城門と考える。また、南・西土塁の接点に所在する池ノ尾門は、西側に菊池川の支流である内田川がすぐ近くにまで流路を寄せていることから、有明海とつながる川船を使った物資搬入路として機能していた城門であると考える。

これら城門は土塁線上に位置しており城として防衛施設の一翼を担う。城跡を考える上で重要な定義の一つに、岡田茂弘氏[9]が示されている基準を用いると、『防衛的構造物＝自由な出入を規制する施設の遺構の存在』がある。

深迫門跡発掘調査地区（中央は花崗岩製唐居敷）

（1） 選地

最初にも述べたが、鞠智城は古代山城としては最も南に位置しており大宰府から直線距離で約60㎞の位置にあたる。最も近い朝鮮式山城である基肄城からもほぼ同距離の位置に位置し、神籠石系山城として知られている高良山神籠石（福岡県久留米市）、女山神籠石（福岡県みやま市）からも当時から国境であった筑肥山地の山塊群により遠く隔てられている。

西海道の駅路と鞠智城

平成23年（2011年）8月に第2回古代山城サミット（事務局山鹿市・菊池市）のプレイベントとして烽火リレー実験[3]が実施された。実験の結果、大宰府政庁跡から鞠智城まで14箇所（約100㎞）を結び、約1時間で烽火が届いている。遠く離れた肥後国北部でも緊急時にもこれだけ短い時間で連絡ができたことから大宰府周辺で万が一戦いが生じても兵站を担う城として十分に連絡がつくとして、鞠智城がこの地に選地されたと考えられる。

また、鞠智城が所在する菊池川中流域は肥後国内でも有数の穀倉地帯で古代の条里である菊鹿盆地を有し、食糧の確保と言う観点が選地にあたっての重要な要素だったともえられる。しかし、他の古代山域と比べ低い丘陵上を選地している点や、外部からの視認性の低

車路官道（点線）と鞠智城

2　これまでの鞠智城研究の取り組み

昭和42年（1967年）に地元研究者により第1次発掘調査が実施された後は、熊本県教育委員会が主体となり、令和4年（2022年）までに37次に及ぶ発掘調査を実施してきた。その結果、周囲約3.5㎞、面積約55haに及ぶ城域、うち南・西側の城域線上で土塁、3箇所の城門、長者原地区から長者山地区にかけて72棟の建物群、国内では初確認となる貯水池跡など多くの遺構を確認した。更に国内の古代山城からは初めての出土となる「銅造菩薩立像」が出土するなど、国内の古代山城の中でも調査・研究が最も進んでいる城の一つとなった。

鞠智城を管理する鞠智城・温故創生館では、平成24年（2012年）3月に刊行した『鞠智城Ⅱ－鞠智城跡第8次～32次調査報告』[7]で得られた学術的知見を熊本県文化財専門職員のみならず外部の研究者にも広げるため同年から、若手研究者を対象に「特別研究」として研究の公募を開始した。公募する分野は考古学、文献史学、歴史地理学、建築学、土木学及び美術史学等、多岐にわたり、採用された研究者には研究費を助成するなど、新たな視点からの研究を進めてきた。その研究成果は毎年、成果報告会を開催するとともに、『鞠智城と古代社会』として取りまとめ公開している。これまで延べ48名の研究者が鞠智城研究を深めてきている。

また、調査研究事業とは別に、平成16年（2004年）5月の史跡指定を契機に、更に鞠智城を知っていただき研究の深化を図り全国の古代山城との比較研究等を行い、研究促進を図るため佐藤信氏のコーディネートのもと多くの古代山城研究者、各分野の皆様の御協力によりシンポジウムを開催し研究の蓄積を図ってきた。史跡指定を受けた同年には地元菊鹿町（現.山鹿市菊鹿町）で第1回シンポジウムを開催した。更に翌年には鞠智城を全国の方々に知っていただくため「鞠智城東京シンポジウム」を開催し、その後、大阪府、京都府、福岡県でも開催してきた。令和2年（2020年）から流行した新型コロナ感染症対策期間も、オンライン開催や、熊本県内で感染症対策を取ったうえで継続し開催してきた。本年度、東京での開催は平成30年（2018年）以降、5年振りの開催となる。改めて、鞠智城を全国の方に知っていただき更なる研究の深化を図って参りたい。

3　鞠智城に残る渡来系技術

ここでは本日のテーマに沿いこれまでの発掘調査及び研究の成果から、鞠智城に残る渡来系技術について紹介する。そのためここでは昨年度に熊本市で開催した鞠智城シンポジウム「渡来系技術から見た古代山城・鞠智城」をベースにこれまでの研究で渡来系技術と報告されてきた内容を改めて紹介し、最後に近年私が研究に取り組んでいる情報を交え報告したい。

鞠智城に残る渡来系技術

長谷部善一（熊本県教育委員会）

1　はじめに　－鞠智城とは－

鞠智城は熊本県北部、現在の山鹿市と菊池市の２市にまたがる米原台地上に位置する７世紀後半、今から約1,350年頃前にヤマト政権によって築かれた古代山城である。

当時朝鮮半島では高句麗、百済、新羅の三国の争いに中国の唐が加わり、社会的な緊張が続き、660年、唐・新羅連合軍によって日本と友好関係にあった百済が滅ぼされた。日本（当時は「倭」と呼称）は百済の復興を支援するため援軍を送るが、663年に白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗し、今度は唐・新羅による国内への侵攻の脅威に直接対処せざるを得ない状況となった。

そこで、ヤマト政権は西日本を中心に防衛体制を形成し、九州対馬に最前線基地として金田城（長崎県）を築城し、当時、「遠の朝廷」と呼ばれていた大宰府を防衛するために大野城（福岡県）・基肄城（佐賀県・福岡県）が築かれている。これらの背後に位置する鞠智城は城として防衛施設であったと同時に、食料や武器を最前線へ供給するための兵站基地として同じ時期に築城されたと考えられる。

鞠智城は築城に関する文献の記載はないが、これまでの発掘調査成果等から７世紀後半頃に、大野城・基肄城とともに築城されたと考えられている。698年には大野・基肄の２城とともに鞠智城の「繕治」（修理）がおこなわれたとの記事[1]があり、初めて鞠智城が文献に出てくる。その後、朝鮮半島の緊張緩和が進むと城としての機能を維持しつつ、「コ」の字型配列の大型建物や八角形建物など、役所としての機能も整備された。更に倉庫群は掘立柱建物から礎石建物に変化し、米などを貯蔵した倉庫群が大型化するなど城の機能を変化させながら存続した。

鞠智城は、対外的な緊張がなくなった時点で廃止された他の古代山城とは違い、古代律令国家にとって地域支配に重要な城として約300年間存続し、平安時代末にその役割を終え「米原長者」の言い伝えを残し、歴史から消えた。

鞠智城米原地区

第17回 鞠智城東京シンポジウム

渡来系技術と古代山城・鞠智城
―― 渡来文化の重層性 ――

日時：令和5年（2023年）10月1日（日）13:00～17:00（受付12:00～）

会場：明治大学アカデミーコモン アカデミーホール
（東京都千代田区神田駿河台1－1）

主催：熊本県、熊本県教育委員会、明治大学国際日本古代学研究クラスター

後援：文化庁、明治大学社会連携機構、熊本県文化財保護協会、山鹿市教育委員会、
菊池市教育委員会、菊池川流域古代文化研究会、肥後古代の森協議会

―日程―

12:00	受付開始／開場
12:20～12:30	鞠智城映像上映
12:30～12:50	キャラクターステージ（ころう君&くまモン）
13:00～13:15	開会 主催者挨拶　熊本県・明治大学（来賓紹介含む）
13:15～13:35	報告①「鞠智城跡に残る渡来系技術」 長谷部善一（熊本県教育委員会歴史公園鞠智城・温故創生館 館長）
13:35～14:15	報告②「弥生時代の渡来系技術の実像」 石川日出志氏（明治大学国際日本古代学研究クラスター 代表）
14:15～14:30	（休憩）
14:30～15:10	報告③「古代山城にみる渡来系技術」 亀田修一氏（岡山理科大学 特任教授）
15:10～15:50	報告④「朝鮮三国の山城」 田中俊明氏（佐賀県立大学 名誉教授）
15:50～16:00	（休憩）
16:00～17:00	パネルディスカッション コーディネーター 佐藤信氏（くまもと文学・歴史館 館長） パネラー　報告者4人
17:00	閉会

第17回 鞠智城東京シンポジウム

令和５年（2023年）10月１日開催

資　料　編

鞠智城東京シンポジウム２０２３成果報告書

渡来系技術と古代山城・鞠智城

――渡来文化の重層性――

令和六年（二〇二四年）三月二十八日発行

編集　歴史公園鞠智城・温故創世館
〒八六一―〇四二五
熊本県山鹿市菊鹿町米原四四三―一

発行　熊本県教育委員会
〒八六二―八六〇九
熊本市中央区水前寺六丁目一八番一号

印刷　**株式会社　啓文社**
〒八六一―三一〇二
熊本県上益城郡嘉島町下六嘉一七六五
電話　〇九六―三六八―八一〇〇

史跡　鞠智城跡は史跡指定20周年を迎えました。
鞠智城シンポジウムの発表資料や成果報告書は、
（独）奈良文化財研究所が運営するホームページ
「全国遺跡報告総覧」からダウンロードできます。
「全国遺跡報告総覧」はこちら

▼

https://sitereports.nabunken.go.jp/ja

発 行 者：熊本県教育委員会
所　　属：装飾古墳館
発行年度：令和5年度
（2023年度）

この電子書籍は、渡来系技術と古代山城・鞠智城 —渡来文化の重層性— を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：渡来系技術と古代山城・鞠智城 —渡来文化の重層性—
鞠智城東京シンポジウム 2023 成果報告書
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2024 年 4 月 3 日